

# 成瀬記念館

2018

No.33

日本女子大学成瀬記念館

1901



文京区指定有形文化財

# 旧成瀬仁蔵住宅 (成瀬記念館分館) 解体移築工事完了

2015 (平成27) 年6月～2017年6月

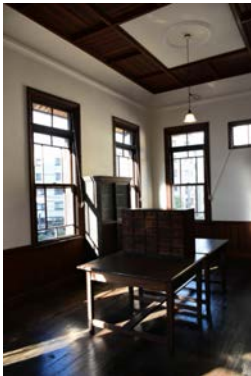
1911

2階増築



2007

文京区指定有形文化財



2017

# 西村陽平と子どもたち

## —— 作品がうまれる時

2018年1月16日(火)～3月3日(土)

本学名誉教授で造形作家の西村陽平の個展を開催。併せて西村氏が指導した附属豊明幼稚園・JWUほうめいこどもクラブ・桜楓学園こども造形教室のこどもたちの作品も展示した。



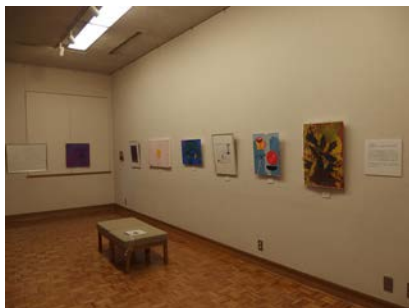
附属豊明幼稚園 5歳児作品



「古代社会」



「天平の夢」



桜楓学園こども造形教室児童作品



## 西村陽平と子どもたち-作品がうまれる時

### 日本女子大学成瀬記念館

### 2018年1月16日(火)～3月3日(土)

●開館時間：10時～16時30分（土曜日は12時まで） ●休館日：12・月曜日、祝祭日、2月1・2・3日  
 ●東京都文京区目黒62-8-1 TEL.03-5991-3376  
 ●京山子館「自由」地下室（徒歩約15分）・新館ハス納5分（日本女子大東行）学05（新館駅西口徒歩約10分）山田行（自01）日本女子大前、7車  
 庫メトロ丸根線「新大塚」駅下車（徒歩約10分） 池袋駅有楽町線「池袋」駅下車（徒歩約10分） 池袋駅有楽町線「池袋」駅下車（徒歩約10分）



「死者の書」



展示ポスター



# 成瀬記念館 2018

No.33

目次

表紙 / カット・武藤良子

	<b>口絵</b>		
		旧成瀬仁蔵住宅（成瀬記念館分館）解体移築工事完了 西村陽平と子どもたち——作品がうまれる時	
	<b>巻頭言</b>		
		成瀬記念館のデジタル・アーカイブ	大場 昌子 …… 4
	<b>随想</b>		
		成瀬記念館分館（旧成瀬仁蔵住宅） 移築修理工事の記録映画製作 リカレントについて	菅原 重成 …… 6 茂木 知子 …… 8 小澤あつみ …… 12
	<b>報告</b>		
		成瀬記念館分館の移築修理工事について	石川 秀樹 …… 16
		<b>Bloom as a leader. 時代を切り拓く卒業生</b>	
		高野悦子——世界の名画を発掘・上映する	大竹 洋子 …… 30
		日本女子大学の恩人	
		「吉野の豪傑 土倉庄三郎」	
	<b>新資料紹介</b>		
		「貫いた南朝遺臣の矜持と勤王精神」	井上 信子 …… 44
		「小林孝子の衣服標本——一八七〇年代」	
		一九三〇年代の中流家庭の衣生活	森 理恵 …… 60
	<b>新刊紹介</b>		
		『婦一協会の挑戦と洪沢栄—— グローバル時代の「普遍」をめざして』	中寫 邦 …… 68
	<b>未発表資料 39</b>	成瀬仁蔵講話 1	
		第二、三学年にて	
		大正二年六月十八日——	
	<b>研究</b>		
		シカゴ大学所蔵 成瀬仁蔵史料について……	辻 直人 …… 90
		二〇一七年度展示の記録（成瀬記念館／西生田記念室）……	
		二〇一七年度活動の記録……	94 91

## 成瀬記念館のデジタル・アーカイブ

日本女子大学学長代行  
成瀬記念館館長

大場 昌子

来年二〇一九年は創立者成瀬仁蔵先生の没後一〇〇年目を迎えます。私立大学はつねに建学の精神に立ち返り、その精神に基づいた教育を行っているか自省する必要がありますが、創立者の一〇〇回忌という節目は、その意識を高める絶好の機会です。

本学成瀬記念館のホームページから、「デジタルアーカイブ」([http://www.jwu.ac.jp/univ/facilities/naruse\\_memorial/publication\\_list/](http://www.jwu.ac.jp/univ/facilities/naruse_memorial/publication_list/))のセクションを開くと、『成瀬記念館』のバックナンバー、『日本女子大学史資料集』、『実践倫理講話筆記』がデジタル化されていて、いつでも読むことができます。同館の学芸員に聞いたところでは、成瀬先生の自筆史料（日記や手帳類）も順次手作業で電子化しているとのことでした。限られたマンパワーの中で、作業には相当の時間がかかりますが、近い将来現物のデジタルデータが公開され、成瀬先生の自筆がパソコン上でいつでもどこでも見られるようになることを想像するだけで嬉しくなるのは私だけではないと思います。

最近は様々な機関が所蔵資料や史料をデジタル・アーカイブ（アーカイブスという表記も併用されています）で公開しており、たとえば国立公文書館のデジタル・アーカイブでは、日本国憲法を含め、電子化された多種多様な資料が見られるようになっていきます。デジタル技術の向上とともにこうした地道な作業が進むことにより、私たちはわざわざ所蔵機関に足を運ばなくても、たやすく過去と向きあえるようになってきています。

そこで『日本女子大学史資料集 第一…日本女子大学校 創立事務所日誌(一)(二)』を開いてみますと、明治二九年七月一七日から明治三〇年一〇月三日まで、および明治三一年五月一日から明治三二年七月一六日までの成瀬先生および廣岡浅子氏の動向をはじめ、〇月〇日に誰が本学設立の賛成員を承諾したといったことや、たとえば明治二九年八月七日には「大和大瀧村 土倉庄三郎氏へ書状差出人廣岡夫人代筆新田」とあるように、手紙のやり取りまでも含めた詳細が記録されています。事実のみの記録ではありませんが、毎日絶え間なく、文字通り東奔西走して設立活動を積み重ねられていた様子が行間から十分に汲み取れます。私たちがそれぞれにこの日誌を読み、本学設立が刻々と実現に近づくまでの日々を追うことで、成瀬先生の強固な信念とそれを支えた人々の輪の大きさに触れることができます。

成瀬記念館は多様な役割を果たしていますが、今後このデジタル・アーカイブは、時代とともにより大きな機能を果たすことになるでしょう。

二〇一八年六月

## 成瀬記念館分館（旧成瀬仁蔵住宅）移築修理工事の記録映画製作

菅原 重成

私が成瀬仁蔵先生を知ったのは、豊明幼稚園での撮影で「成瀬先生も笑ってる 笑ってる」という歌詞\*を聴いた時です。一〇〇年以上経っても園児たちに歌い継がれ愛される先生はどんなに優しい方だったのだろうか、その人柄にとっても興味を抱きました。そんな折、成瀬記念館分館・旧成瀬仁蔵住宅（以後分館）の解体・組立工事記録映画製作のお話をいただきました。撮影が始まる前に成瀬記念館の学芸員さんから「現状の住宅（分館）を見てみませんか」とお誘いをいただき、中に入らせていただきました。静かな佇まいながらも

諸所に成瀬先生の教育に掛ける情熱が窺えました。明治時代には大学校の校舎が見渡せたであろう二階に上がってみると、書見台前に立ち優しく学生たちに微笑む成瀬先生が今でもそこにいらっしやるように私には思えました。

果たして解体工事は二〇一五年二月に始まりました。この記録映画製作には二つの目的が設定されました。ひとつは解体・組立て工事が理解できる記録映画作品として仕上げること。もうひとつは工事の工程のすべてを高精細の動画素材に残して



モニターをチェックする菅原さん

アーカイブ化することでした。この二つは全く性質の異なるものです。劇場映画でもドキュメンタリーでも作品として成立させるためには編集を行います。この編集とは思入れのあるカットを切り捨てる作業に他なりません。最後には一つのカットを選ばなくては作品が成立しません。つまり引き算の考え方で。一方アーカイブはというと選択肢が多いほど価値が増しますので撮影素材を増やしていくこととなります。こちらは足し算の考え方です。この相反する二つの目的を有する撮影は必然的に撮影回数が増えていくことになりました。解体編の撮影は二〇一五年二月六日から同年九月二二日の間で延べ三二回、組立て編は二〇一六年一月一二日から二〇一七年六月二九日の間で延べ六八回と合計で一〇〇回を数えました。ひとつの撮影プロジェクトでこれだけの撮影回数



は過去に経験のない多さでした。撮影した素材は五〇時間を超え大容量の6TBハードディスクが満杯となつてしまつたほどです。

撮影するにあつてひとつだけ決めごとを行いました。それは「工事関係者へ撮影のために工程の調整や段取りをお願いしない」ということです。ただひたすら待つことに徹して撮影する。これはドキュメンタリーを制作するときの私の持論です。待つことができれば自ずと良い画が撮れると信じています。以前「最後の鷹匠」というテーマでドキュメンタリー番組を制作したことがありますが。鷹匠の相棒のイヌワシが我々スタッフとカメラに慣れるまで何度も山形県は月山の麓の村に通つたことを思い出します。猛禽類に我々の思いが通じるはずありません。思うようにならないことが多いのがドキュメンタリーの現場なのです。

待つことでの失敗も当然のことながらありました。組立て工事が始まり、俯瞰が撮影できる場所から毎回定点撮影を行っていました。基礎から柱・梁が立ち上り、小屋組みが組みまれ、瓦が葺かれて完成までの一連を同じ画角で見せるのが狙いでしたが、途中で素屋根が掛かつて俯瞰では工事の様子が撮影できなくなつてしまいました。もちろん工程表には素屋根のスケジュールは明記されておりましたのでそれを私が読み解けなかったということです。

では今回の膨大な撮影素材の中から私が好きなショットを選ぶとしたら、やはり待つことで撮影できたカットが記憶に残っていますのでご紹介します。

まず、和室土壁の解体シーンです。工事が始まる前に被写体となる壁で構図を決めて待つていました。解体が始まると私の予想を超える土埃で

前が見えなくなつてしまいました。これは不味い、カメラが危ない。その時フレームのほぼ中央にハンマーがフレームインして壁を砕き始めました。心の中で「やった」と叫んでいました。声を出すとカメラのマイクが音を拾つてしまいますので……。通常は精密機器であるカメラを粉塵が飛び交う状況に持ち込むこと



和室土壁の解体



はまずありません。撮影後、カメラのメンテナンスはもちろんでした。

次に、基礎に柱を立てるシーンです。ここでは最近話題のタイムラプスという手法にチャレンジしてみました。インターバル撮影とも呼ばれました。長時間の工事経過を短時間で見られるように定点で撮影するのです。朝まだ柱が立っていない状態で構図を決めて、ほとんどの柱が立ち並ぶ午後までの時間で収録しました。長時間かけた撮影の再生時間はたった一分くらいになります。このポイントでは最後に柱の全てが画角にバランスよく収まってくれるかということでした。結果として一日かけた撮影は無駄にならなかつたので安堵しました。

最後に、二階の洋風書斎の漆喰壁の仕上げシーンです。漆喰壁は白い世界で変化が分かりづらいので少し長めに撮影することにしました。映

像からはどう見ても変わりのない白い漆喰を塗り重ねているだけなのですが、もう一度塗り始めたところから漆喰を塗る音が変わったのです。今までざらざらと鳴っていた音がしなくなりました。「そうか！これが一番上に塗られる仕上げの漆喰なのだ」と音の情報から気付くことができたお気に入りのカットです。

これらの撮影素材を使って日本女子大学住居学科は澤研究室のみなさんと協働で仕上げることになり「受け継がれる一〇〇年 移築修理工事から紐解く、成瀬記念館分館の歩み」という作品が完成しました。

今回の記録映画製作でお世話になった全てのみなさまに心から感謝したいと思います。ありがとうございました。

\*豊明幼稚園の歌から

(有限会社えび探

すがはら しげなり)

## リカレントについて

茂木 知子

二〇〇七年、文部科学省委託事業として「日本女子大学リカレント教育システム」が設置されました。当時の英文学科教授、ソーントン不破直子先生（後に生涯学習センター所長、現在名誉教授）のご尽力によるものでした。今ではごく普通に用いられる「リカレント教育」という言葉を、日本の大学で最初に使ったのは、日本女子大学でした。

リカレント教育システムが設置された背景には、大卒求人倍率が一倍に満たない長い就職氷河期が続いた後で、一時的に求人倍率が二倍に戻った結果、採用抑制を長く続けてきた企業では社内の年齢構成が偏

り、新卒者に対する新人教育を行う余裕はなく、入社後三年以内の離職率の高さが社会問題となるという状況がありました。ソートン不破直子先生は当時、女性のキャリア構築の難しさを痛感され、「社会人女性の学びと再就職を一体化した教育課程」を設置することを働きかけられたのです。昨年の一月に開催した一〇周年記念シンポジウムで、先生が「一〇年経った今も女性活躍とは言えない現状がある」と講演なさいました。出席された内閣府の方が「圧巻」とおっしゃるほどの気概を感じることができ、改めてこの事業を推進する使命の重要性を痛感しました。

二〇一〇年には、当時の第一二代学長蟻川芳子先生、後藤祥子先生(第一二代学長)、第二代生涯学習センター所長新見肇子先生ほかによる会議で、委託期間終了後の二〇一一年

度より生涯学習センター所管事業として継続することが決定されました。「学び直しプログラム」を始めた全国一三六大学のなかで、最終的に事業を継続したのは、本学のみでした。この会議での決定がなされず、またリーマンショックや大震災による社会不安の時期に事業を断念していたなら、いま国を挙げて取り組む「社会人の学び直し」の女性支援は、基盤を失っていたことでしょう。四〇才以上の転職あるいは子育てによるブランクをもつ主婦の学び直しの効果は難しいという、通念的な発想のまま推移し、喫緊の課題となった労働力不足解消への対応も、後手に回ったに違いありません。

本学が事業を継続した大きな理由に、創立者成瀬仁蔵先生の「生涯教育」の理念がありました。二〇一七年に修了した第一八回生製作の記念アルバム最終頁には、成瀬先生が

説いた生涯教育の真髓が記載されています。第一三代学長佐藤和人先生は、成瀬先生の生誕一五〇年記念誌『あなたは天職を見つけたか』に記される「抑も教育の目的は、人の品格を作るにあり」「立派な人格とは毎日新しい人間に生れ変わる人である。生涯を進歩の過程とし、新しい知識を求め、生きた経験を積み、幾歳になっても青年の様な旺な精神を以て益々奮闘して境遇を開いて行く人である」という文章を、修了式の祝辞に引用されました。修了生らは大きな感銘を受け、その理念をグループLINEで共有しました。再就職先や、家族との関係に悩みを抱えたときにこれを読み返し、自身を鼓舞しているといえます。成瀬先生の理念は本学の卒業生のみならず、広く女性を支え続けています。

私がリカレントを担当したのは、二〇一三年七月からです。その頃は

年度内に二回、入学機会があり、入学・修了式も二回ずつ開催、年間四回も校歌を歌う部署があることに驚きながら、歌うたびごとに、さすがにいい気持ちになったことを思い出します。

「社会人の再教育」で大切なことは、受講生の教育内容への満足度、そしてプログラムへの信頼度、その根幹を支える設置理念だと考えます。社会環境、経済状況が変化し、生涯学習センター所長（高頭麻子先生、坂本清恵先生）、リカレント教育課程主任（増子富美先生、松梨久仁子先生）を中心に、リカレント教育委員会を開催し、三年にわたってカリキュラムを見直しました。第一回生から全入学者の履修実績、また修了生アンケートを分析して検討を重ねましたが、ブランク、介護、子育て、障害をもつお子さんとの関わり、離婚、配偶者の死亡、転職、氷

河期就職など、多様なバックグラウンドをもつ対象への社会人教育の難しさを実感しました。しかし、現在も「グローバル化への対応、社会人女性のキャリア形成、社会へ参加し続け活躍をするための教育」という目的は、設置当初と変わりません。女性・高年齢・高学歴という、再就職支援が難しい条件が揃ってしまった受講生でしたが、積極的に学んだ（履修平均346・5時間）優秀な人材は必ず活躍し、新卒採用とは別の意義があると信じ、企業へのアプローチを続けました。就職氷河期においてさえ採用計画どおりに人材を確保できた企業は一握りであったものの、採用に当たり、企業内にコンセンサスを得ることが難しい状況が続きましたが、徐々にリカレント教育課程に興味を示す企業が増えてきました。

二〇一五年に「女性活躍推進法」



企業合同説明会 2017年

が国会で成立以後、新聞、TV、雑誌等の取材が続いています。少子化、労働力不足、海外競争の激化と、社会環境が大きく変化したこともあり、当課程が優秀な潜在的な人材の社会復帰を実現する点に注目が集まりました。当課程の企業説明会は、今



内閣府男女共同参画局「平成 29 年度女性のチャレンジ支援賞」授賞式後の集合写真。  
2 列目中央は坂本生涯学習センター所長。

年一四回目を開催し、見学を含めて四八社と参加企業も着実に増え、「人材の宝庫」、難しいとされてきた「高学歴女性の再就職支援」の成功例と評価されるまでになりました。

二〇一六年には文部科学省「職業実践力育成プログラム」、厚生労働省「専門実践教育訓練講座」に採択され、企業の寄付授業も増えました。各省庁からのヒアリングが続き「女性が働き続けること、社会人の学び

の効果、再就職の課題」を伝え、一〇月、一二月には内閣官房働き方改革実現推進室主催「働き方改革に関する総理と現場との意見交換会（第一&四回）」に修了生、受講生、そして私が出席する機会を持ちました。安倍首相や加藤内閣府特命担当大臣、塩崎厚生労働大臣を囲んで、受講生、修了生は当課程の教育効果や就職支援の具体的事例について、伸びやかに、そして切実な想いを語

りました。私は準備段階から当課程を深く理解してくださった官僚の方々が見守る中で緊張し、少々冷静さに欠けながら、現状と課題、そしてその根拠を伝えることに集中しました。セキュリティの高さ、メディアの多さについて坂本所長や修了生と語り合いながら、首相官邸を後にした日のことを懐かしく思い出します。

二〇一七年に内閣府男女共同参画局「女性のチャレンジ支援賞」を受賞し、坂本所長が首相官邸で行われた受賞式に出席、そして同日、同所長が登壇された「男女共同参画社会づくりに向けての全国会議」では、NHK連続テレビ小説「あさがきた」の脚本家大森美香氏も講演され、内閣府が「今日は日本女子大 Day です」とおっしゃるような、記念すべき日となりました。

二〇一八年には、政府において日

本におけるリカレント教育が本格的に検討され、内閣官房人生一〇〇年時代構想推進室による茂木大臣の視察、文部科学省シンポジウムや名古屋で行われた日本経済新聞社主催のプロジェクトでは坂本所長が講演、本学にはパイオニアとしての役割が求められています。

本学は、通信教育課程、リカレント教育の設置によって新たな循環を起し、社会人を受け入れ、女性に関わる社会の変化に敏感に反応している大学です。設置一〇年を経て、リカレント教育事業の担当として、そしてひとりの卒業生として、誇りに思います。

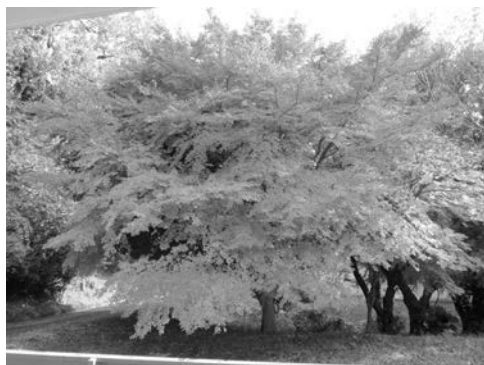
(通信教育・生涯学習事務部  
生涯学習課 リカレント教育課程  
担当課長 ともこ)

## ありがとう 楓寮

小澤 あつみ

一九六六年、日本女子大学楓寮は西生田敷地内に開寮しました。一九七六年からは附属高等学校の寮となりましたが、一九九〇年四月、西生田敷地内に人間社会学部開学と共に、大学と附属高等学校の共同利用の寮として現在に至り、ついに二〇一九年三月末で五三年間の寮舎が閉寮となります。

楓寮は自然環境には最大に恵まれた寮舎です。建物は居室の棟と食堂・浴室の棟で構成され老朽化は進んでいますが、土台の安定感を感じさせる建物です。玄関前には銀杏、栗、梅、金木犀の原木がそびえ立ち、食堂の前には寮の名称となっている楓の大



食堂前の紅葉した楓の木

木が目を引きます。

春先の早朝、鶯のおぼつかない鳴き声が目覚めさせてくれます。また、キジバトのデーデーポッポーの鳴き声も知りました。桜が散り新入寮生も寮生活に慣れたころには、新緑のまぶしい候となり、寮からの通学生活がスタートします。祝日もない梅

雨シーズンは、寮舎内の湿度もうなぎ上りとなり、歓迎しない虫たちも老朽化した建物の隙間をいち早く発見して、活発に寮舎内に無断侵入しますが、発見と同時に、寮生の鋭い悲鳴が寮舎内に響き渡り、速攻で撃沈となり無断侵入を許しません。そんなシーズンでも、寮外の通路の色鮮やかな紫陽花が、私たちの気持ちるをなくさめてくれます。

うつとらしい季節も過ぎ、木々の隙間からこぼれる日の光が厳しい光線となつて若い寮生の肌を攻撃し始める初夏の候には、鶯の綺麗な鳴き声にも聞き飽き、夏休みが待ち遠しい日々となつてきます。蝉しぐれに暑さも増加しますが、室内では高原のような涼しい風を待たま感じながらの日々です。楽しかった夏季休暇もあつという間に終わり、帰寮してまた日々の生活がスタートする候は、ひぐらしの鳴き声も終わりに近

づきます。金木犀の気持ち良い香りを楽しむ穏やかな時間は無情にもはかなく、かぐわしくないぎんなんの香りを強制的に嗅がされる日々は非常に長く続きます。肌寒さと共にイチョウや栗の木の葉がひらひら舞い落ちる候になり、見上げると鮮やかな黄色のイチョウの葉の奥には真つ青な空が広がっています。深紅のつばきや白やピンクの山茶花が咲き始めるころには寒さはしつかりと行き渡ります。食堂前のもみじの大木も今年（二〇一七年）はきれいに紅葉してくれました。これが寮生の視界にしつかりと入るのはゴミ出しのときです。大きなゴミ袋を提げて食堂のベランダに出たときですから、寒さに身震いしながら手元にはゴミ袋、目上げた先には美しさが広がり、何ともチグハグですが、現実的な世界であります。

また、建物の周囲では珍入者もい

ます。たぬきやハクビシンです。寮舎の外周防犯カメラのブザーがたま鳴ることがあります。これらの動物が無断で通過していきませんが大目に見て許可しています。ただし、近頃断りなく出没するアライグマだけは凶暴なため罠をしかけているようです。こんな自然環境下で寮生活は営まれていきます。得難い自然環境です！

寮生活、特に高校寮生の生活時間の連絡に欠かせないものにハンドタ イプのマリンベルがあります。伝統と歴史を感じさせる重厚感いっぱい





のもです。起床時・就寝時に鳴らすマリンベルの音色は様々です。ベルの振り方がうまい人の音色は、ドイツのドレスデン教会のようにカラ・コロンと余裕と余韻があります。ちょっとせっかちな人の音色は横浜山手教会のようなカラン・カランです。緊張と怖さと重さを感じながら振ると、音色ではなく、正に音というよりも騒音です。ガンゴンガシャン（！！！！！！！！）の連続で最後にはベルをテーブルに置いた時のゴトン（……）！で閉めます。

二〇一七年度の寮生は、高校生九名、大学生三九名の四八名で年度末を迎えました。高校生と大学生の居室はフロアーが別で、食事時間も異なり、生活時間も違うため、寮内での交流はほとんどありません。

二〇一八年度未閉寮のため、高校寮生は新入生の入寮がないため人数は減りましたが、その分分担仕事

が増え、慣れるまでに四苦八苦しながらの二〇一七年度のスタートでした。また今年度は三人退寮し二名入寮しました。高校寮生の場合、退寮生は家族と生活できるようになるため明るく退寮していきます。入寮生は逆に家族と離れるために寂しそうです。迎える寮生側は歓迎ムードいっぱいとなります。寮生の人数は減ったといっても先輩の存在は大きく、緊張する上下関係は存続しています。それだけに同学年での横のつながりは穏やかではっきりします。

大学寮生は三九名で、ほとんどが一年次と二年次の二人部屋です。二〇一七年度は途中退寮もなく、学年間の隔たりは少なく和やかです。二月三月は退寮者の引越しシーズンで慌ただしく寂しい時期でもあります。

寮生に共通することは、部屋がすごい状態が多いということです。でも外出時には皆、綺麗に着飾ってい

きます。どこから出てきたのか感じします！各部屋の収納家具が少ないのが一因でしょうが、整理整頓の学習は却下してきたようです。

西生田の楓寮生活、恵まれた自然環境を痛感できるのは、私達人生半ば過ぎの世代だからかもしれない。自分の将来の目標を模索する若い寮生たちにとっては、自然環境を愛でる心の余裕はまだないでしょう。駅から遠く、山道を超えないといけないので大根足になるなどの不満や不便性が優先し、意識しない、目に入らない自然環境であったかもしれません。しかし、人生の中で一番敏感で多感であり勉学の期間であるこの数年間を、人工的な騒音を逃れ、本当の自然環境下で過ごせたことは、個人の成長過程において、無意識であっても情緒的に有意義であったと確信しています。西生田のこの敷地内での寮だったからこそ体

験できた環境と思います。

このように楓寮生活が維持できたことは、料理長・管理人をはじめとする寮のスタッフ、そして寮生活を導き、見守って下さった附属高校校長先生や寮委員長の先生はじめ事務室のスタッフ、そして大学学生課スタッフの方々等々、多くのメンバーの支援があったからだと深謝しております。そして年老いてもどっしりと構えているこの楓寮建物そのものにも感謝とお疲れ様です！

二〇一八年度は楓寮生活最後の一年ですが、縁あって遭遇できたことに感謝し、寮生、スタッフと共に大事にこの一年を過ごして、日本女子大学楓寮生活に幕を下ろしたいと思えます。

(楓寮 AD兼務寮監

おざわ あつみ)



開寮の頃の楓寮

## 成瀬記念館分館の移築修理工事について

石川 秀樹

成瀬記念館分館は、日本女子大学（日本女子大）が創立された一九〇一（明治三四）年に、大学構内における教師館（教師用住宅）の一つとして建設され、大学創立者で初代校長を務めた成瀬仁蔵先生が、没年の一九一九（大正八）年まで居住していた建物である。成瀬先生生誕百年にあたる一九五七（昭和三二）年に「成瀬記念館」と命名され、その後、現在の成瀬記念館ができた一九八四（昭和五九）年からは「成瀬記念館分館」となり、現在まで大切に保存されてきた。

大学創立時の建物で現存するものは、この成瀬記念館分館一棟のみであり、「旧成瀬仁蔵住宅（日本女子大）成瀬記念館分館」という名称で、二〇〇七（平成一九）年に文京区指定有形文化財（建造物）に指定されている。また保存家具一四点も、建物に付属するものとして文化財に指定されている（これを「付指定」という）。

成瀬記念館分館（以下、分館と記す）は、このたび二〇一五（平成二七）年より三か年にわたって移築修理工事が行われ、二〇一七（平成二九）年六月二〇日に竣工した。移築が行われた直接的理由は、不忍通り（環状第4号線）の拡幅によって、旧敷地と建物の一部が、都市計画道路の予定地に重なったためである。

### 一、事業の概要

分館は成瀬先生生前の面影を伝える住居として貴重な価値を有するのみならず、日本女子大に現存する最古の建物であり、また文化財建造物であるため、移築修理の計画は、綿密な調査と方針策定のもとに進められた。事業にあたっては、学識経験者・文京区・大学担当者からなる「成瀬記念館分館移築検討協議会」が二〇一三（平成二五）年度より組織され、移築先敷地の選定や、修理

方針などの協議が重ねられた。また解体前に詳細な実測調査、仕様調査、および耐震診断が行われ、移築修理の実施設計に耐震補強が盛り込まれた。

移築先の新敷地は、正門付近の遊歩道（「泉プロムナード」）に面する見通しのよい場所が選定された。移築前の旧敷地は奥まった目立たない場所にあり、全体が高い垣根や塀で囲われ、ひっそりと佇んでいたが、今回の移築を機に文化財の積極的な活用を図り、建物を広く公開し、かつ学内の景観に活かすことが期され、この地が選ばれた。

また分館は、二階のおよそ半分（洋風書斎・書斎書庫・寝室板間）が、成瀬先生存命中に増築されたものであることが、住居学科・鈴木賢次先生ほかの研究により明らかとなっていた。一般に文化財の修復においては、後世の改変箇所を当初形式に復原することが多く行われるが、今回の工事では、建物の復原年代を成瀬先生没年の一九一九（大正八）年に設定し、二階増築後の姿を維持して、その後の改変箇所を大正期の姿に復原する方針となった。

なお分館は明治期に建設された建物であり、現在の建築基準法に合致していない部分がある。しかし文化財建物の仕様を、現行法規に合わせて改変することはでき

ない。こうした場合、建築基準法の適用除外（第3条第1項第3号の規定に基づく指定）という制度があり、建物の保存状態に一定の処置を施すことで、昔のままの姿で建てるのが可能となる。今回は、消防設備の設置、耐震補強と構造補強、周囲のフェンスを低くして危険察知を容易にすること等を条件として、この指定を受けたうえで工事が行われた。

## 二、工事の概要

今回の工事は、分館の移築修理（全解体移築修理工事）、外構（庭）の整備、および消防設備（動力消防ポンプ・地下貯水層）の設置等が行われた。

建物は一旦すべて解体し、各部材を補修、あるいは交換したうえで、移築先の新敷地において再度組み立てた。解体・組立ともに、天候に左右されずに作業が行えるよう、旧敷地（解体）と新敷地（組立）の双方に、建物全体を覆う素屋根（仮設上屋）を設営した（図20・38）。

解体工事は、事前にすべての部材に番付札を取り付け、詳細な調査と写真撮影を行いながら、二〇一五（平成二七）年六月から約三か月かけて実施された（図21～25）。解体した古材は第二学生ホール（除却予定建物）に保管し（図26）、そこで再調査を行って最終的な仕様を決定

した後、再用する古材の補修に取りかかった。

古材補修は非常に根気のいる作業である。一つ一つの部材の傷んだ部分を削り取り、そのかたちに合わせて別の木材で置き換えるものであり、これを短木あるいは埋木という。特に柱の場合は、腐朽した根元を切り取って、新しい材を金輪継ぎという複雑な仕口で継ぐ処置が行われ、これを根継ぎという(図27)。また腐朽破損や歪みのため再用できない材は、新規木材に交換し、古材の寸法・形状・仕口を写し取って、全く同じ部材を作成する(図28)。こうした作業は、主要部分だけでも大工二人で半年以上にわたって続けられた。

一方、新敷地での作業は、二〇一六年二月に着手した。既存の植え込み等を撤去して敷地を造成(図29)した後、泉山館側の敷地を一部掘削して、まず消防用の地下貯水層(鉄筋コンクリート造)を建設した(図30)。

その後、建物下の地中に、構造補強として厚さ三〇cmの耐圧盤(鉄筋コンクリート造)を打設した(図31)。これは建物全体を厚いコンクリート盤の上に建てることにより、沈下や歪みを抑止するための処置であり、柱や土台の下に見える礎石(玉石・布石)は、すべてこの耐圧盤の上に設置されている。また外周部の礎石(布石)は、移築前は房州石(房総半島産の凝灰岩)という柔らかい

石を用いた地覆石であったが、材質が非常に脆いため、今回は鉄筋コンクリートの布基礎に置き換えた。さらにそのコンクリートが外から見えないように、旧地覆石を薄くスライスして見え掛かり部分に張り付けた。

基礎工事完了後、二〇一六年六月より木工事の組立に着手し、まず土台を敷き、柱を建て、桁と梁をかけた(図32・34)。軸部の組立であり、これを建方(あるいは建前)という。今回は、腐朽破損のため、九本の柱を新規材に交換した(通し柱四本、一階四本、二階一本)。

また修理前には、柱の上・下に土台や梁がない脆弱な部分が見られたため、構造補強として、これらの箇所には補強地覆(足固の一種)や補強梁を新たに挿入した(図41・42)。このようにすることで、壁が耐震上有効にはたらくことになる。

建方完了後は小屋組の組立を行い、小屋束を建て、母屋・棟木をのせ、垂木をかけ、野地板を張って屋根の下の地を設けた(図35・36)。一般に小屋組に棟木を取り付けることを上棟といい、その頃の上棟式が行われる。分館では二〇一六年八月二五日に上棟式が挙行された。

続いて屋根工事に着手し、改質アスファルトルーフィングという強力な防水紙を野地板全体に貼ったうえ(図37)、銅板と瓦を葺き、約二か月かけて屋根の主要部分

が完了した(図39)。

壁工事は二〇一六(平成二八)年九月に着手した。分館の壁は二種類あり、竹小舞下地による和風の真壁(一階全域、二階書斎・寝室)と、木摺下地による洋風の大壁(洋風書斎・書斎書庫)に分かれる。まず真壁より始め、竹小舞を約一か月かけて掻き、屋根に瓦がのつた一〇月より荒壁塗りに取りかかった。壁塗りを瓦葺きの後に行うのは、瓦の重量で建物が引き締まった状態になってから塗らないと、あとで壁に歪みが生じるためである。

左官の工程は複雑で工期も長い。真壁の方は、予め一月に土を運び込んで切り藁を混ぜて寝かせておき(図44)、九月に竹小舞掻き(図45)、一〇月より荒壁塗り(図46)、裏撫で、裏返し塗り、貫伏せ(図47)、底埋め、斑直し、中塗り(図48)を経て、竣工直前の二〇一七年五月に仕上げ漆喰塗りを完了した(図49)。

一方、大壁の方は、二〇一六年一月に着手し、木摺(図50)を打ち付けた後、生漆喰擦り、尺トンボ(補強の繩)伏せ込み(図51)、斑直し、中塗りを経て、これも二〇一七年五月に仕上げ漆喰塗りを完了した(図54・55)。

洋風書斎の天井中心飾り(円形の装飾)は、旧材を木摺下地ごと大ばらし解体(組んだ状態のまま取りはずす

こと)して保管し、これを再度取り付けて補修を施した(図52)。コーニスのモールディング(練型・蛇腹)は、旧材のサンプルに合わせて作成した型を漆喰に当て、これを横引き(蛇腹型引き)して仕上げた(図53)。

なお今回は、壁下地に重要な耐震補強を施している。耐震診断の結果、二階に耐震要素が不足していることが判明したため、二階の六か所の壁下地に、「耐震小舞」という厚さ約3cmの板を二枚貼り合わせた厚板壁を採用した(図43)。

また二階の床下にも構造補強として合板を打ち付けたが、一般に文化財の構造補強・耐震補強というものは、このように床下・天井裏・壁内部などの見えない部分に施して、オリジナルの歴史的意匠に影響が出ないようにすることが大切である。

壁工事と平行して、各部の造作(床・天井・敷鴨居)を進め、各種設備を取り付け、最後に建具と畳を搬入し、建物の工事は二〇一七(平成二九)年六月に完了した。

### 三、分館の沿革と建築的特質

#### ①創建当初

日本女子大学の建設は、一九〇〇(明治三三)年の秋頃に着手され、約半年ほどの工期で、翌一九〇一年の



春に完成し、四月二〇日に開校式をむかえた。

創建当初の建物は、校舎二棟（大学部・高等女学校）、理科教室、寮舎二棟、教師館三棟などであった。校舎の方は屋根にドーマーウインドウ（屋根窓）を冠した左右対称の堂々たる洋風建築であったが、寮と教師館は、瓦葺き、下見板張りによる和風の建物であった（図11）。

建築監督として設計を監修したのは、学校建築に精通した文部省技師久留正道（上野の奏楽堂の設計者）であり、また三井財閥の営繕にいた横河民輔（旧三井本館の設計者）も設計に関与していた。一方、工事を請け負ったのは、校舎は赤神善三郎という大工であり、理科教室と寮舎は清水組（現・清水建設）が担当した。教師館もおそらく清水組であったと思われる。

教師館は同じ間取りの建物が三棟建てられたが、うち一棟は開校時に寮舎として転用され、まもなく音楽教室（二階）と病院（二階）になった。したがって実際に教師館として使用されたのは二棟のみであり、このうち北西隅の一棟を校長宅として、成瀬先生が居住した。

## ②分館の増改築

教師館は教師が日常的に生活する場として、明治中期頃の一般的な和風住宅の形式で建てられた。しかし成瀬先生はそこに洋風の要素を持ち込みながら、何度も増改

築を繰り返していき、分館は次第に和洋折衷の不思議な建物に変貌していった。

創建当初の各部屋は、当時一般の住宅と同じように障子と雨戸しかなく、縁側は吹きさらしであったが、そこへまずガラス戸を建てて、二階書斎の縁を屋内化した。そして背面側の平屋部分の瓦屋根上に、板塀で囲まれた広いベランダ（露台）を造った（現存せず）（図12）。現在の洋風書斎がある場所であり、ここはかつて屋根の上のベランダであった。

次に二階寝室の脇に板の間（寝室板間）を増築した（図6・13）。成瀬先生はこの寝室板間を「朝の書斎」と呼び、起床後にここで読書するのが日課であった。また同時に二階の正面側にも、手摺付きの広いベランダ（図16）を造り（現存せず）、このベランダへ出るための洋風ドア（片引戸）を寝室板間に設けた（ドアは現存）。

同じ頃、二階書斎の脇にはトップライト（天窗）付きの書庫（書斎書庫）が増築され、三方の壁全体に書棚を造り付けた（図8・14）。

その後しばらくして、背面のベランダを取り払い、平屋の屋根と小屋組を撤去して、現在の洋風書斎が増築された。ダブルハングウインドウ（上げ下げ窓）にベネチアンブラインド（錠戸）を取り付けた、天井の高い純洋

風の部屋である(図7・15)。

古い二階書斎も畳を撤去して板の間とし、和洋折衷の部屋に改修された(図8)。また一階八畳も縁境の障子を撤去して、座敷と縁を一続きの広間とし、外側にガラス戸を建てた。さらに襖を洋風ドアに取り替えて、これも和洋折衷の部屋となった(図9)。

分館の増築は、ほとんどが書斎関係であり、読書と思索の空間を充実させるのが目的であった。ベランダについても同様であり、正面ベランダは成瀬先生の思索と植物観察と天体観測の場であった(このベランダは関東大震災で破損し、現在は無い)。

但し建築の構造としては、かなりアクロバティックな手法で二階を増築しているため、時を経て柱は傾き、床は沈み、各所に相当の歪みが生じていた(図19)。今回の道路拡幅に起因する移築修理は、この建物にとっては、かえって幸いであったようである。

#### 四、復原と整備

建物を昔のあたりに戻すことを「復原」といい、今後の保存や維持管理のため、やむを得ず一部を変更することを「整備」という。また後世に改変された箇所をそのまま維持することを「現状踏襲」という。今回の工事で

は、主に建具、壁仕上げ、霧避庇(窓の上の小庇)、照明器具等の復原を行い、便器など衛生機器については、復原・整備・現状踏襲を使い分けた。

一階のガラス戸は多くが戦後に交換されていたが、はずされた古いガラス戸一〇枚が、外便所の中に保管されていた。これらの寸法や金具痕跡を調査して、もとの位置を割り出し、再用あるいは参照することで、初期の建具を復原することができた(八畳縁・六畳縁・台所・裏口)(図56・57)。また隅の四畳半では、ルームクーラー取り付けに伴って改修されたボード壁の下から、古いガラス戸が発見されたため、これを再用した(図58)。

一階の壁は、昭和後期に流行した新建材の繊維壁が全体に塗られていたが、これをすべて当初の漆喰壁に復した。八畳脇の便所は、壁に近年の化粧ボードが張られていたが、これも撤去した。

霧避庇は後世に鉄板平葺きに改修されていたが、当初は板金を葺かない板庇で、板と板の間に雨が入らないよう、目板という棒状の材が、板の継ぎ目の上に取り付けられていた。今回は各所の霧避庇を、この目板付き板庇の形状に復原したが、恒久的な維持保存のため、これに銅板を被せて整備した(銅板瓦棒葺き)(図40)。

照明器具は昭和の蛍光灯を廃して、古写真から陣笠

セードと花型セードの裸電球に復した(図59)。また六畳の床下から発見された古い木台(天井の台座)を一部再用し、ローゼット(天井の接続ボックス)は昔風の磚子製に復した。また吊り下げコードの長さを調節する轆轤玉も復原した。

三か所の便所は、当初はいずれも汲み取り式であったが、昭和中期に水洗便器に交換され、その後さらに一部が更新されていた。今回は、外便所のみを汲み取り式に復原し(図60)、汲み取り便器と地中に残存していた便壺(瓶に漆喰塗り)を復した。六畳脇便所の大便秘器・小便器・手洗器は昭和のものであったが、レトロなハイタンク式の木製水槽など、すでに現在ではなかなか目にすることができない貴重なものであるため、汲み取りには復さず、これらの衛生機器をそのまま保存して現状踏襲した(図61)。但し配管はせずに、見学用としたため水は流れない。一方、八畳脇便所は、昭和後期に大・小便所を一室に繋げ、小便器が撤去され、大便秘器も洋風便器に交換されていた。今回は建物利活用上の措置として、八畳脇便所を実際に使用できるものとし、現代的な洋風便器を整備した(図62)。

## 五、外構について

建物移築に伴い、立地と敷地形状が変わったため、外構(庭)に関しては、移築前の旧状を踏まえつつも、移築先敷地の状況に応じた整備を施した。また見学および防災上の見地から、建物が周囲からよく見えることを期したため、旧敷地を囲っていた高さ六尺の建仁寺垣(図17)や門扉は復旧しなかった。これに替えて、生垣を伴う四目垣(当初から分館の庭に存した形式)で、低い垣根を外周に整備した(図63~65)。生垣には成瀬先生が愛したムベ(アケビ科の蔓植物)の蔓草を採用した。また移築前の建仁寺垣の趣を伝えるため、高さ三尺の低い建仁寺垣を、旧位置の一部のみに復旧した(図63)。但し維持管理のため、竹類はすべて樹脂製とした。

植栽は移築前敷地にあった樹種を選択し、八畳前庭にヤマモミジ・ツバキ・モクセイ、六畳前庭にドウダンツツジ・ヒサカキ・ツバキの中木を植え、玄関前にはサザンカを、邪魔にならないよう、小さな灌木として植えた。また移築前に存した石碑と石仏も移設し、周囲にアジサイとシダをあしらった(図64)。

なお植栽一式と垣根一式は、いずれも目白会の寄贈によるものである。

(文化財工学研究所取締役主任研究員

いしかわ ひでき)

## 柿板の墨書(職人の落書き)と

### 二階増築年代

今回の工事中、旧棟二階(書齋・寝室部分)の小屋を解体した廃材の中から、一九一一年(明治四四年)四月二三日付の墨書が記された柿板が発見された。この柿板は、かつて屋根下地(土居<sup>い</sup>葺き(とんとん葺き))として使用されていたものであり、その年代から二階増築時のものと考えられる。おそらく洋風書齋、もしくは旧棟と洋風書齋の接続部(高所)に葺かれていたものが、一九五七(昭和三二年)年の屋根葺き替え時(土居葺き解体時)に取りはずされて、旧棟の小屋裏に落下し、そのまま遺存していたものと思われる。墨書の内容は、増築時の職人が記し



表

中二  
□十  
七  
山才

愛知県北設楽郡  
豊根村大字下黒川  
木挽職工

佐藤吉左衛門

明治四拾四年四月廿三日



裏

今こゝにて  
かなしき別れ  
するとも  
又合時ぞ  
あるぞ楽日

た落書きであり、愛知県北設楽郡豊根村大字下黒川の木挽職工、佐藤吉左衛門(二七才)の名がみられる。裏面には和歌が詠まれており、この若い職人が、女子大学校での作業中に思いを募らせていた人との別れを惜しむ恋の歌とも、あるいは職人仲間が将来に再会を期する歌とも、双方に解釈できる内容となっている。

さてこの柿板墨書により、洋風書齋の増築年代は、一九一一年(明治四四年)と考えることができ。しかし次のような仮説も併記しなくてはならない。仮にこの柿板が、屋根葺き替え時に自然に落下したのではなく、墨書を発見した何者かが、人為的に旧棟小屋内へ(低い位置から高い位置へ)移動したものであれば事情が違ってくる。

その場合、この柿板墨書は、洋風書齋に先行して増築された寝室板間、もしくは書齋書庫のものである可能性が浮上する。

洋風書齋の増築工事は、少なくとも数か月の工期が必要であり、その間、住居として使用できない期間も存したと思われる。したがって成瀬先生が長期間不在であった時期、すなわち欧米へ約半年間外遊した一九一二(明治四五年)年〜一九一三(大正二)年に、洋風書齋が増築されたと考えられるのが、年譜のうえからは自然であろう。しかし前述のように、柿板墨書の人為的な移動という特殊な仮定が必要であるため、現在のところは、洋風書齋の増築年代を墨書が示す一九一一年(明治四四年)年とし、今後の研究に期している。



図1 正面



図2 左正側面



図3 右背側面



図4 左背側面



図5 鳥瞰



図6 2階 寝室  
成瀬先生ご逝去の部屋。左は寝室板間（「朝の書齋」）。

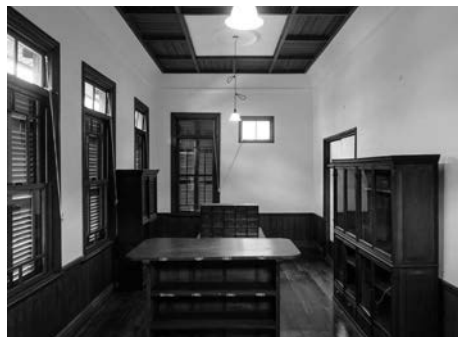


図7 2階 洋風書齋  
成瀬先生の第2の書齋として増築された純洋風の部屋。



図8 2階 書齋  
畳敷の部屋を和洋折衷に改修。右奥は書庫。



図9 1階 八畳  
縁の障子を撤去して1室に改修。



図10 1階 中央四畳半  
左は裏口、右奥は隅四畳半。



## 古写真



図11 創建当初  
明治34（1901）年。



図12 2階増築前  
明治後期頃。背面ベランダがみられる。

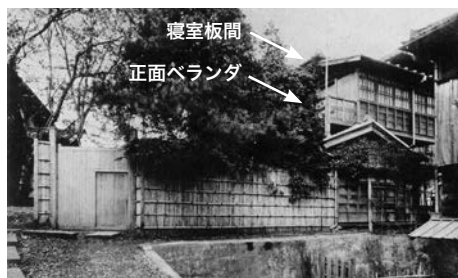


図13 2階増築後  
大正8（1919）年頃。正面ベランダがみられる。



図14 書庫の成瀬先生



図15 洋風書齋  
大橋了介による油絵。大正13（1924）年。



図16 正面ベランダ  
成瀬先生告別講演の日に撮影。

## 今回修理前（移築前）



図17 移築前 正面  
高い建仁寺垣に囲まれている。



図18 移築前 背面（不忍通り側）  
不忍通り拡幅のため移築された。



図19 移築前の建物すみ  
激しい傾斜がみられる。



## 解体



図20 外部足場・素屋根設置  
解体用の仮設足場と仮設屋根。



図21 屋根解体  
瓦葺きの解体。瓦は再利用する。



図22 壁解体  
壁土と竹小舞を撤去した状態。



図23 小屋組解体  
野地板・垂木を撤去した状態。



図24 軸部解体  
1階床組を残した状態。



図25 木部解体完了  
土台を撤去し、礎石のみの状態。

## 部材保管・補修・加工



図26 解体材格納(保存小屋)  
第2学生ホール(除却予定建物)を利用。



図27 古材補修(柱の根継ぎ)  
腐朽した柱の根元を新規材に交換し、  
金輪継ぎで継ぐ。

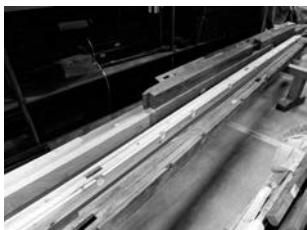


図28 新規材加工  
再用できない部材は新規材に交換し、  
古材と同じ寸法・形状・仕口に加工。

## 敷地造成・貯水槽・基礎



図29 敷地造成  
現在の敷地を造成。

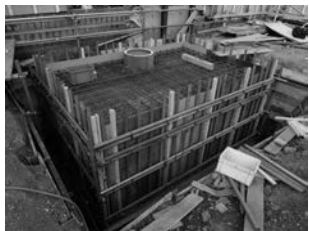


図30 地下貯水槽  
消防ポンプ用の貯水槽を地下に建設。



図31 耐圧盤・布基礎・礎石  
厚さ30cmの鉄筋コンクリート耐圧盤  
のうえに礎石を据える。

## 建方～屋根



**図32 土台据え・建方準備**  
土台を据えて、柱を並べ、建方の準備をする。



**図33 建方 1階柱・2階床梁**  
長い柱は1～2階を貫く通し柱。



**図34 建方 2階柱・桁・小屋梁**  
2階梁組が完了した状態。



**図35 小屋組**  
小屋組・野垂木が完了した状態。



**図36 野地板**  
瓦葺きの屋根下地完了。



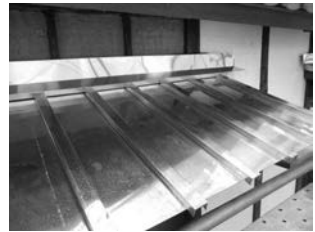
**図37 下葺き(防水紙)**  
改質アスファルトルーフィング。



**図38 素屋根**  
建方の後、屋根・左官・造作組立用の仮設屋根設置。



**図39 屋根完了**  
瓦葺きと銅板葺き。



**図40 霧遮蔽**  
目板葺き板庇の形状に復原し、銅板葺きで整備。

## 構造補強・耐震補強



**図41 補強地覆**  
土台がない部分に設置。



**図42 補強梁**  
梁がない部分に設置。



**図43 耐震小舞**  
耐震補強のため厚さ約3cmの板を2枚貼り合わせた板壁を壁下地として設置。

## 壁工事 真壁（竹小舞下地）



図 44 土練り  
第2学生ホール脇にプールを作り、土に切葉を混ぜて長期間寝かせておく。



図 45 竹小舞下地  
骨となる間渡穴を柱に差し込んで、小舞竹を並べ、縄で絡める。



図 46 荒壁塗り  
貫と同一面まで荒壁を塗る。乾燥後、裏側に裏返し塗りを行う。



図 47 貫伏せ  
貫廻りの補強。この後、底埋めと斑直しをして厚さを整える。



図 48 中塗り



図 49 仕上げ漆喰

## 壁工事 大壁（木摺下地）



図 50 木摺下地  
一部のみ木摺が斜めに打たれているのは、修理前の仕様に倣ったもの。



図 51 下塗り 尺トンボ伏せ込み  
生漆喰を擦りつけ、尺トンボを打って砂漆喰で伏せ込む。



図 52 天井中心飾り  
大ばらし解体した旧材を取り付け、周囲を塗って補修する。



図 53 コーニス 蛇腹型引き  
線型の型を作り、横に引いて仕上げる。



図 54 仕上げ漆喰



図 55 天井



## 建具・照明器具



a. 修理前（中古建具）



b. 竣工（復原）

図 56 八畳縁の建具

保管されていた旧建具（明治末期頃）を再利用して復原。



a. 修理前（寮の建具を転用）



b. 竣工（復原）

図 57 裏口の建具

保管されていた旧建具（明治後期）を再利用して復原。



a. 修理前（壁）



b. 解体中（壁中に旧建具）



c. 竣工（復原）

図 58 隅四畳半の建具

ボード下地の壁の中に残存していた旧建具（明治末期頃）を再利用して復原。



図 59 六畳照明器具

陣笠セードの裸電球に復原。

## 衛生機器



図 60 外便所

波み取り式に復原。床下に便壺（漆喰塗りの瓶）。



a. 大便器・小便器・手洗器

図 61 六畳脇便所

旧敷地に存した飛石・景石・石碑・石仏を昭和レトロの衛生機器を再利用して現状踏襲。



b. 木製ハイタンク



図 62 八畳脇便所

実際に使用できる便所として現代的な便器を整備。

## 外構



図 63 玄関前の建仁寺垣

建仁寺垣は成を低くして旧状の一部のみを再現。竹類は樹脂製を採用。



図 64 八畳前庭と石碑・石仏

旧敷地に存した飛石・景石・石碑・石仏を移設。



図 65 消防ポンプ収納箱

動力消防ポンプとホースを収納。地下貯水槽の上に設置。



Bloom as a leader.

時代を切り拓く卒業生

高野悦子——世界の名画を発掘・上映する

大竹 洋子

高野悦子さんは日本女子大学新制一回社会福祉学科卒業生、岩波ホールの総支配人として著明な人物である。男性ばかりの興行の世界で女性劇場支配人のパイオニアとして仕事をしてきた。ポルトガル功労賞、フランス国家功労賞シユヴァリエなど数々の外国の賞を受賞したほかに、国内ではブルーリボン賞、菊地寛賞、芸術選奨文部大臣賞などを受賞し、二〇〇四年には文化功労者に認定された。<sup>(1)</sup>(成瀬記念館)

高野さんが亡くなった日のこと

二〇一三年二月九日、私は記録映画監督の羽田澄子さんと午前中から行動を共にしていた。高円寺駅近くの劇場で羽田さんの映像詩「薄墨の桜」（一九七七年）が上映され、羽田さんが挨拶をする。

「薄墨の桜」は長年、岩波映画製作所の社員だった羽田さんの、初めての自主作品である。そしてこの作品を岩波ホールで上映しようと乗り出したのが高野さんだった。記録映画を、入場料を支払ってもらって上映したの

はこれが最初である。記録映画の関係者はもちろん、羽田さんも抵抗したが、劇映画もドキュメンタリーも、作家の努力に違いはないと高野さんは譲らない。こうして上映した「薄墨の桜」は立ち見席の観客も出るほどの大成功で、その後の羽田さんの新しい道を切り拓いていったのである。<sup>(2)</sup>羽田さんはこの日もそんなスピーチをした。上映後、二人でタクシーに乗り、高野さんが入院している文京区千駄木の病院へ向かった。面会禁止の報がだいぶ前から出ていたので、羽田さんは長いこと高野さん

に会えずにいたが、今日は何がなんでも病院に行くと言  
い張り、あと五分もすれば着くという時に私の携帯電話  
が鳴った。岩波ホールの石井淑子さん<sup>(3)</sup>からだだった。「今、  
高野さんが亡くなりました」。

このまま病院へ行ってもよいのかと私は躊躇した。し  
かし羽田さんは決然として言った。「行きましよう」。病  
室の前では高野さんの姪の岩波律子さん<sup>(3)</sup>が驚いた顔で  
「呼んだ？ 高野さんが呼んだ？」。羽田さんは後日、そ  
のシヨックはなんとさえよいか解らない、と書いてい  
る。私は半月ばかり前に高野さんに会っていた。鈍感な  
私は高野さんが亡くなるなど夢にも思わず、「あなたは  
そこで一人で話しているね、私は眠るから」という高野  
さんの傍らで、これが最後だとは考えもしなかった。「仕  
様がないなあ。もつと元気を出してくれなくては」と心  
の中で呟いていたのである。

数日後、私は「毎日新聞」に高野さんへの追悼文を記  
した。

高野悦子さんはペイズリー文様をほどこした濃い  
黄色のワンピースを着ていた。友人に紹介されて、  
岩波ホールのドアをたたいた1975年夏のこと  
である。ペイズリーは母の好きな柄だったから、私は

その日のことをよく憶えている。あれから38年の月  
日を、私は高野さんと一緒に同じ方向をめざして歩  
いてきた。

高野さんはどんな人かと訊ねられれば、私は「深  
慮遠謀の人です」と言う。一見できばきと物事を進  
め、単刀直入な人と思われがちだが、実は非常に思  
慮深い人だった。そして恐ろしくくらい努力する人  
だった。

岩波ホールのスタッフが集まり、もし叶えられる  
ならどの時代に戻りたいかと話し合ったことがあ  
る。高野さんは即座に「イデック（パリ高等映画学  
院）を卒業した日」と答えた。パリで学んだ日々は  
それほど大変だったのだと、私はしみじみ思った。  
深慮遠謀の一方、前進しつづける人でもあった。  
しかし前進が得意な高野さんなので、車の運転では  
笑い出したくなるほどバックが苦手だった。

映画の上映を通して女性の存在意義をしつかり把  
握し、「すべての女性運動は平和運動をもって帰結  
する」というスウェーデンの社会思想家エレン・ケ  
イの言葉を座右の銘にしていた。エレン・ケイの影  
響を大きく受けた平塚らいてうは、高野さんの母校  
の先輩である。





高野悦子さん  
(写真提供:岩波ホール)

映画「元始、女性は太陽であった―平塚らいてうの生涯」(2001年、羽田澄子監督)の製作に精魂をかたむけ、母校・日本女子大学に平塚らいてう賞が創設される土台を築いた。女性は他の光によつて輝くのではなく、自らの内面から輝くのだと宣言したらいてうの思想を、高野さんは映画人生の折々に実践した。85年に誕生した東京国際女性映画祭(旧称・国際女性映画週間)のサブタイトルを、「映像が女性で輝くとき」としたのもその表れだった。

ポーランドの旧都クラクフに日本美術技術博物館が完成したのは、94年11月のことである。87年に受

けた京都賞の賞金のすべてを基金に、アンジェイ・ワイダ監督が提唱したこの博物館建設のための募金運動を、高野さんは一手に引き受けて東奔西走した。岩波ホールの全員とその観客たちが力を合わせ、運動の輪は広がっていった。

身を挺して祖国の歴史を描きつづけるワイダ監督を応援し、心から尊敬した高野さんの一番の悲しみは、病に阻まれてポーランドに行けなくなったことだった。その死を、私はなんといいつてワイダさん夫妻に伝えればよいか、ジャンヌ・モローさんに、アニエス・ヴァルダさんに、ヘルマ・サンダースIIブラームスさんに、どう報告すればよいのか。

長いあいだの苦しみや痛みから解放されて臨終を迎えた姿は、それは美しかった。高野さんは逝ってしまった。2月9日午後2時41分、岩波ホール創立45周年の記念日だった。これは偶然ではない。危篤の数日を、力の限り耐え抜いたのだ。「高野さん、よくがんばりましたね。でもかっこよすぎますよ」と私は言った。

『毎日新聞』二〇一三年二月一八日

## ご家族のこと

高野さんは一九二九年五月二九日、父・與作<sup>よさく</sup>と母・柳<sup>りゅう</sup>の三女として、旧満州（現・中国東北部）大石橋で誕生。長女淳子、次女光子と女の子が続いたから、父は今度は男の子に違いないと楽しみに待っていたのに、また女の子が生まれて落胆のあまり、一層のこと悦んでしまえばかりに悦子と名づけたそうである。父は南満州鉄道株式会社（満鉄）の技師で、鉄道線路の敷設に大きな成果をあげた人物である。実は映画監督の山田洋次さんの父上も満鉄のエンジニアで、こちらは車輛設計を専門とされていた。山田さんは高野さんのお別れ会の弔辞のなかで、父から「高野與作さんという魅力的な先輩がいるということ」を前からきいていた」と述べられている。日本の植民地・満州で育ったという自覚をもつ高野さんと山田さんは、良くも悪くも共通の想いにつながれた同志のような間柄であった。<sup>(5)</sup>

後年、長姉の淳子さん（故人）は、岩波書店後継者の岩波雄二郎さんと、次姉の光子さんはフランス人の日本文学研究家ジャン・ジャック・オリガスさんと結婚した。敗戦間近い一九四五年五月、父に連れられて富山県下新川郡山田村（現・黒部市）に母、二人の姉と共に日本に帰った高野さんたちの生活は大変厳しかった。家族を

送り届けるやそのまま満州に戻った父は三年間も消息を絶った。母の髪はみるみるうちに真っ白になった。山田村は父の出身地で、母も富山県の出身だが、父と母の郷里は同じ富山でも大きな違いがあった。富山県には呉羽山というさして高くはない山があり、その山をはさんで呉西と呉東に二分されていた。母の生家、呉西の福岡町は加賀百万石の領地であり、代々庄屋を務める裕福な家に母は生まれたが、女性も学問を身につけたほうがよいという兄の奨めで、奈良女子高等師範学校（後の奈良女子大学）に学んだ。一方、父は富山十万石の山田村の、決して豊かではない農家に生まれた。勉強がしなかった父は家出をし、苦学をしながら石川県立金沢第一中学校に入ったあと、旧制第四高等学校に進学した。

母は卒業後、金沢女子師範学校と金沢第二高等女学校で教鞭をとり、かなり高額の収入を得ていた。二人を引き合わせたのは後に、雪の博士<sup>(6)</sup>として高名を馳せた中谷吉郎<sup>(7)</sup>さんで、母とは幼友達であり父の学友であった。「父親が死んで学費がない高野を助けてやってほしい」と中谷さんから頼まれ、母は父には名を隠して毎月学費を送ることになった。やがてこれが父の知るところとなり、ひと悶着があったそうだが、結局父は母の援助で東京帝国大学を卒業、一九二五年、二人は満州へ渡った。

父は母より三歳年下だった。

大学を卒業した父はすぐに満鉄に就職し、仕事柄、転勤が多かった。教職を続けたかった母は子育てもあつてとても働けるような状況にはなかったため、やむなく専業主婦になった。このことを高野さんが残念そうに話してくれたことがある。しかし後日、戦時下で殆ど勉強をしていない高野さんの将来を心配し、ご自分の大切な品々を売って学費を用意して日本女子大へ進学させたと、パリの映画大学に入りたいという高野さんを、父を説得して渡仏させてくれたことなどかつての母の想いが、娘の希望を積極的に叶え応援しつづけたことに見事につながっている<sup>(6)</sup>。

高野さんの外見は母親似で、性格は父親ゆずりだったと思う。豪快で統率力に秀でた父を高野さんは大好きだった。母はどちらかといえば娘を甘やかすという感じはなく、かつて務めた教師の面影の強い女性だった。しかし先に父を失い、母との二人暮らしが長くなった高野さんの介護と親孝行は驚くばかりだった。

## 日本女子大学へ入学

満州から富山県に引き揚げた高野さんは、すぐに県立魚津高等女学校に編入し、魚津弁という独特な方言を使

う級友たちと、晩年まで親しい関係が続けた。一九四六年三月魚津高女を卒業。その頃に見たアメリカ映画「キューリー夫人」は、高野さんに強い影響を及ぼした。女性も社会的な仕事を通じてすばらしい人生を送ることができ、自分も何か打ち込める仕事をしようと思命に考え、同年四月に日本女子大学の生活科学科に入学した。しかし四八年四月に女子大が旧制専門学校から新制大学に改組されたのを機に、家政学部社会福祉学科に転科した<sup>(7)</sup>。上京後に見聞した戦後日本の高揚した波のなかで、社会科学への関心を高め、社会に貢献したいという気持ちはいよいよ燃え上がった。

## 南博先生、そして映画へ

社会福祉学科で学び始めた高野さんは、アメリカから帰国したばかりの社会心理学者・南博先生の授業を受けることになった<sup>(8)</sup>。そしてここで「映画」と出会ったのである。はじめは先生から与えられた課題、「マスメディアとしての映画」が、社会福祉とどんな関係があるのか不審に思った。しかし「福祉を小さく考えてはいけない。ハンディキャップのある人を助けるのも福祉だが、健康な人を楽しませる娯楽も福祉だ」と先生は教える<sup>(9)</sup>。娯楽は英語でリクリエイションという、即ちリ・クリエイト

「再創造」<sup>10</sup>、映画は見る人に新しい活力をもたらせるのだ、と先生は巧みに説き、俄然興味を持った高野さんはたちまち映画にのめり込んでいった。

南博先生は一橋大学でも講義をもっておられた。その南ゼミに日本女子大学の学生が加わり「社会調査委員会」が発足した。研究会は一年後には「社会心理研究所」と改名し、機関誌『社会心理』を定期的に発行するに至る<sup>11</sup>。高野さんたちが行なったのは映画館の観客調査と上映作品の分析だった。「真空地帯」「ひめゆりの塔」「雲流るる果てに」「君の名は」などを調査・分析。他の研究グループのテーマ、ラジオ・新聞・出版・流行歌・婦人問題等と並んで活発な研究活動をつづけていった。当時の日本映画界は黄金期にあり、次々に名作が生まれる毎日を、高野さんは二つのお弁当をもって映画館に通いつめ成果をあげた。

大学卒業後、一九五二年に東宝株式会社の製作本部署に入社、ここでも学生時代の続編ともいえるべき製作企画調査を受け持ったのである。だが実際に映画製作の企画を立てシナリオを作成する部署・製作本部で働いたことが、結果的には高野さんを次の人生に引き出すことになった。自分も映画を作ってみたい、それには撮影所へ配置してもらわなければと希望をもつが、「女は駄目」

の一言でたちまち挫折する<sup>12</sup>。高野さんの心は日本が駄目ならフランスがあるとフランス留学へと向かってゆく。

### フランス留学

一九五八年に東宝を退社してパリに渡ったものの、実はフランス語が全くできなかった。高野さんがめざしたのはパリの高等映画学院・イデック (IDHEC、現 FEMIS) である。イデックは一九四三年にフランス映画の振興を目的に創設された、映画の技術を専門的に学ぶ学校ということまでは知っていたが、一八課目もの試験をフランス語で受けなければならぬとは思ってもよらなかった。外国人には特別の計らいがあるだろうと暢気に構えていたのだが、それは入学規則書が読めなかったからである。しかし、だからといって日本に帰る訳にはゆかない。周囲の人々の反対を押しつけてやってきたのだから。

毎日泣いている高野さんに「あなたが自分で決めたことではありませんか、あなたが頑張るしかないでしょう」と母の声が聞こえてくる。高野さんがフランス語を覚えようと決心したのは、セーヌ河のほとりで犬に吠えられた時だそうである。いくら追い払っても追ってくる犬に、通りがかりの男性が何か言うときぐに犬は逃げていった。その時、ああこの国は犬でもフランス語がわかる、

と高野さんは気づいた、という落語の落ちのようなエピソードを高野さんは持っている。高野さんの猛勉強が始まった。すでに二九歳になっていた高野さんにはつらい日々だったが、二か月後のある日、最初は鳥の囀りにしか聞こえなかったフランス語が、地下鉄の中で人の声に変わったのである。

こんな思いをして、努力をして、高野さんはイデックの試験に最下位の成績で入学した。そして三年間の学校生活を真剣に過ごし、最優秀学生の一人となって卒業したのである。その日、学校の玄関ホールにある世界地図には、卒業生四八番目の国として「日本」の上に日の丸の旗が立てられたという。<sup>(1)</sup>

### 信念の芽生え

フランスまでやって来ても、イデックの監督科に女性は高野さん一人だけだった。加えてスパルタ教育で鳴らすイデックで、同級生は若い男性ばかり。それでも耐えぬいたのに、極度の疲労による低血圧で医師から二か月間の静養を命じられ、出席日数が足りなくなった高野さんは二年生に進級できなくなった。即ち落第である。こういう辛い経験をプラスに変えてゆくのが高野さんの身上で、一年生を二回やれば同級生は二倍になる、フラン

ス語も上達している、高野さんのイデック生活はみるみる豊かになっていった。

卒業製作も卒業論文も最優秀作品に選ばれた。卒業製作は短編映画「広島の娘」である。日本から送られてきた週刊誌の実話を基に考えたものだが、広島原爆投下からもう一六年もたっているというのに、まだ後遺症で死ぬ人があるということが全く理解できない外国人と、高野さんは激しくやりあった。<sup>(2)</sup> 高野さんの正義感の発露であり、原爆を人々に知らせようとした高野さんの、それからずっと続くことになる女性運動と平和運動への信念の芽生えだった。

フランスに残って仕事をするのに十分な資格を得たにも関わらず、高野さんは日本に帰ってきた。一九六二年のことである。イデックのクラスメートたちから日本の伝統芸術について質問されても、高野さんは十分な返事ができなかった。国際人になるためには自国の文化を勉強しなければ、高野さんはそう決心したのである。

### 帰国してからの六年

フランスに留学して四年たらずの不在の間に、日本映画界の衰退は著しく、テレビが勢いを増していた。無名の女性が分け入る隙などどこにもない。高野さんはテレ

ビドドラマに挑戦した。脚本家から演出家への道も拓けた。しかし、本来の目的である映画監督になる一歩手前で足を掬われた。イデック時代に訪れて好きになったポルトガルを舞台に、脚本も出来上がっていた日本ポルトガル合作映画「鉄砲物語」の企画が盗作されたのである。<sup>(16)</sup>

失意の日々を過ごしていた丁度その頃、岩波ホールが完成した。一九六八年二月九日に幕をあげた岩波ホールは、始めは多目的ホールで、貸しホールも行っていた。そして高野さんは開幕初日から総支配人だった。ホールのオーナーであり義兄にあたる岩波雄二郎さんの抜擢人である。高野さんは「よいことなら何をやっててもよい」という岩波さんの申し出を受け入れることにした。<sup>(17)</sup>

岩波ホールの運営責任者になったものの、高野さんはどうすればよいのか見当がつかない。しかし（ホール開き）での作家・野上彌生子さんの祝辞が、その迷いを吹き飛ばした。

神田のこの一角のホールを、学問、文化、芸術の、可愛い小さいがどこにもないような独特な花園に育てあげてもらいたいと思います。

この言葉を耳にした瞬間、目の前の岩波ホールが一変した。二三二席しかない殺風景な空気に虹がかかってきたと、高野さんは後に述懐している。<sup>(18)</sup>



カンヌ国際映画祭(1993年5月)  
右は筆者(写真提供:岩波ホール)

また岩波ホール創立一〇周年の折に、英文学者・中野好夫先生がホールの会報『友』に寄せてくださった文章にも大いに励まされた。

(前略) 悦子さん、これからも自愛してがんばりなさい。とにかく一〇年間、創業の困難をやりぬいてきたのだから、もうそう簡単につぶれることは絶対にないはず。

ヴィヴァ、エツコクン!<sup>(19)</sup>

このときの高野さんの嬉しそうな顔が忘れられない。数え切れないほどの先生方や友人の支援を受け、懸命に働くホールのスタッフと共に岩波ホールは成長していった。



## エキブ・ド・シネマ

多目的ホールのプログラムは内外の名作映画講座、学術講座、音楽シリーズ、古典、民俗芸能シリーズ等が次々に成功、岩波ホールの名を世に出すことになった。だが次第に映画の上映に収斂されていったのは、高野さんが映画人間に他ならなかったからである。

一九七四年二月、世界の名画を発掘上映する「エキブ・ド・シネマ」運動、通称エキブが誕生した<sup>20</sup>。エキブというのはフランス語で仲間（同志）を意味する。高野さんの最大の仲間は日本映画界の女性パイオニア、川喜多かしこさんだった。こうして岩波ホールは映画のロードショー劇場となり、高野さんは元祖ミニシアターと呼ばれるようになったのである。

ちなみにエキブの上映作品は二〇一八年七月現在で、五七か国二四九本になる。上映日数の多いものをあげると、宋家の三姉妹（香港）、八月の鯨（アメリカ）、森の中の淑女たち（カナダ）、眠る男／父と暮せば（日本）、芙蓉鎮／山の郵便配達（中国）で、「宋家の三姉妹」は四六週も上映した。ほかにも大地のうた（インド）、ねむの木の詩がきこえる／早池峰の賦（日本）、ピロスマニ（ジョージア）、家族の肖像／木靴の樹（イタリア）、旅芸人の記録（ギリシャ）、大理石の男／木洩れ日の家

で（ポーランド）、落穂拾い（フランス）、おばあちゃんの家（韓国）、母たちの村（セネガル）などが観客の話題を集めた。どの作品にも語りつくせない思い出がある。

## 女性に対する視点

かつて柳真沙子<sup>21</sup>という映画評論家がいた。あまり知られてはいないが、高野さんのペンネームである。先に記した「社会心理研究所」時代に用いた名前で、映画雑誌に女性についての論文を発表していた。柳は言うまでもなく母上の柳さんに由来している。このペンネームを使って「ファンレターの研究」「怪奇映画と観客」「女性観客層の研究」「美空ひばりの十年とその役割」などを執筆した<sup>22</sup>。一方では本名高野悦子で日本の母もの映画の分析も行い、いずれ「母もの」は日本社会の変化につれて消えてゆくだろう、と予見もしている<sup>23</sup>。

高野さんの女性に対する視点はこの頃から全く揺るぎがない。女性観客に比して映画会社の遅れが問題である、と明言しているのである。その思想と意志は後に、岩波ホールの上映作品や一九八五年に始まった東京国際女性映画祭<sup>24</sup>の誕生に一直線につながってゆく。自らが体験した映画監督への夢の挫折が、映画界で働く女性たちに向けた強力な応援歌となったことを忘れずにいたい。美空

ひばりについては、歌、映画共にひばりの成長を喜びその真価を表して「大衆に夢と、楽しみを与える偉大な人と生長した」と声援を送っている。

踊りの好きな人だった

二〇〇〇年五月三〇日、ポーランドの旧都クラクフに設立した日本美術技術博物館、愛称 *Mangha* のホールで韓国舞踊を披露した。前日に高野さんは七一歳になった。クラクフの町じゅうに白い衣をまとった高野さんのポスターが貼ってあった。舞台は大成功を収め、高野さんを「女神」と呼んでいたワイダ夫妻は、公演後のパーティーでクラクフの民族衣裳を贈り、出席者全員がポー



2005年5月、クラクフの町中に貼りめぐらされたポスター。韓国舞踊を舞う高野さん  
(写真提供：岩波ホール)

ランドのナショナルソング「百年生きろー」を歌った。高野さんの生涯最良の日だった。

韓国舞踊の指導者に推奨された韓国現代創作舞踊の第一人者・金梅子<sup>キムメグミ</sup>さんは、高野さんに「チマチョゴリを着せ、全身をじっと観察してから「お教えしましょう」と言ってくださった。高野さんの七〇歳の手習いが始まった。日本舞踊の稽古もしていたし、仕事で赴いたキューバでは寸暇を惜しんでサルサも習っていた。でも韓国舞踊がもっとも相応しいと私は思っている。その韓国舞踊好きは、「伝説の舞姫 崔承喜—金梅子が追う民族の心」(藤原智子監督 二〇〇〇年)に結実する。<sup>(25)</sup>

モダンダンスのアキコ・カンダは附属中学校から日本女子大学で学び、アキコの二人の姉も日本女子大学の出身である。アキコの舞台を見た高野さんは「この人は天才ね。記録に残しましょう」と即座に言った。程なく完成した「AKIKO—あるダンスの肖像—」(羽田澄子監督 一九八五年)。その続編「そしてAKIKOは：〜あるダンスの肖像〜」(二〇一二年)の撮影中に羽田さんはアキコの死に直面している。この二本は東京国際女性映画祭の第一回と二七年後の最終回(二〇一二年)で上映した。「女性映画祭は「伝説」になった」と評価されたのは二つの「AKIKO」のおかげ

である。

長いあいだテレビドラマの演出をつづけ、七七歳で映画監督に挑戦したせんぼんよしこさんの「赤い鯨と白い蛇」(二〇〇五年)。主演の香川京子さんとせんぼんさんはテレビの脚本家時代からの高野さんの友人で、戦争を決して忘れまいとする、女性ならではの本当によい作品だった。二〇〇四年に文化功労者に認定されたお祝いの会で、高野さんは母校の校歌を歌ってほしいと注文した。私もその草創に加わった桜楓会合唱団(日本女子大学合唱団<sup>(26)</sup>のOGコーラス団)の出番である。一遍で校歌が大好きになった香川さんは今も私たちに言う。「日本の文化をおこす使命があるんでしょ」と。<sup>(27)</sup>

還暦を迎えた一九八九年、高野さんはシネマ君と結婚した。仲間たちが仕組んだパーティの座興だったが、中には本気にする人、驚きのあまり椅子から転げ落ちる人もいた。シネマ君になってくださったのは映画評論家の淀川長治さんである。この日を境に高野さんの服装は赤一色になった。

### 印象深い映画の数々

ドイツの女性監督、マルガレーテ・フォン・トロツタさんの「ローザ・ルクセンブルク」(一九八五年)を、

モントリオール映画祭で高野さんは身を震わせて選んだ。血のローザと怖れられていたローザが平和を望み、武力蜂起に抵抗し、獄舎の庭に小さい花壇をつくって拘禁の日を耐えぬいた優しい女性だったことを知り、観客の誰もが感動した。<sup>(28)</sup> 社会学者の鶴見和子さんは、ホール開きの野上彌生子さんの言葉を高野さんとホールのスタッフが肝に銘じて守ったからこそ、ローザの小さい花壇は「可愛いちいさい花園」と響きあうのだと、ホール創立二〇周年の『友』に書いてくださった。

同じくドイツの女性監督ヘルマ・サンダース＝ブラームスさんは、作曲家ヨハネス・ブラームスの一族で、彼女の「ドイツ・青ざめた母」(一九八〇年)は、戦争シーンを描くことなく戦争の無益さを告発した秀作である。たびたび来日したブラームスさんと私は「ブラームスの子守うた」を一緒に歌うのが慣例になっていた。高野さん逝去の報を受けたブラームスさんから、すぐにファクシミリが届き「ベルリンと東京で、高野さんに向けて毎日、子守うたを歌いましょう」と記されていた。しかしブラームスさんとその翌年には亡くなってしまった。私は約束を守ってこの五年間、空の上で笑いながら見ているであろうあの背高の二人を想いつづけながら毎夜欠かさず歌っている。

日本とポルトガルの合作映画についても触れておきたい。「鉄砲物語」が不首尾に終わったあと、高野さんはイデックの同級生、ポルトガル人のパウロ・ローシヤ監督作品「恋の浮島」(一九八二年)の日本側プロデューサーをつとめた。故国を離れ日本の徳島で孤独死をとげたポルトガルの作家・モラエスの物語は評論家・加藤周一さんの絶賛を得るほどの名作となった。

高野さんには楽しいエピソードが沢山ある。NHK朝のテレビ小説で高野さんを主人公にという話が出たらしいが、中国、フランス、ポルトガルと舞台が広すぎることに、何より問題なのはラブストーリーにならないことだと聞いてみんなで大笑いしたことがある。フィクションでもよいから見たかったと思う。

フランスの女性監督アニエス・ヴァルダさん、女優優で女性映画祭の恩人ジャンヌ・モローさん、セネガルの監督ウスマン・センベールさんたちとの交流の記憶は、高野さんと私たちスタッフにとって大切な宝物である。私たちは多くのことをこの人々から学んだ。

高野さんは「あの鐘を鳴らすのはあなた」という歌が好きだった。歌詞の一節「町は今限りの中　あの鐘を鳴らすのはあなた　人はみな悩みの中　あの鐘を鳴らすの

はあなた」という<sup>ハ</sup>あなたは、私たちみんなに向けたものと思っていた。しかし今、気がついた。<sup>ハ</sup>あなたは高野さん自身のことだったのだ、あの鐘は一生をかけて自分が鳴らす、という強い意志の表明だったのだと。

(一九五八年文学部国文学科卒業　エッセイスト・

元岩波ホール企画室長　おおたけ　ようこ)

注　本文中の注の挿入・作成は成瀬記念館(大門泰子)がおこなった

(1) ほかにもポランド功労勲章、キューバ友好メダル、日本映画テレビプロデューサー協会特別賞、エイボン女性年度賞女性大賞、川喜多賞、勲三等瑞宝章、正四位旭日重光賞(二〇一三年二月九日没後追贈)など多数の受賞・受章がある。

(2) 高野悦子『心にひびく映画―興行の世界に創造を―』(岩波ブックレットNo.138　一九八九年)三五・三六頁

(3) 日本女子大学新制25回国文学科卒業生。高野さんの信任もあつく、秘書として働いた。

(4) 長姉淳子さんと岩波雄二郎さん夫妻の長女で現在岩波

ホールの支配人。兄の力さんは同ホールのオーナーをとめている。

(5) 『友 IWANAMI Hall No.378 高野悦子追悼号』(二〇一三年七月)。高野さんは著書『黒龍江への旅』(新潮社 一九八六年)で満州への思いを綴っている。

(6) 岩波ホール時代、筆者はご両親の係でもあった。高野さんがカンヌやベルリン等の国際映画祭に出張している間、文京区弥生の高野家を訪れて、お茶やお菓子を一緒にした。仲のよいご夫婦で、病弱な妻を優しく助ける夫、悠然としている妻、そんなご両親の許で、高野さんは岩波ホールの仕事を成功させたと筆者は述べている。

(7) 一九四六年四月に日本女子大学校(旧制)へ入学した者のうち希望者が一九四八年四月に開設された日本女子大学(新制)の二年生となり、一九五一年三月に新制一回生として卒業した。社会福祉学科は一九二一年創設の社会事業学部が前身で、家政学部第三類、家政学部管理科と名称を変え、新制大学発足時は家政学部の一学科であった。

(8) 一九四七〜五一年度に「社会調査」「社会心理学」の授業を担当した。

(9) 『みどり会ニュース 92号』(日本女子大学社会福祉学科卒業生の会 二〇〇一年三月)

(10) 『桜楓新報 629号』(日本女子大学同窓会新聞 二〇〇五年三月)

(11) 社会心理研究所が母体の一つとなって、一九八二年に日本心理センターが開設され、南が所長となった。

(12) 『日本女子大学教養特別講義第十五集 日本をみつめるために』(一九八一年 三〇頁)

(13) 『友 IWANAMI Hall No.321』(一九九九年四月) 三頁

(14) 高野悦子『私のシネマ宣言』(一九九二年 朝日新聞社) 三九〜四四頁

(15) 高野悦子『シネマ人間紀行』(一九八二年 毎日新聞社) 八二〜八六頁

(16) 『私のシネマ宣言』四六・四七頁

(17) 高野悦子『岩波ホールと〈映画の仲間〉』(二〇一三年 岩波書店) 五頁

(18) 『シネマ人間紀行』一二二頁

(19) 『友 IWANAMI Hall No.109』(一九七八年二月)

(20) 『日本をみつめるために』三九頁

(21) 順に『キネマ旬報』No.141(一九五六年三月)、No.181(一九五七年七月)、No.187(一九五七年一〇月)、No.202(一九五八年四月)

(22) 『日本母性愛映画の分析(共同研究)——「母もの」は何故泣くのか泣かせるのか——』(『映画評論』一九五一

年五月号)

- (23) 「国連婦人の一〇年」にあたる一九八五年の第一回から二〇一二年まで二五回開催された。「世界の女性監督の紹介」と「日本の女性監督の輩出」の目標を掲げ、高野悦子さんがジェネラルプロデューサーをつとめ、筆者はディレクターをつとめた。上映本数は三〇二本、参加は四二か国、出品監督は一五九人。詳細は『第二五回東京国際女性映画祭フィナーレ 映像が女性で輝くとき』参照。高野さんと親しく励ましあった仲であった土井たか子さん(政治家・故人)、赤松良子さん(現日本ユニセフ協会会長)も映画祭には欠かさず出席していた。土井さんは、映画「若き日のリンカーン」に感激して弁護士を志し、京都女子大から同志社大学に学士入学した経歴をもつ。一方、赤松さんは一九八五年の男女雇用機会均等法の成立に尽力した人で、高野さんのお別れの会で弔辞を述べている。三人は男性社会のなかで数少ない立場におかれた女性同士の友情を育んだ。
- (24) ワイダ監督は二〇一六年一〇月九日に急逝。遺作『残像』は二〇一七年六月に岩波ホールで上映された。
- (25) 藤原智子監督は羽田澄子監督と並ぶ日本の優れたドキュメンタリー作家。
- (26) 大竹洋子「上代先生と日本女子大学合唱団」(『成瀬記念

館No30』二〇一五年)

- (27) 日本女子大学校歌の歌詞に「ここに生まれて日本の文化をおこす使命あり」という一節がある。
- (28) トロッタ監督の「ハンナ・アーレント」(二〇一二年)のエキブ上映は高野さんの没後のことだった。





「吉野の豪傑 土倉庄三郎

―貫いた南朝遺臣の矜持と勤王精神―

井上 信子

はじめに

「死にぞまは生きざま」と言われる。本稿の主人公は成瀬仁蔵が景仰し、その永別の風景を、「吉野の森林の中に……山の姿、水の流れ、鳥の聲、蟲の音が一々翁の美しい人格の上に意味あるもの、やうに思はれて感慨深からしめた」と書き記した人物である。名を土倉庄三郎（以後、「土倉翁」、「庄三郎翁」、「翁」と表記）という。土倉翁は奈良県吉野郡川上村の「富豪の林業家」として名を馳せ、数々の偉業を遺して、その由緒ある山あいの村で生涯を閉じた。

川上村は、奈良盆地や和歌山平野を潤す吉野川の上流に位置し、人口一四五五人、面積約二七〇平方キロメートル、内九五パーセントを世界屈指の人工林と言われる

森林が占めている（平成三〇年三月現在<sup>③</sup>）。吉野は古来より「修験道の聖地」と呼ばれ、京の都に程近く、濃い霧と清浄な空気に満たされた山々には、かつて中央を追われた後醍醐天皇や源義経など、多くの落人たちの「隠れの里」という伝説もまた残されている。

翁はこの村の大滝に一八四〇（天保一一）年に生まれた。祖は、南北朝時代に活躍した武将の一人、楠木正成の三男、楠木正儀といわれる。父・庄右衛門と母・京の間<sup>④</sup>に生まれ、幼名を丈之助といい、一六歳で庄三郎と改名して、一三代目当主を継いだ<sup>⑤</sup>。二六歳で妻・寿子を娶り、その間に六男五女をもうけた。この頃にはすでに庄三郎の名は、吉野の名林業家として世に知れ渡っていた。

## 一 土倉庄三郎翁の貢献

翁は、産業が著しい発展期を迎えた明治の日本にあって、若き日より頭角を現し、私財を投じて川上村内外のインフラを整備拡充し、吉野木材を日本中に安定供給して莫大な財を成し、林業による富国を首唱し、自由民権運動の旗頭であった

板垣退助の洋行に総額二万円（現価値四億円）を寄付し、日本立憲政党新聞社の設立にも資本金の大部分を負って活動を支援した。<sup>(6)</sup>

これらにより、翁は板垣をして「土倉は財あり義あり」と言わしめ、

「自由民権運動の台所は大和にあり」と謳われ、また別名を「吉野の



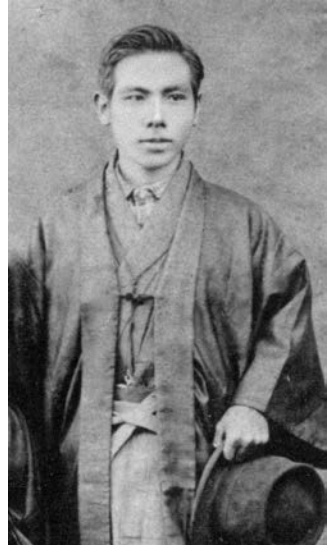
山林視察中の土倉翁(前列中央) (成瀬匡章氏蔵)

豪傑<sup>(9)</sup>とも称された。翁はまた、国家有用の人材育成を旨とした教育活動への寄付も惜しまず、一九〇一年（明治三四年）、国内初の組織的な女子高等教育機関、すなわち日本女子大学校が誕生する折、三井家と同じく多大な資金援助によって設立に寄与された。

## 二 土倉庄三郎翁と成瀬仁蔵の出会い

土倉翁と成瀬の親交は、一八八〇（明治一三）年の大阪梅花女学校にて成瀬が主任教師であった時期に遡る。開校したばかりの梅花女学校に、翁が自分の娘四人を含めた女子六人を預けるため来訪したのだが、顔を合わせた成瀬に「どうかこの子供達を頼みます。尤も、この子供達は初めて家を出たのであるから、必ず淋しくもなり悲しくなつて郷里に帰りたくなつたり又親への手紙なども何を書くか知れないから手紙は一應先生が目を通して下さつてから投函させて下さい」と伝えた上で、「帰りたいなどと申したら厳しく叱つて下さい」と頼んで去つていった。これが女子教育について翁と成瀬が語つた最初の日であったといふ。<sup>(10)</sup>

なお子女の入学をきっかけに、翁は運営資金に苦慮していた梅花女学校へ一〇〇円（現価値二〇〇万円）の寄付を行ったのだが、こうした信者外からの寄付金と自給



梅花女学校時代の成瀬(1879年)

主義精神の対立を巡り、学内の意見が衝突した結果、一八八二(明治一五)年に成瀬は同女学校を辞職するに至る。<sup>(12)</sup>その後、成瀬は一八九〇(明治二三)年から一八九四(明治二七)年までキリスト教と女子教育を学ぶため渡米、帰国後に『女子教育』を出版し、本格的に日本女子大学校創立の運動を始めるにあたり、改めて土倉翁の住まう川上村を訪ねたのである。<sup>(13)</sup>

### 三 土倉庄三郎翁と日本女子大学校創設

成瀬の語る計画に耳を傾けた翁はすぐさま「大賛成である。私の考へはあなたの考と一致して居るからどうかおやり下さい、私は發起人になります」と力強い言葉と共に三井家令嬢の廣岡浅子氏を紹介くださり、後日、そ

れぞれ五〇〇〇円(現価値一億円)をご寄付くださった。折しも不況の時代、成功する確約もない「女子高等教育機関の設立」という成瀬の厚望に対し、世間の反応は決して芳しいものではなかった。だがそれを知った土倉翁が、仮に失敗に帰す事態になるならば、援助者からの寄付金は必ず返済を保証すること、加えて「それ等に關する費用はいくらか、らうとも自分と廣岡夫人とで引受けやう」と実質的な後見に立つことで、有力者の賛助獲得に繋がっていった。

こうして大学創設運動に関わる諸経費を委ねられた成瀬であるが、あるとき病を得て伏せていたところ、土倉翁が見舞いに訪れた。そこで翁が目当たりにしたのは「漸く膝を容れるばかりの小さな部屋に、垢のついた夜具をかけて寝て」おり、非常に疲弊して痩せ衰えた成瀬の姿であった。<sup>(14)</sup>既に幾千円という莫大な資金が手元にあったにも関わらず、これは国家須要の事業に対して捧げられた資金であり、一銭たりとも自己一身の安逸の爲には用いまいとする成瀬の誠実無私な姿に、翁は落涙を禁じ得なかつたという。<sup>(15)</sup>

成瀬曰く「揺籃中ノ保母タリト謂フベシ(ゆりかごの赤ん坊に対する保母の愛)」のような支援に後押しされ、一九〇一(明治三四)年に日本女子大学校は開校した。

その際にも翁は創立委員として援助下さり、逝去される一九一七（大正六）年まで本学の評議員を務め上げられたのである。

当時、土倉翁が寮生を前に説かれた話が記録に残されている。談話の中で翁は、幾つかの女学校への風潮批判を混じえる一方、しかし日本女子大学校は、真に、わが国の将来を託するに足る人材が育てられるであろうと太鼓判を押し、また今日の日本女子大学校は盛大になっているが、実はこの成功を見るまでには、創立者・成瀬仁蔵が女子の為、国家の為、人類の為という信念を持って、艱難辛苦を耐えることよって成功したのであり、このことを末永く忘れず偉大な教訓として学んで欲しい旨を語られている。

以上のように資金面のみならず、精神面においても格別の厚意を寄せて下さった土倉翁の存在が、ようやく歩み始めた本学にとってどれ程の拠所であったかは想像に難くない。しかしながら卓越した経営手腕で知られた翁が、女子大学創設という先例のない取組みに対し、なぜ長年にわたる物心両面の力添えをして下さったのか。その理由を改めて考えた時、ひとつに土倉と成瀬、両者の志の一致が挙げられよう。

#### 四 土倉庄三郎翁と成瀬仁蔵の人生哲学―教育百年の計―

土倉家は当時三井家と比肩する富豪であった。翁は当時の現有財産であった一〇〇万円（現価値二〇〇億円）をいかなる用途に使うかに関して、「之を三分して三十萬圓は祖業相傳の爲め子孫に譲るとし、他の三十萬圓は國家有用の事業に使用し、残り三十萬圓は凡百の教育事業に供せんと欲す」――つまり三分割し、三分の一は子孫に残し、もう三分の一は國家有用の事業に使い、残りの三分の一は教育事業に使いたいと明言し、これを実践された。

成瀬の『天職』にまつわる有名な一節には、「吾天職ハ婦人ヲ高め徳ニ進ませ、力と智識鍊達を豫<sup>あた</sup>え、アイデアアルホームヲ造らせ人情を敦シ、國ヲ富し、家ヲ富し、人ヲ幸ニし、病より貧より救ヒ、永遠の生命を得させ、罪を亡ボシ、理想的社會ヲ造ルニアリ<sup>20</sup>」とある。職業も立場も異なれど、人間として「いかに生きるべきか」という人生哲学において両者は軌を一にしていたと思われるのである。

さらに翁はかねがね当時の学校について憂慮を抱き、「唯<sup>ただ</sup>知識を注入することばかり骨を折つて、良心を啓發するとか、品性を陶冶するとか、人物といふものを養成する點<sup>てん</sup>に至つては、概して等閑に附せられて」おり、そ

のような有様では「自分の子どもを教育するに不都合なばかりではない、国家将来のために甚だ憂ふべきことである」と批判している。けれども訪問した成瀬の語る教育観、さらに『女子教育』を読んだ時、その人間形成の肝要な部分が漏らさず書かれていたので感激し、廣岡夫人とともに支援下さったのである。

人間形成(教育)とは、一九四七(昭和二二)年の「教育基本法」公布当時から「第一条 教育の目的…教育は、人格の完成を目指し「後略」と冒頭に明記され、二〇〇六(平成一八)年の改定を経ても削除されることなく残された課題であるが、裏を返せば現代においても未だ模索の止まぬ根源的かつ永続的な問題であると思われる。はるか一世紀も前にそれを見据えていた者同士が出会い、互いの理想に感応した結果、翁は吉野杉を「百年の計」を以って生育してゆくように、成瀬の語る女子教育の百年後の精華を信じて見守って下さったのではないであろうか。

「爾来何につけても土倉さんとこの学校とは深い関係を以て今日の校風を築いて来たのでありますこの校風の一要素には必ずや土倉さんの人格が織りこまれてその意志が現に継承されつゝあるのであります」と、成瀬は述懐している。

## 五 土倉庄三郎翁と吉野林業

翁の人生に戻ろう。翁が生涯を賭けて発展させた「吉野林業」の歴史は古い。もともと吉野山の寺院建立のため重宝され、室町時代に木材の需要が増えたのを機に造林が進み、秀吉の直轄領となった際には大阪城や伏見城の建築材としても使われたという。さらに江戸中期になり吉野へ「樽づくり」の技術が入ったことで盛期を迎えた。その特色は、密植により節がなく、年輪が密で真つすぐな樹木に育て、多間伐(一五年間隔で伐採)により、太さに応じて様々な用途——一五年目の樹木は稲を干す台、三〇年目は工事現場の足場、四〇〜五〇年目は床柱。端材は割り箸・蒲鉾板・経木・マッチ棒——に用いてすべてを活用すること等にある。

土倉翁の「経営手腕」は、まず一つに樹木の価値が高騰した明治期の時流を見逃さず、二つに、吉野林業の密植、多間伐といった方法によって上質に育てた樹木を太さごとに商品化し、木材の廃棄率を引き下げた。三つは、材木の安定供給である。河川の改修や道路の開削によって、吉野から木材の大量の搬出を可能にした。そして四つは、内国勸業博覧会の出品や奈良公園への植林で全国に吉野木材をPRし、その価値を効率よく知らしめて

いった。吉野山の千本桜を保護したのも翁であった。まさしく「情報と流通を制した近代林業のバイオニア」と言えよう。

とくに、奈良公園では「原生林を伐採後に杉松を植林して連続的永久収入を得る」林業経営を提案し、成功させたことが、後の富国殖林思想形成の一助となった。

一八九八（明治三一）年『吉野林業全書』、翌年『林政意見』を刊行し、一九〇二（明治三五）年『再ビ林政ノ刷新ヲ論ズ』を発表し、そこでは「若し主務大臣にして未だ森林の利益を詳知せずとすれば幸いに吾人の言を聴かれよ。又知て之を顧みずとすれば請ふ吾人に其理由を詳示せられよ（原文旧字体）」と政府の林政に対する苛立ちを滲ませている。翁は「富国殖林殖林救国説」という「理想」を抱いて各地を遊説した。この「殖」が「植」ではなく、利殖を生む「殖」になっていることに注意されたい。戦争は勝てども軍事費・人員の損失は多大で、国家の損失につながる。しかし、我が国の原野を拓いて林政に力を注げば、莫大な富を築きやがて国力が増強するという考えである。山県有朋が大いにこの説に賛同し、翁の還暦祝いに「樹喜王」の号を贈っている。

## 六 土倉庄三郎翁と教育

—西太后に愛された次女・政子—

一八七二（明治五）年、「学制」が發布され、義務教育制度が設けられた。大滝では翁の多額の寄付により七六年に大滝小学校が発せし、八二年に私学校「芳水館」が新たに開校した。これは長男鶴松のための私学校であったが、教育内容の充実が評判を呼び、郷里の青少年のために正式に門戸の開かれた私立中学校へと移行したものである。

実は翁自身は正式に学問を修めておらず、自らが感じた困難や不自由な思いをしないように、との我が子に対する願いから、並々ならぬ教育熱心な一面を持っていた。そして土倉家六男五女はいずれも嗜み・教養・学問を十二分に学べる環境を与えられた。

次男・三男の同志社入学と時を同じくして、一八八〇年に四女までが大坂梅花女学校に入学している。設立間もない女学校に娘たちを預ける土倉翁の判断とは、成瀬の目から見ても「今の人が洋行することよりも尙大したこと」であり、「女子教育などといふことは寧ろ反対の多い時にも係らず、大和の奥から卒先（※原文ママ）してその子女に教育を受けさせるといふことさへ非常な英断である」と感銘を与えるものであった。



そして土倉家の子女たちは後に同志社女学校に転校した。次女・政子はアメリカで七年間の留学生活を過ごし、帰国後に外務省欧米局長・内田康哉（後の外務大臣）の妻となり清国に移住した。列国の外交官夫人の多くが通訳を介する中で、英仏独のほか清国語を習得した語学力、上品で出過ぎない振舞いが、西太后に「日本人はわれらととてもよく似ておる」と好意的に受け入れられ、園遊会の日などは「太后陛下は、内田公使夫人のことを大変に礼儀正しい方だととても賞めておられ、お会いするのをいつも大変喜んでおられました」といった様子が女官に記憶されている。

だが、この両者の親交は個人的な場面に留まらず、日露戦争という政治的局面においても影響をもたらしている。戦争末期の一九〇五（明治三八）年奉天会戦、ロシア軍の包囲を目指して進む日本軍だったが、途中で清国の定める中立地帯を横切らねばならなかった。当時の外交官のちに土倉家へ密かに伝えたところによると、日本軍の進軍を清政府が黙認したのは、政子による西太后への働きかけがあったからであるという。日露戦争前には「中国（※原文ママ）とはなんの關係もないが、両国は中国の領土で戦うだろうし「中略」ならかの形で清国が損害を受けることになるかも知れぬ」と懸念を隠

さなかった西太后の言を踏まえると、政子との逸話が真実であるならば、破格の厚遇であったと推察できよう。

## 七 土倉家の衰微

時は移り、明治末期、土倉翁は「国のため人のためとは思えども成すことごとくにあやまりしかな」という歌を詠んでいる。どこことなく無常観の漂うこの一首は、当時まもなく古希を迎えようとしていた翁に降り掛かった夥しい苦難を思うと、その悲痛な心境が一層偲はれる。末広がり繁栄を続けると思われていた土倉家だが、後世の「大和の山奥を以て身を置き志を伸ばすに小なりとし、出て、都會の群英と交を結び、大に四方經營の氣焰を吐く」という人物評通り、跡継ぎとして乳母日傘で育てた長男・鶴松が夢見たのは、山林事業ではなく中国大陸での成功であった。山林王として盤石の地位を築き上げた父・庄三郎を超えようと血気に逸ったのか、それとも他の男兄弟に先んじて台湾で林業・水力発電等で堅実な成果を挙げていた次男・龍次郎への対抗心が遠因であったのかは定かではないが、鶴松は、水牛の革を高品質な牛革のごとく加工する技術を謳った「擬革」事業を立初めとし、現実的な構想を欠いたまま数多くの事業を立ち上げ、企ての数だけ失敗を重ね続けた。莫大な損失の

補填のため銀行から高利の借入を行った際、父にも無断で抵当に差し出したのは、一族の収入基盤である豊かな山林であった。それからほどなく「財産」は差し押さえられ、土倉家は経済的に衰退の一途を辿ることになる。

## 八 土倉家の「家訓」(家憲)

財産を使えば減るのがものの道理である。だが、前述したように翁は国のため、人のために私財を投げ打って貢献された。それはなぜなのか？翁の魂に刻み込まれた「何か」に心を寄せてみたい。ここでは家訓を取り挙げる。

『土倉家の家憲』は(一)「須く恭謙遜讓なるべし」、すなわち控えめに、そして他者を敬うという心構えから始まり、(二)「主人は一家の模範なれば他に先ちてヨリ多く勤勞せよ」とある。次項は土倉家において最も重要とされているのだが、(三)「公共慈善に對しては決して人後に落る勿れ」である。

土倉庄三郎の父・庄右衛門氏には、丁稚小僧を伴って近郷へ外出した時も、人目がなくなる五社峠に差し掛かる頃には背から荷物を外してやり、肩代わりして年少の丁稚を労わった話や、飢饉に襲われた村々には各戸の人数を調べた上で、上市から米穀を継続的に届けさせた話、

さらに泥棒に当座の生活費を持たせて改悛を誓わせたという逸話が残っている。慈徳の人物であったに違いない。その父の背を見て育ち、林業においても一五歳から伝来の技法を父から継承し続けた庄三郎翁である。

さらに(四)「一家相和して相信じて共に家業を励め」、その上で(五)「自ら儲く可き金の三分は人に儲けさせよ」、そして(六)「祖先を敬し父母に孝なれ」とある。この「父母に孝なれ」は、翁と庄右衛門氏によつて体现された以下の逸話が伝わる。

老境に入った庄右衛門氏は森林を見て歩くのを唯一の楽しみとしていたが、足腰が弱つてからは籠で移動するようになった。しかし野山の急勾配に駕籠かきが息を切らせているのを見かね、息子の庄三郎翁に「私をおぶり、山林を巡つてくれ」と願ひ出る。そのまま道々に談笑しようではないかと語る父の気持ち息子は汲み、十数年、共に育んだ森林と溪谷を、父親を背負つて歩いたそうである。決して楽な道程ではなかったと思われるが、「父の喜色溢る、を見て、己の勞を忘れし」という。

そして(七)「子弟の教育を重んじ智を研ぎ徳を修めしめよ」だが、これは実子への教育のみならず、村内への子ども達の教育環境整備の面からも窺い知れる。一九一六(大正五)年に京都の御大典式場拝観に川上村から

小学校生徒七〇〇名が旅行した際、翁は「京都へ行くについては又何かと費用もかゝることであらうから」として一人につき一元（現価値二万円）ずつ全員に、それも大事にならぬよう学校に直接預けて送り出したという。

そして（八）「勤儉質素を旨とし徳を履んで他を化せよ」、この「履んで」というのは「そのように行動して」という意味である。「他を化せよ」とは「周囲を感化しなさい」であり、「立派な行いをして人に影響を与え、心を良き方向へ変えさせなさい」である。翁の一生を振り返れば、家訓を遵守し、生を全うされたと言えるであろう。

だが自由民権運動の全盛期、「自由民権運動の金をとりにくる御客が無暗に多かつた」と村人の目に映ったように、土倉家「伝来の善心」を利用せんとする輩が存在したことも、また事実なのかもしれない。だが、翁は人物を峻別してそれ相応に待遇したのではないかと推察する。翁は借金の返済には厳しく、利息を一分も負けず、はじめをつける人であったという逸話も残されている。

## 九 土倉家の「出自」——南朝遺臣中の遺臣——

翁の生きたまを思う時、川上村が後南朝の地であり、翁にはその郷土たる勤王精神が流れていることに想いを馳せずにはいられない。

川上村神之谷・金剛寺に今も奉られるこの歴史的遺跡を手掛かりに、翁の生涯を通じて貫かれていたと感ぜられる「愛郷心」と「国益のための献身性」、その源流がどこから来るものであったのかを、川上村「後南朝伝説」の紹介とともに紐解いてゆきたい。

「明德三年（一三九二年）に、南北朝合一がなされた際に、南朝と北朝は交代で皇位につくことが約束された。しかしその約束は守られず南朝の皇子たちは命を狙われて吉野に逃れた。その後、長祿元年（一四五七年）に北朝方の赤松家一党によって、南朝の流れを受け継ぐ自天王（尊秀王）は若くして悲しい最期を遂げた。その惨事を伝え聞いた川上郷士たちは赤松家一党から自天王の御首を取り返し、金剛寺に手厚く葬ったと伝えられる。自天王の御首を奪い返した川上郷士の雄志は代々語り継がれ、長祿三年（一四五九年）から五〇年以上、毎年二月五日に、遺品の兜（重要文化財）などを拝する朝拜式が行われている」（奈良県川上村『朝拜式』の一部分を改変）。後南朝は断絶し、南北朝の動乱は終焉を迎えたが、現代でも川上郷では「なんておさま（南帝王様）」として尊崇の念は深い。

翁の祖先は、赤松一家から自天王（尊秀王）の首を奪い返した南朝一番筋の臣下である。つまり「川上精神の

中心たる尊秀王は即ち翁の守本尊まもりほんぞんにして、翁はあくまで南朝遺臣中の遺臣たり、翁一生を通ずる公共心も畢竟是れ五百年間連綿たる南朝魂の發現に外ならず」<sup>(33)</sup>なのである。生前、親交の深かった者たちが翁に感じた印象として口にするのは、「勤王精神」「愛郷心」という言葉である。

成瀬は「土倉庄三郎翁は大和國吉野郡川上村大瀧と云所に在る五百年以前からの舊家で、かの南北朝時代に、畏くも後醍醐天皇が行在所を吉野に置かせられた時から土倉家はその土地の人々と共に南朝の爲に忠勤を励んだ家の中でも最も優れた豪家でありました。庄三郎翁はそういう家の裔でもあり土地柄が既にさういふ風な歴史を持つた場所であるから、「中略」その一生を一貫した翁の性格といふものは眞に昔ながらの誠心に充ちた而もそれは近代化した尊王愛國の實を以て現はされて居るのであります」と語っている。

## 一〇 翁の葬儀

晩年の翁は、特に家業の面で多くの憂き目に遭いながらも、川上村で長男鶴松の残した孫六人の面倒を見、森林の学びに訪れる者を指導する合間、囲碁と読書に耽る(34)という静かな余生を送った。そして一九一七（大正六）年七月一九日、七七歳で翁は逝去された。

川上村には、江戸中期から浄土宗の信仰がある。浄土宗は法然上人の「ただひたすらに『南無阿弥陀仏』の念仏を唱えよ」、なぜなら阿弥陀は「念仏を唱える者は必ず救う」と約束されているから、という御教えのもとに唱え続ける信仰である。土倉翁は逝去される一年前に「五重相伝」を受戒し、念仏の方法を習い、信仰を深める行を修めた。そして五重相伝を受けられた者だけが、戒名に「誓」という字を戴くことが出来る。戒名は「樹善院じゆぜんいん教誓寿山明道大居士きょうせいじゆざんめいどうだいこじ」である。

二二日に葬儀が営まれた。目白から山坂越えて参列した成瀬は、「翁の葬儀」と題して以下のように回想している。

「翁の葬儀はやはり浄土宗の式によつて執行された。生前の知人・朋友がその葬列に加わつて念仏を唱えながら菩提寺に向かつていった。村の老若男女が立ち並んで心から永別の札をもつて見送つていた。皆、大方は泣いていた。その情の純朴な様、しかも実に静肅で、最も眞摯な態度をしていた。この宗教的気分というものに感じ、『宗教というものは、ライフさえあれば形式は何に依つてもよいものだ』と感ぜしめられたことであつた。吉野の森林のうちに、七七年の生涯を送つた土倉翁の、こうした意義ある終焉の日々を見送りつつ行くと、その山の

姿、水の流れ、鳥の聲、蟲の音が一々翁の美しい人格の上に意味のあるもののやうに思はれて、感慨深からしめた<sup>(7)</sup>（筆者要約）。

筆者は成瀬のこの文章に触れた時、道元の和歌を連想した。

「峰のいろ 谷のひびきも 皆ながら わが釈迦牟尼の声と姿と<sup>(8)</sup>」である。これは道元が京都の宇治に興聖寺を開創した折に詠んだとされ、山の色は釈迦の清らかな姿を、谷のひびき、すなわち谷川の流れる音は釈迦が説法をされる時の声を（想起させる）、といった意味になる。我々人間が名誉や地位や利益にとらわれず、肉体と精神を超越するならば、自然も惜しみなくその深奥を表し、実はそれは人間存在の「本来の面目<sup>(9)</sup>」でもあるというこゝとを歌っているのであろう。

### おわりに

翁の葬儀から二年後の一九一九（大正八）年一月に廣岡浅子氏が、そして三月に成瀬仁藏が鬼籍の人となった。その四〇年後の一九五九（昭和三四）年、伊勢湾台風で土倉屋敷は崩壊した。「洪水を免れた文書の中に板垣退助の礼状と洋行費用の領収書が発見された。板垣はその手紙の中で、積年の志を果たせる、と感謝を示し、領収

書には『板垣退助洋行費トシテ御出金被下正ニ領収候也』とあった。本証書により三井家が出資したという定説が覆された<sup>(10)</sup>（筆者要約）という。実は、翁は壮年の頃、資金援助のみならず自由民権運動そのものに参加していた。翁は「日本立憲政党内に六万円（現価値一億二億円）を寄付したとの報道もあり、加入して会計監督に就き、演壇に立つて『自由の説民権の論』について熱弁を振るつた<sup>(11)</sup>」のである。一八七四（明治七）年に板垣退助らが、民衆が選挙で選んだ議員が参加する議会、すなわち国会の開設を要求する「民撰議院設立建白書」を提出して始まった自由民権運動は、一八八一（明治一四）年に、伊藤博文により一〇年後の国会開設を約束した「国会開設の勅諭」が出され、一八九〇（明治二三）年に実現して実を結んだ。

晩年にかけて土倉翁は私財の多くを喪失したが、板垣退助および自由民権運動への支援により、民衆とともに「自由」と「民主主義」、そして「国会開設」を勝ち取るという偉業に大役を果たした。そして一二〇年たったいまもこの運動は、「新しい社会づくりを、人任せにせず、自分たちの手でやり遂げようとした点に自由民権運動の特徴があり、．．『新しい社会』について考えるために、歴史のなかの自由民権運動を冷静に見つめてゆきたい<sup>(12)</sup>」



旨の価値がある。

翁が晩年を穏やかに過ごされた理由は、わが国の皇統を守り続けた一番筋の遺臣として、日本国のための偉業を支え得たという安堵であるうか。あるいは、現世のこの「一切は皆苦」、実体のない「諸法無我」であり、あらゆるものは移ろう「諸行無常」であるという、仏教の三つの「理」を受け入れられたゆえであろうか。あるいはまた、生きながらにして、阿弥陀仏に導かれて西方浄土に至り、悟りを得られたのであろうか。

他方、成瀬は晩年に、「様々な宗教や思想の調和・交流を目的とした『婦一協会』を結成し、日記の中で自らの天職を『社会改良者』である」(筆者要約)としている。そして、「私が六十年か、つて畢生の努力を以て築き上げた私の靈體即ち私の品格は、靈の宮は永久に亡びないのであります」(66)「永遠不朽の生命とは畢竟価値の永続保存に外ならぬ」(65)という言葉を遺している。成瀬も誠実無私に生きた人であった。この「個人の価値」が究極の高みに至ったとき、キリストの仁愛、釈迦の大慈悲のような永遠無欠の価値と出会い、ここまで達すれば生命というものは永遠である」(筆者要約)ということであろう。そして、成瀬は一九一九(大正八)年一月に告別講演を行い、三月、「永劫に生」(67)った。

偉大なおふたりの「靈」の行方は異なるのかも知れない。しかし後世を生きる我々を、その生きざまによって感化するという意味において、おふたりは限りなく我々の「師」である。ともに翁の生きざまに触れ、吉野に向かった筆者のゼミ生たちは、「日本女子大学を誇りに思い」「三綱領に血が通った」ことを、翁のお位牌に手合わせて伝えた。そして、「人のために」という言葉からだに入ってきたと筆者に告げて、ひとりひとり思い定めた道に進めた。(68)かくいう筆者も、「本学創立にあたる成瀬の艱難辛苦を忘れてはならない、偉大な教訓とせよ」という翁のお言葉を、ただ「創立者の臥薪嘗胆を忘れるなかれ」と受け取っていた。しかし、おふたりのご生涯に触れた今は、「艱難辛苦を乗り越えて、天職における新たな道を切り拓き、社会を変えるのは他ならぬ自分自身なのだ」の洞察を得た。これらこそが土倉庄三郎翁と成瀬仁蔵が「百年の計」を抱いて育てようとされた、「感化の教育」による人間形成であり、われわれが受け継ぎ、次世代に手渡ししていくものである。翁の教育に対する悠大な眼差しが永久に本学に注がれ、そのご意志が連綿と受け継がれてゆくことを願って止まない。

(註) 本稿は、二〇一六年六月二三日、目白の桜楓館に

て開催された「成瀬仁蔵先生生誕記念日の集い」において、「山林王・土倉庄三郎翁―理想・経営・愛―」と題して講演した内容に加筆したものである。

謝辞 川上村の皆様、とくに松本博行様（NPO法人芳水塾）、木村全邦様・成瀬匡章様（森と水の源流館）、春増薫様（村議会議員・林業家）、辻谷達雄様（杉人）、古瀬順啓様（龍泉寺ご住職）、吉野かわかみ社中様、川上村役場様、栗山忠昭村長様には、講演・執筆への全面的なご協力、また学生への格別なお導きを頂きました。深く感謝申し上げます。さらに、本稿は田中淳夫様の『森と近代日本を動かした男 山林王・土倉庄三郎の生涯』（二〇一二年）から多くのご示唆を頂き、また直に資料のご紹介、お励ましも頂きました。厚くお礼申し上げます。

（日本女子大学人間社会学部教育学科教授

い の う え の ぶ こ

### 【引用文献】

- (1) 『家庭週報』第四二九号（一九一七年八月一七日）。
- (2) 奈良県川上村「川上村のプロフィール」  
〈<http://www.will.kawakami.nara.jp/life/docs/2017013100120/>〉（2018/04/25）
- (3) 奈良県「奈良県のすがた 2017―グラフと解説で見

る統計ガイドー」〈[http://www.pref.nara.jp/secure/190341/part\\_04\\_2.pdf](http://www.pref.nara.jp/secure/190341/part_04_2.pdf)〉（2018/04/25）

- (4) 土倉祥子『評伝 土倉庄三郎』（朝日テレビニュース社、一九六六年）、七一―三頁。
- (5) 田中敦夫『森と近代日本を動かした男 山林王・土倉庄三郎の生涯』（洋泉社、二〇一二年）、五七・六七頁。
- (6) 福本和夫『新・旧山林大地主の実態』（東京経済新報社、一九五五年）、一九九頁。
- (7) 板垣退助監修、遠山茂樹・佐藤誠朗校訂『自由党史（中）』（岩波書店、一九五八年）、二〇八頁。
- (8) 前掲書『評伝 土倉庄三郎』、四二頁。
- (9) 岳淵生『当代の実業家人物の解剖』（実業之日本社、一九〇三年）、八三頁。
- (10) 『家庭週報』第四二六号（一九一七年七月二七日）。
- (11) 梅花学園九十年小史編集委員会編『梅花学園九十年小史』（梅花学園、一九六八年）、三〇頁。
- (12) 片桐芳雄『成瀬仁蔵の女子高等教育への道―大阪、大和郡山、そして新潟へ―』『愛知教育大学研究報告 教育学部編』六五号、二〇一六年、二一―六頁。
- (13) 仁科節編『成瀬先生伝』（桜楓会出版部、一九二八年）、一七三―一七四頁。
- (14) 前掲書『家庭週報』第四二六号。

- (15) 前掲書『家庭週報』第四二六号。  
 (16) 前掲書『成瀬先生伝』一九二頁。  
 (17) 前掲書『成瀬先生伝』一九三頁。  
 (18) 佐藤藤太編『土倉庄三郎…病臥、弔慰、略歴』(非売品、一九一七年)、一二頁。  
 (19) 『家庭週報』第一三三号(一九〇四年二月一〇日)。  
 (20) 実業之日本社編『当代の実業家人物の解剖』(実業之日本社、一九〇三年)、八三頁。  
 (21) 『成瀬仁蔵著作集第一巻』(日本女子大学、一九七四年)、五〇四頁。  
 (22) 前掲書『成瀬先生伝』一九一—一九二頁。  
 (23) 前掲書『家庭週報』第四二六号。  
 (24) 松波秀実『明治林業史要』(大日本山林会、一九一九年)、二二〇—二二二頁。  
 (25) 奈良公園史編集委員会編『奈良公園史「本編」』(奈良県、一九八二年)、一六七頁。  
 (26) 前掲書『評伝 土倉庄三郎』一六四—一六六頁。  
 (27) 前掲書『森と近代日本を動かした男 山林王・土倉庄三郎の生涯』一〇八—一〇九頁。  
 (28) 前掲書『評伝 土倉庄三郎』一一七—一一八頁。  
 (29) 並松信久「土倉庄三郎の富国殖林思想…明治期の吉野林業をめぐる」『京都産業大学論集 社会科学系列』第三三号、(二〇一六年)、四〇頁。  
 (30) 土倉庄三郎『再ビ林政ノ刷新ヲ論ズ』(非売品、一九〇二年)、二二—二三頁。  
 (31) 前掲書『森と近代日本を動かした男 山林王・土倉庄三郎の生涯』二二六頁。  
 (32) 前掲書『評伝 土倉庄三郎』一七〇頁。  
 (33) 平井良朋『日本の山林王 土倉庄三郎妙伝』(NPO法人 芳水塾、非売品、二〇一〇年)、八一—九頁。  
 (34) 前掲書『成瀬先生伝』一九一頁。  
 (35) 前掲書『家庭週報』第四二六号。  
 (36) 土倉梅造『随想録…土倉祥遺稿集』(朝来町「兵庫県」、一九九一年)、四五頁。  
 (37) 徳齡著 井出潤一郎訳『素顔の西太后』(東方書店、一九八七年)、一二二頁。  
 (38) 前掲書『素顔の西太后』二四三頁。  
 (39) 前掲書『随想録…土倉祥遺稿集』四六頁。  
 (40) 前掲書『素顔の西太后』二〇七頁。  
 (41) 前掲書『評伝 土倉庄三郎』一九五頁。  
 (42) 前掲書『当代の実業家人物の解剖』八八頁。  
 (43) 前掲書『森と近代日本を動かした男 山林王・土倉庄三郎の生涯』一七五—一八〇頁。  
 (44) 前掲書『新・旧山林大地主の実態』二〇二頁。

- (45) 岩崎徂堂編『極秘日本富豪の家憲』(大成館、一九一六年)、三六一—三六九頁。
- (46) 前掲書『極秘日本富豪の家憲』三六五頁。
- (47) 前掲書『極秘日本富豪の家憲』三六六—三六七頁。
- (48) 『家庭週報』第四二七号(一九一七年八月三日)。
- (49) 前掲書『評伝 土倉庄三郎』四四頁。
- (50) 前掲書『森と近代日本を動かした男 山林王・土倉庄三郎の生涯』一七三頁。
- (51) 奈良原川上村「朝拝式」(<http://www.vill.kawakaminara.jp/life/docs/2017012900134/>) (2018/04/15)。
- (52) 辰巳義人『川上村に伝わる後南朝史』(非売品、一九七〇年)、一三頁。
- (53) 前掲書『土倉庄三郎・病臥、弔慰、略歴』五九頁。
- (54) 前掲書『家庭週報』第四二六号。
- (55) 前掲書『評伝 土倉庄三郎』一七三頁。
- (56) 前掲書『評伝 土倉庄三郎』一七五頁。
- (57) 前掲書『家庭週報』第四二九号。
- (58) 松本章男『道元の和歌 春は花夏ほととぎす』(中央公論新社、二〇〇五年)、三三二頁。
- (59) 前掲書『道元の和歌 春は花夏ほととぎす』三三三頁。
- (60) 前掲書『森と近代日本を動かした男 山林王・土倉庄三郎の生涯』二一一—二二三頁。
- (61) 前掲書『森と近代日本を動かした男 山林王・土倉庄三郎の生涯』二六一—二七頁。
- (62) 松沢裕作『自由民権運動へデモクラシーの夢と挫折』(岩波書店、二〇一六年)、iii—v頁。
- (63) 日本女子大学成瀬記念館編『写真で見える 成瀬仁蔵その生涯』(非売品、二〇一六年)、一六頁。
- (64) 『成瀬仁蔵著作集 第三卷』(日本女子大学、一九八一年)、九九四頁。
- (65) 『成瀬仁蔵著作集 第二卷』(日本女子大学、一九七六年)、三七頁。
- (66) 前掲書、三七—四〇頁。
- (67) 前掲書『写真で見える 成瀬仁蔵その生涯』一九頁。
- (68) 井上信子「土倉翁と成瀬の夢—教育百年の計—」『成瀬記念館』第三二号(日本女子大学成瀬記念館、二〇一七年)、一八頁。

#### 【参考文献】

- 福島宗緒『吉野川上村史』(川上村、一九四一年)。
- 後南朝史編纂会編『後南朝史論集』吉野皇子五百年忌記念原書房。
- 色川大吉『自由民権』(岩波新書、一九八一年)。
- 加藤衛弘『吉野林業全書』の研究』『徳川林政史研究所研究紀要』通号 昭和五八年度(一九八四年)。

川上村史編纂委員会編『川上村史 史料編 下巻』（川上村教育委員会、一九八一年）。

小川誠「或る明治林業人の思想と行動―吉野における土倉庄三郎の生涯―」『林業経済』一九卷一、二号（一九六七年）。

鈴木良編『奈良県の百年』（山川出版社、一九八五年）。

辰巳藤吉『川上村事蹟に関する記録』（奈良明新社、一九三二年）

【付】（二〇一七年八月、未整理資料の中から発見）

吊辞

本校評議員土倉庄三郎君こくら溘焉として逝去せらるる噫悲い哉君と本校との関係は其由来する所遠くして且つ深し蓋し君が女子教育に対する識見の遠大にして時流に超越せられたるに職う由せずんばあらず明治二十九年始めて本校設立の議を謀るに当り君は率先して賛同の意を表せられ最も深き同情を寄せて創業費の一半を負担し以て設立の挙を完ふするの端緒を開かしめられき真に揺籃中の保母たりと謂ふべし議茲に熟して之を社会に発表するや君は素より発起人の一人にして後ち創立委員の重任に当られたり而かも当時未だ女子高等教育の必要を認むる識者少なく反対尚早の論議頻りに起りしのみならず恰も日清戦役

の後を承け経済界の不振其極に達し資金の募集意の如くならず内外の困難しき存りに至りしに拘はらず君は絶えず当事者を激励して世論の喚起に力められ漸次朝野有力者の賛助を得るに至り遂に明治三十四年四月東洋最初の女子大学を開くの機運に到達せり君の本校に於ける功労真に偉大にして吾人の欽仰きんやう感激して止まざる所なり其後校運年を追ふて発展し基礎も亦鞏固を加ふるに至り明治三十八年之を財団法人の組織に改むるや君撰ばれて評議員の一人に挙げられ爾來同情を以て本校の事業を援助せられしこと十年一日の如く始終少しも渝なることなし土地遠隔にして屢々本校に臨むことを得られざりしも偶ま上京の機会あらば其崇高清素なる老軀を講堂に運び孫女の如き学生に対し一場の訓告を与へ学校の発展をもく目睹するを喜びとせられたりき今や倏忽として幽明の境を隔て再び当面君の音容に接するの機まなし痛恨いた悶んぞ尽きん然りと雖も君の人格は本校々風をうんじ醸じやうせる一要素として永遠に全校の間に髣髴せらるべきを疑はず吾人亦赤誠を以て君の遺志を遂行せん茲に日本女子大学校を代表して謹て君の靈前に緞哀を捧ぐ尚くは響けよ

大正六年七月二十二日

日本女子大学校長 成瀬仁蔵

## 新資料紹介

### 「小林孝子の衣服標本

— 一八七〇年代～一九三〇年代の中流家庭の衣生活 —

森 理 恵

はじめに

日本女子大学成瀬記念館に收藏されている小林孝子の卒業論文については、その収蔵の経緯も含め、すでに林知子氏が本誌三二号にてくわしく論述しておられる<sup>1)</sup>。本稿では、その卒業論文の関連資料で、初公開となる衣服標本<sup>2)</sup>について紹介し、資料としての意義を述べたい。

一九三六年に日本女子大学家政学部に提出された小林の卒業論文は、当時、今和次郎らが提唱していた考現学<sup>3)</sup>に示唆を受け、自分の家にあるすべてのモノや家の間取り、家計、一週間に何を食べたか、など暮らしのすべてを文字とスケッチで表現しようとしたものである。卒

業論文に添えられた「後記片々 昭和拾参年四月廿八日 小林孝子」によると、今を紹介したり『モデルノロヂオ・考現学<sup>3)</sup>』や『舞臺装置者の手帖<sup>4)</sup>』を見せたり、実際に親身になって小林の卒業研究を支えたのは寮監の井上よし子である。小林も「後記片々」の最後に、「でも一番お礼の申し上げたいのは只今九州にいらつしやると何ふ井上先生である」と書いている。今は非常勤講師として受け持っていた「形態美論」の授業のあとに家政部長室などで小林と面談し、アドバイスを与えていたようだ<sup>5)</sup>。

同じく「後記片々」によると、小林は四年生の一九三五年の夏休みから卒業研究をはじめたが、(家の中にあるものすべてを書き出すという途方もない) 作業が終



わらなかつたため翌年三月に未完成のまま提出し、卒業論の展覧会にも出品され反響を呼んだという。しかしどうしても完成させたいとの執念から卒業後の七月に「拝借」の形で学校から取り戻し、同年二月の祖母の死後に作業を続け、あしかけ四年を経た一九三八年の四月に完成させて「後記片々」を書き記したというわけである。

## 1 新資料 小林孝子制作衣服標本概要

ところが小林の研究意欲は衰えなかつた。今回新たに紹介する衣服標本には「昭和拾五年」すなわち一九四〇年の日付スタンプがある。小林は「卒業論文」が一応の完成を見た後にも、所持品の調査を続けていたのである。

本稿で「衣服標本」と呼んでいる資料は、ハガキ大の用紙のほしい上半分に衣服の端切れを張り付け、下半分にそれについての情報をペン書きで書き記し、年月日と「小林孝子」のスタンプを押ししたものである(図1・図2)。全部で二一六枚あるが、そのうちの三枚はハガキ大のほぼ二倍の用紙を半分折りたたんだものである。日付は一九四〇年四月から一〇月にわたっている。

情報はたとえば、「孝子のネマキ(有松麻の葉紋)孝子の姉が生まれた時(大正三年六月二十二日)当時三河に

居た伯母からお祝に貰つたもの ムザムザ一ツ身にするのも惜しかつたので二十九才の母は自分の浴衣にした然し母の柄では無かつたのでほとんど着なかつたのを元禄袖にして孝子の女子大ゆきのネマキにしたのである」のように、着用者、衣服の種類、素材、模様、入手の経緯やその後の使用歴などが歯切れのよい文章で書かれている。

ハガキ大の用紙を裏返すと、横書き縦書きで「神奈川県立横須賀高等女学校／制服用生地色見本／四ヶ年間染色耐久力共ニ絶対ニ保証ス／修繕ハ無料／制服ノ御用命ハ東京 高村洋服店へ」(〃は改行)と印刷されており、中ほど上端に糊で張り付けたウールの絨維が残っている。横須賀高等女学校は小林の出身校である。同校で配られていた制服生地見本のカードを大量に譲り受け、生地をはがし、裏を衣服標本作成に活用したと考えられる。また、ほぼ二倍の大きさの用紙を二つ折りにしたものを裏返すと、三越百貨店や横須賀の「さいかや呉服店」の休業日や売り出しの挨拶状であった。なお、一枚のカードに複数の端切れを貼つたものや、同じ端切れを何枚ものカードに貼つたものもあるので、カードの枚数と端切れの点数は一致しない。

## 2 家族の成員とその衣服

小林の家は横須賀の中流家庭で、両親ともに高學歷で母は教員の仕事をしており、洋風の家具や調理器具、洋風の食事も積極的に取り入れていた。標本の衣服の着用者は主に本人、祖母、母、父、そして「女中」である。一方、卒業論文のなかの「筆者とその家族」（一九三五年一月三日のスタンプあり）には、「筆者」、「祖母」、「母」、「父」がこの順で、証明写真様の小さな写真とともに生年と學歷などが記されている。また、「後記片々」と同じ一九三八年四月二八日のスタンプが押されて「被服しらべ」と題された二二丁の和綴じの冊子がある。こちらは縦書きのペン字で、「祖母」、「父」、「母」、「孝子」の順に各人の所持する衣服が細かく簡条書きにされている。

以下、これらの資料の情報をも参考にしながら、各人の衣服標本について簡略に紹介する。小林本人の衣服標本については和服と洋服に分けて紹介する。なお、祖母と母は「被服しらべ」にも衣服標本にも洋服の記載がないので、和服のみの生活であったと思われる。

### (一) 祖母 二八枚

上記「筆者とその家族」によると一八五五年生まれ。小林が日本女子大学校を卒業した一九三七年の一月二月に亡くなった。着物、単衣、羽織、前掛などの生地がある

が、いずれも紺、鼠、茶などの地味な色合いの、縞、小紋などの細かな模様である。地質は甲斐絹、モスリン、木綿などである。注目すべきものでは、「祖母が十九歳の時（明治七年）のお盆に婚家からはじめて實家の墓参に行く時 群馬県高崎地方ではイキミタマと云つて夏の晴衣を着飾つて行くならばしで之が即ちその時の襦袢だつたさう」（カッコ書きはママ。以下同。）と書かれた、薄い藍色に白格子の平絹がある（図1上段右より二番目）。一八七〇年代の北関東の風習が窺われる、この衣服標本中では最古の部類である。

### (二) 母 六五枚

「筆者とその家族」によると一八八六年生まれ。東京女子高等師範学校の附属小学校、附属高等女学校、そして同師範学校卒業である。衣服標本の記述によれば小林孝子の母校横須賀高等女学校の教員をしていた。衣服標本中、もつとも枚数の多いのが母の和服であり、祖母のものに比べると色柄・地質ともに格段にヴァリエーションが多い。縞格子のほか花柄のモスリンや御召、型染の浴衣地など多彩である。女高師に着ていったという羽織・袴の生地や、「主婦・友ゆかた」など貴重な資料は数多いが、ここでは次を紹介する。

紺色地に雪松模様の捺染のモスリンで、「母がお茶の

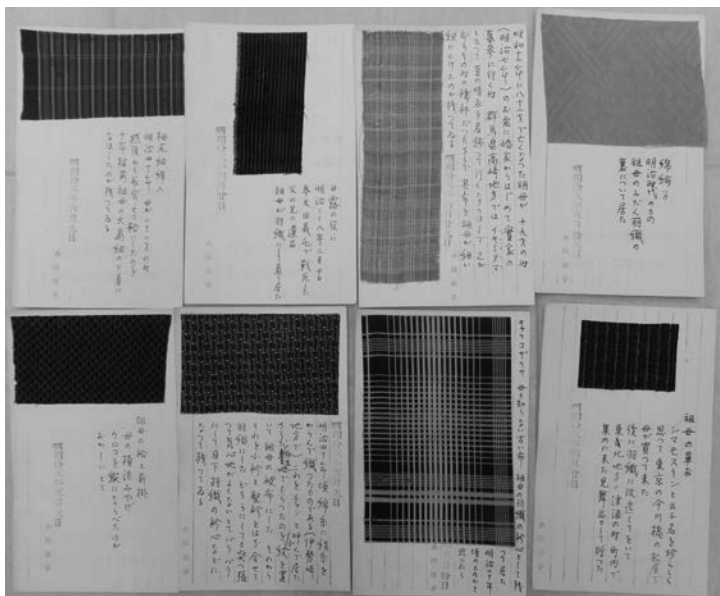


図1 小林孝子衣服標本のうち 祖母の衣類の一部(筆者撮影)



図2 小林孝子衣服標本のうち 母の衣類の一部(筆者撮影)

水高女三年の時の半巾帯の裁縫材料で当時四十五才位だった祖母の帯ださうである。お点は七点で平塚さん（らいてう）は桃色縺子で縫つて九点で大変みごとな出来で谷田部順子先生が綴全体へ廻してお見せになつたさうである。母が記憶をポツリポツリ語つた」とある。母が女高師の附属高等女学校に在学中、裁縫教授の集大成者である谷田部順子<sup>(9)</sup>の教えを受けたこと、平塚らいてうと同じだったことなどが知られる（図2下段一番左）。

### (3) 小林孝子 和服 三三枚

「筆者とその家族」によると一九一六年生まれ。衣服標本製作当時二〇代前半ということもあり、大きな矢絣や捺染の花柄などが中心である。女学校での部分縫練習用生地、人形衣装用生地、お手玉用の生地も、今回は便宜上ここに含めた。

### (4) 小林孝子 洋服 四八枚

母の和服地に次いで枚数が多いのが小林本人の洋服地である。格子・水玉・花柄の木綿のワンピース地、縞や格子のウールのコート地、スーツ地などであるが、なかには花柄の「スフ」の簡単服地もある。明るく軽快な色調が多いのは小林の好みであろうか。横須賀高等女学校の制服とネクタイの生地も貼られている。特筆すべきものとして、「大正十年に文化裁縫（今の文化服装学院）

の創立者故並木伊三郎氏が洋裁教授のソモソモの振り出しを横須賀でせられた。当時六才の孝子の為に母もその講習を受けた。之はその時の製作品ワンピースの残布である」と書かれた濃紺の格子柄のウール地がある。このほかにも九枚、「（並木先生講習製作品）」とカッコ書きで記された生地があり、洋裁教育史を考える上で貴重である。そのほか、ピンクの花柄の木綿地に、「昭和十五年夏 即ち昨日 横須賀のスギウラ糸店で買つて来て主婦の友を参考にスポーティな盛夏用ワンピースを目下熱心に縫ひつつある 生地代約八尺で九円六〇銭也」としたものがあつた。戦時下の小林の生活が窺われ興味深い。

### (5) 父 一八枚

「筆者とその家族」によると一八八〇年生まれで群馬県立前橋中学校、海軍兵学校卒業。横須賀の海軍に勤めたあと、東京電燈株式会社の社員となつた。<sup>(10)</sup>「被服しらべ」には父の衣服として多数の和服や大礼服、軍服、背広なども記載されているが、衣服標本は単衣やドテラなど家庭着が多い。家庭裁縫のなかで出た端切れを中心に衣服標本が作製されたからであろう。袖、セル、木綿などの黒っぽい無地か細かい格子柄がほとんどである。なかには「父が馬公の知港事時代に作つて送つたドテラ 元禄袖の祖母のネマキになつている」と記された黒と鼠の格

子柄の平絹もある。父は澎湖島の馬公に赴任したこともあったようである。

#### (6) 「女中」 六枚

卒業論文のなかに含まれている平面図をみると、それほど広いとは言えない平屋建ての北西の角に二帖の「女中室」があり、衣服標本の記述などからも、小林の家では常に「女中」を置いていたらしいことがわかる。「被服しらべ」には「女中」の項目はないし、「女中」はもちろん、自分の衣服は自ら調達管理していたであろうが、「お仕着せ」等として主人の側から「女中」に支給したり買い与えた衣服の生地がここでは標本とされている。羽裏以外はすべてやや大きめの縞と格子で、絹や木綿である。興味深いのは、紺と白に細いピンクの筋が入ったやや大きめの格子の生地で、「昭和十三年五月純綿がなくなると新聞にあつたので孝子の冬のネマキに二反と大掃除の慰労に女中にやる一反を買った。之が我家の買溜めと云へば云へないこともない。しかしすでにスフはチャンと混紡されてる事は手ざわりでわかる」とある。一九三八年の時点で純綿と称して「スフ」を混紡したものが売られていたということであろうか。

#### (7) その他 一八枚

布団、カーテンなど衣服以外の生地や上記以外の人物

の衣服の生地をここに分類した。衣服以外では、布団、こたつ布団、火鉢布団など様々な布団地や、本棚のカーテンなどがある。また、他からの使い回しが多いが、戦時下のため遮光カーテンにしたという記述も散見される。

上記以外の人物では、一八九六（明治二八）年に七二才で亡くなったという「祖母の祖母」の遺品だというのが二枚ある。一つはたいへん細かな藍鼠の小紋、もう一つは小林が「群馬県の片田舎の農家でできた手織木綿」と書き記す藍縞で、羽織の襟芯になっていたという。また、「明治四十二年頃明治元年生まれの女中が居て祖母の葛籠がこわれたのを自分所持のポロキレを貼りつけ修繕してくれた」というものがある。型染友禅の龍田川模様で、小林は「恐らく老女中が娘時代の帯の片側でもありはしなかつたらうか」と考察している。そのとおりであれば、一八八〇年代の染め物ということになる。これらと、先述の祖母が婚家から実家へ初めて墓参りに行く時の衣装の生地とされるものが、小林の記述どおりだとすれば、標本中でもっとも古い時代、明治前半期の標本ということになる。

おわりに — 本資料の重要性 —

以上の簡略な紹介でもわかるように、この衣服標本は、近代日本の服飾史、染織史、生活史、女性史、家政教育史にとつてきわめて重要な資料である。第一に、生地の実物が貼りつけられていること、第二に、着用者あるいはその近親者の克明な記録が記されていること、第三に、日付と氏名のスタンプが押されていること、この三点が、本資料を特に貴重なものとしている。

一九世紀後半から二〇世紀前半の衣服の実物資料は各地に、富裕層のものから庶民のものまで、かなりの数量が保存公開されている。また、日記や文学、売買や製作の記録など、衣服にまつわる文字資料も数多く知られている。しかしながら、生地の実物と文字情報とが一対一で突き合わされた形で、しかも、どこで買った、誰にもらったなどの入手経路や、着物であったものがネマキにそして襟芯にとりょうな繰りまわし・使い回しの道筋、さらには衣服にまつわる個人の思い出までが、二百点以上の規模で残された資料は、他にないのである。か。そしてそれらすべてに、標本作成の日付と作成者の氏名が添えられているのである。

本稿では紙幅の関係で、詳述することができなかったが、この時期の裁縫教育や繊維の流通、そして日本女子

大学の学生の衣生活など、本資料にはまだまだとりあげるべきテーマが含まれている。稿を改めて取り組みたい。

謝辞 本稿執筆に当たり、武庫川女子大学名誉教授 横川公子先生より助言を賜りました。また、資料の整理につきましては本学被服学科四年次 吉村唯さんの協力を得ました。記して謝意を表します。

(日本女子大学家政学部被服学科教授 もり りえ)

(1) 林知子「今和次郎に師事した昭和初期の住まいと暮らしの考現学 八〇年の時を経て日本女子大学に戻った小林孝子の卒業論文」、『成瀬記念館』三一号、二〇一六年、一八〜三三ページ。

(2) この衣服標本は、展覧会「考現学の視点 昭和の暮らしの具体相 今和次郎に師事した小林孝子の卒業論文と衣服標本」(日本女子大学成瀬記念館、会期二〇一八年五月八日〜六月二三日)にて初公開された。なお、卒業論



文は、本学住居学科および今和次郎コレクション委員会主催の展覧会「昭和初期の住まいと暮らしの考現学 今和次郎に師事した小林孝子の自家調査」（同館、会期二〇〇四年六月二二日～六月二六日）にて公開されたことがある。なお、前掲林論文ではこの衣服標本について、（卒業論文には）「布地の切れ端見本が添付されているが、それぞれの布についてその利用歴が可能な範囲で追跡されている」と言及されている（二四ページ）。

(3) 今和次郎・吉田謙吉編、春陽堂、一九三〇年。

(4) 吉田謙吉著、四六書院、一九三〇年。

(5) ただし、小林孝子と今和次郎はその後もななく親交を結び、今が小林の自宅を設計するなどしたという（前掲林論文、二二ページ）。

(6) 前掲林論文、三一ページ。

(7) 孝子の姉は生まれてまもなく亡くなったという。なお「女中」は現在では使わない用語であるが、小林が使用しているためカギカッコに入れて用いる。

(8) 小林は「着物」を、裏地のついた長着という意味で使用している。羽織、単衣、浴衣、長襦袢などの項目が別にあるからである。これは「着物」という語の当時の一般的な使用法である（森理恵「近現代における「着物」の表記法とその意味の変遷——一八七四～一九八〇年の新聞

記事を中心に——日本家政学会誌六六巻五号、二〇一五年、一九七～二二二ページ）。

(9) 横川公子「教育の場における西洋風の広がり」（同編「服飾を生きたる文化のコンテクスト」化学同人、一九九九年、一三六～一四五ページ）の一四五ページでは、渡辺辰五郎の弟子に当たる谷田部順子が東京女子高等師範学校において裁縫教授の集大成を行ったことを論じている。

(10) 前掲林論文、二四ページ。

(11) この家の「かなり過密な状態」とその住まい方については前掲林論文二四～二六ページ。



新刊紹介

見城悌治編著 見城悌治・飯森明子・井上潤 責任編集

『婦一協会の挑戦と渋沢栄一  
グローバル時代の「普遍」をめざして』 ミネルヴァ書房

中 寛 邦

本書は『渋沢栄一とフィランソ  
ピー』全八巻の2として二〇一八年  
二月に出版された。

表題の婦一協会は、成瀬仁蔵が日  
本女子大学の創設にもかかわり、  
当時の財界人として著名であった渋  
沢栄一に働きかけることによつて始  
まった会である。一九一二年に成立  
し、一九四二年に閉じられた。

これまで婦一協会の成立理念やそ  
の活動さらには目指したところにつ  
いては、大よそのところは明らかに  
なつてはいるが、十分に説明出来てい  
るとはいえず、社会的な位置づけも十  
分にされていなかったといえよう。

本書の出版は研究されるべき課題  
を発掘した待望の書である。明治末  
期から大正・昭和にかけての日本の  
社会的変化の中で、婦一協会の多様  
な提言と世界に広がる活動の様相  
は、当時の著名人を幅広く糾合した  
会でもあり、再検討されるべきであ  
り、究明が待たれる会であった。

本書は序章に「婦一協会とは何か」  
がおかれ、Ⅰ部とⅡ部に編成されて  
いる。Ⅰ部は近代日本における「宗  
教」／「道徳」と婦一協会とし、Ⅱ  
部はグローバル化のなかの婦一協会  
とされている。前者は主としてその  
質を問い、後者は、当期の社会ある



いは世界を視野に入れての位置づけ  
を追求しているといえよう。

付録として、婦一協会関係資料が  
ついでおり、婦一協会発会時の趣旨・  
意見書などの基本的な資料が付され  
ている。「婦一協会研究問題要目案」  
は婦一協会が当初にどのような課題  
を究明しようとしていたかを示して  
いる。その後に、発表された「信念  
問題をめぐる決議」(一九一五年)「時  
局問題にかかる宣言」(一九一六年)  
の二つが加えられ、会の活動のねら  
いはどこにあったかを知ることが出  
来る。次に婦一協会で行なわれた例  
会での講演が、その実施日と講演者

名及び「論題」・参加者数（渋沢栄一への参加の可否を明記）が、一五七回にわたって表になって紹介されている。婦一協会の一九一二年七月から一九三三年の四月までのその多様な例会の内容が推測され、課題が多岐にわたっていることがわかる。

さて、本書の序章でこれまでの婦一協会研究の状況が紹介され、研究蓄積は不十分な状態にあり、本書が「婦一協会を本格的に取り扱おうとする初めての論集である」という。次に、協会の活動とその特色が指摘され、時代を追ってその変化が要約されている。その後には本書を構成する十本の論考と四本のコラムの概要が紹介されている。

## 第I部 近代日本における「宗教」

### ／「道徳」と婦一協会

全体から様々な角度で婦一協会を論じる論考が集められていることが

わかる。

第一章は歴史的变化特に近代日本の道徳的・宗教的捩り所を求めて婦一協会に多様な人々が参加しているが、協会に統一的理解があつて活動したとはいえないことが了解される。

各所で、渋沢栄一に言及されていることは勿論であるが、会に参加した様々の人物にも焦点があてられている。婦一協会の成立に重要な役割を果たした浮田和民は、当期のジャーナリズムにおいて重きをなした人物であるが、協会の土台を同時につくつた成瀬仁蔵や姉崎正治の主張との対比が行なわれていて、婦一協会への理解や活動の方法へのズレが指摘されていて興味深い（姜克實）。さらに服部宇之吉については、渋沢と共通する儒教倫理に詳しく、儒教研究の専門家であり、従来触れられなかった儒教面からの婦一協会の分析となつていて貴重である（町

泉寿郎）。その他、触れられている人物を通して、婦一協会のおかれている当期の宗教や道徳の動向を知ることが出来る。三教会同など、婦一協会と同時期の活動や「六合雑誌」などジャーナリズムにおける評価など再考する機会が提供されている。

最終の第五章（見城悌次）は渋沢栄一の挑戦というサブタイトルとなつており、渋沢が財政的にも協会を全面的に支え続けていた事実は、渋沢の「精神界の統一」への願いの重要性を物語るものであり、第I部のまとめとしての論考といえよう。コラム1・2ではシドニー・L・ギューリックと森村市左衛門がとりあげられ、婦一協会に重要な存在であった人物の紹介が加えられている。

## 第II部 グローバル化のなかの

### 婦一協会

第II部は日本国内での婦一協会での

はなく、グローバルな国際的視野の中で、婦一協会の意義をとらえる論考が収載されている。成瀬仁蔵は本書の中で様々に登場するが、早々と米国に行き欧州にわたり米国及び英国で、婦一協会の組織化をうながした活動に貢献したバートンとの交流が新資料の提示によって明らかにされている（辻直人）。その他、澤柳政太郎・姉崎正治などの対外的働き

の紹介も注目される（酒井一臣・山口輝臣）。次に八章の論考とコラム3は婦一協会が二〇世紀の国際交流の活動の中で、ジャパントイムズなど海外のメディアにどのように紹介されているかやユニテリアンなど宗教界との交流、更には婦一協会に賛意を示した欧米の人々の紹介など幅広く検証されていて最後に示唆を与える（岡本佳子）。デューイの視点からの婦一協会の評価も貴重である（陶徳民）。

コラム4は婦一協会の例会の講演者の分析である。「宗教」「道徳」に関わる議論・様々な海外情報の提供・「マルクス主義」への関心と法曹人などにまとめられ、一五七回にわたる例会と渋沢栄一がよき聴者であったことが推察される。

婦一協会がその活動していた時期にどれだけ思想的刺激を社会に与えたかには疑問がある。世界的な対立や紛争の時代に婦一の理念はなかなか浸透し得ない。さらに第一次世界大戦が終結した一九一九年には、婦一協会の発会后、熱心に活動をすすめてきた成瀬仁蔵や森村市左衛門が亡くなる。その後は姉崎正治が会を維持する中心になるが、次第に先細りしていることは指摘されている通りである。

しかし今、婦一協会を再考・再検討する意義を何人かの方が指摘して

いることには同感できる。例えば、「思想面において今日の国際化、グローバル化の先駆的活動と言える」（姜克實）「宗教間協業の実践は、果たして今日どのような形でなし得るものなのだろうか」（桐原健真）など。そして婦一協会の外国向けのレターペーパーには次のような標語が入っていた。Concord and Cooperation between Classes, Nations, Races, and Religions. このことは現在にも通ずるものである。

本書の表題には「婦一協会の挑戦 グローバル時代の「普遍」をめざして」の語が入っている。婦一協会の検討を通じて婦一協会の再考と、現代にも投げかけられている様々な課題を考察することにもなると思われる。本書の出版がひろく刺激を与えることが期待されよう。

（日本女子大学名誉教授  
なかじま くに）

『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかった新資料を順次発表する。今回は講話一編である。

式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を、丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンをはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

- 一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。
- 一、あて字については原文通りとした。
- 一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。
- 一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

## 成瀬仁蔵講話

## 1

## 第二、三学年にて ——— 大正二年六月十八日 ———

此の前申した様に、物の真相を玩味すると云ふ事は、解剖的に申す事はむつかしい。やはり比喩的に想像的に申すより他はない。そー云ふ事によく表はれた人格を通じて、又そー云ふ人格に同情する事が一番近道である。

そー云ふ人格とはどー云ふ人をさすかと云ふと、やはり天才とか偉人とか云ふ人である。之れがあなた方の修養を積む時に、喜んで昔から名高い其の時代の代表的人物の伝記を読む。そー云ふ人を解しやうと勉めておいでに

なる。

### 模倣的修養の可否

併し此に天才とか偉人とかを学ぶに当り、殊に其の時代の代表的人物を我が模範とし理想として、その云ふ域に達せやうとするについて、非常に力も出るし同時に又弊を受ける。模倣的修養からして弊に陥ると云ふ事もあ  
る。そこで我々は、天才を模範的修養の理想として学んでよいかどーかと云ふ事になる。其の訳に二つある。

一つは、天才の發揮した人格には極端な所がある。病的な思想、病的な行ひを混ぜざるを得ない。故に偉人と狂人とは混じやすい。夫れで天才になるには熱狂して狂ふ位、又常軌を逸して狂ふ位でなくては發揮しない。又、生れながらにして極端なる性質の人もある。その云ふ者を自分の理想としてよからうかどーかと云ふ事になる。

も一つは、人性を發揮せんとするには、風俗、習慣に構はない、世の論難攻撃を顧みないと云ふ決心がなければ、天才が發揮しない。故に天才の人は逆境に立つ者が多い。世の迫害を受け、父母妻子の感情に逆らうて、遂に孤独生活を余儀なくしたり、又其の煩ひから天死したり、甚だしきは十字架につき毒殺をせらるゝと云ふやうな悲惨な最期を遂げて居る。偉人の終りは斯くの如き

経験をした人が沢山ある。そのすると通常の人間、即ち常識的の生活をしなければならぬ人間、殊に御婦人のやうな、家を持ち主婦となり子どもを育てねばならぬと云ふやうな人が、その云ふ極端の生活を試みたり、その云ふ非常なる道を踏むと云ふ事は、どーであらうか。夫れが果して幸福な道であらうか。世の爲にも、家の爲にもなるであらうかどーかと云ふ事が問題である。之れがつまり女子高等教育、又は宗教などの上にも昔から問題になる事である。そこで、偉人の多くは斯くの如き終りを遂げて居る其の生活を理想とし、伝記を読むのはよい事であらうかどーかと云ふ事になる。之れはあなた方が志を立てて此校へおいでになる迄に、親兄弟や親戚や、先輩から度々お聞きになった事と思ふ。此の事について申すつもりでありましたが、時を取りますから省きまして、本論に入つて申します。其の間に自ら解決のつくやうに致したい。

逆境に立ち天死した人と云へば、先づ誰れでも知つて居る処の Christ、Socrates 等、病的になつた人と云へば Nietzsche、Byron と云ふやうな人で、之れは詩人、音楽者に多い。夫れからの之れは、天才であるか病的であるか区別のつかぬ人もある。又、確に病的でなくして昔の時代の偉人になつた人も沢山にあります。夫れは後に、自



らあなた方にわかる事と思ひます。

今私が、代表的な人物、深い能力の発現である代表的の人物と云へば、どーしても其の時代の代表的の人物をあげる外はない。又、そー云ふ人をあげるならば、あなた方は自ら其の人物を崇拜すると云ふ念は禁ぜられないであらうと思ふ。そこで自ら尊敬し崇拜する念が起れば、従つて何かの感じを其の人から不知不識の間に受けると云ふ事は自然の結果であらう。そーすれば我々がそー云ふ人から感化を受けると云ふ事は疑ひなき事であらう。そこで、そー云ふ仮定をおいて進みたいと思ふ。

### 時代の代表的人物の研究の必要

此の間から、直覚力或は直覚性と云ふ事を説きました。之れは Immediate knowledge で、直接に感得する処の知識である。夫れから同時に認識力、即ち其の何物かを直接に知る事が出来たならば、同時に何物かに自我を發表する、即ち直ちに目的の活動が起つて来ると云ふ事を言ひました。夫れで、夫れをも一一つ自覚するには、も一層深く考へて見なければならぬ。

直感とは果して何物を直感するか。其の客観物は何であるか。又、自我を發表するに目的の活動が起つて来るとは、何に向つて発現するのであるかと云ふ事を明かに

しなければならぬ。其の關係を説くには、其の時代の代表的人物を研究しなければならぬ。之れを研究し、此の人格を学ぶ事に由つて、其の人を通して私共が直感する事が出来る。

そこで天才とは、どんなものを言ふかと云ふ事を申しておかねばならぬ。昔から、殊に近代に於て天才の研究が行はれて来たのである。低能児の研究と共に、高能児と云ふものが調べらるゝ。其の高能児が成長すると共に能力を発揮すると、天才になるのである。

さて、天才と云ふ事について二つの説がある。其の一は、天才は偶然に生るゝものであるとか、神が特別に下したのであると云ふ説もある。夫れで任意に努力により修養により、天才、偉人を拵へる事は出来ないと言ふ説がある。

第二には、天才は道理あつて生るゝもので、説きあかす事が出来ると云ふ。此の説では「偉人は其の時代の精神の生む処の代表的人格なり」と云ふのである。

### 偉人の特色につきて

故に、其の偉人と云ふものの第一の特色は、

第一、同情的卓見 Sympathetic insight

第二、目的的發表 Functional expression

の二つである。

故に、偉人は其の時代を發表し、又其の時代を代表するものである。そこで發表と云ふ事は内面の結果から言ふと、之れを實現と言ふ。然らば何を代表し、何を發表するかと云ふと、其の時代の感情、其の時代の思想、即ち時代精神を發表するものである。詞をかへて言へば、時代の精神の舍つた人格、又は世界魂、或は宇宙魂の發表である。之れを日本語で言へば神やどると言ひ、英語では Incarnation と言ふ。即ち、其の時代の民衆の思想、感情を發表して居る処の人格である。其の時代の社会全般の思想、感情、即ち時代精神、之れを英語で言へば Humanity の中に宇宙の靈が活動して居るのである。故に之れを段々推理して行くと、其の時代精神を發表するのは神の意志を行ふ、神と我れとが一つになる事とも言はるゝのである。之れが即ち、偉人の天賦性の發表の力である。即ち其の時代が言はんと欲する処を言ひ、同代の人民が夢みる処を實行する人を言ふのである。

故に、偉人の生ずるは偶然にあらずして、内在的精神即ち社会精神、時代精神、或は世界宇宙精神が発動したるものを申すのである。故に偉人と云ふのは、潜勢力或は潜在意識と云ふのは何処に深い原因があるかと云ふと、無論個性の根があるけれども、夫れは時代の精神界

に深く根ざして無限広大なる力から動かされて、夫れに反動して発現したのが、即ち其の時代の代表的の偉人である。

そこでわかりよく言へば、其の社会、即ち当時の人民が彼れを生み、彼れを育て、彼れを感化して、其の方向範圍を決定したるものである。短く言へば、偉人は社会協同の力によって生み得たのであると云ふ事が言へる。そこで、彼れの熱情は社会心の反響である。彼れの人格は当時の文明の程度の最高点である。恰も偉人は寒暖計の如きものである。社会と云ふ空気にかけられてある処の寒暖計の如きものであつて、其の空気の熱度によつて直ぐ様、偉人の生活が上下する。故に、其の上下する事に由つて空気の熱度が計らるゝのである。又、彼れは瓦斯や水道の管の如きもので、其の管は社会の波の中に深く埋没して、最も高い処の程度が人格に由つて判決されて居る。

社会生活と其の偉人の生活と云ふものは、離る可からざるものである。彼れの熱情は国民の熱情である。彼れの目的は其の時代の社会全般の目的である。彼れの言は、当時の社会の言はんと欲する処である。彼れの決断は、当時の社会良心の決断である。彼れの改革意見は、当時の必要なる社会改造である。其の考へを証明する為に、少しく歴史の事実に触れて見たならば、も少し明瞭にな

る事が出来ます。

著しき例をあぐれば、希臘の Athens 人が討論を好み、弁証を事とする時代に於て、Socrates が生れ出でたのである。Demosthenes と云ふ能弁家も出たのである。Athens が美を崇拜するに至つて、パーセノンと云ふ建築の創造者イクチナスが出たのである。Macedonia が戦争にあらがれて Alexander を出だし、Elizabeth の時代に英國が人生の愛に酔つた結果は、Shakespeare と云ふ詩人を養ひました。近世の獨逸の津々浦々まで充滿して来ました処の音楽の空氣は、此の一世紀に於てヴァイターベンの如き、シヤベルトの如き、ワグナーの如き、世界無比の音楽家を出したのである。ヴァイターベンは決して America の Chicago には育つ事が出来なかつたのである。America には Rockefeller と云ふ石炭王と、Carnegie と云ふ銅鉄王と、又 Edison と云ふ發明家とを出したのである。

そこで必ず其の時代と、其の時代の特徴と、其の偉人の特色とは相一致して居るのである。又、其の時代には其の以下の天才が続々として現はれて居るのであります。併し此に矛盾するやうなる事実のあるのは、何故にヘブライが Christ を生んで十字架にかけたか。又何故に Athens は Socrates を生んで毒殺をしたか。何故に故里は自分の生んだ予言者を放逐するかと云ふ事が問題であ

る。

動物は往々にして、自分の子の為に命を捨てる事もあがるが、又、子を食べて了つたと云ふ事も我々のよく見る事実である。そこで、此の事実を見て偉人の伝を読むと、時代が其の人を生んだとは思はれぬ様ではあるけれども、深い關係を持つて居ることは前にも述べた。しかしよく氣をつけないと、偉人が狂人になるやうに、偉人を出した時代は偏狭になる事がある。故に我々は、時代の傾向について、自分の健康について常に注意をしなければならぬ。

又、天才が偏狭になり易いと云ふのは、修養に勉めないと云ふ事がある。又、習俗に従はないと云ふ事もある。如何となれば、習俗に従へば自分の天才を展はず事が出来ないから、如何なる迫害にあうても屈しない訳で、之れが偉人の不運に陥る所以であり、又、社会の注意をしなければならぬ問題である。

### 我々の生活は代表的人物にあらはねばならぬ

そこで時代の代表的人物の出来るのは、孤獨的の生活によつて出来るものではない。又、其の自我発表と云ふものは、決して利己的な局部的の発表によつて自我実現の出来るものではない。其の道理はお考へになるとよく

わかるのである。

之れから推して、我々の生活がやはり代表的人物の生活にならねばならぬ。代表的人物と我々との違ひは唯だ大小にあるので、種類の違ひではない。故に我々も、やはり小さな偉人である。従つて、偉人の跡を踏んで行くのは自然の情である。そこで同情的卓見と云ふものは、我々の内にある処の本能或は傾向と、時代の傾向、或は時代の大勢との間に交通しやうと云ふ同情的眼識が直覚である。故に何を直覚するかと云へば、自分の内にある処の職能を直覚するのである。

時代の精神、社会の命、其の時の神の意志と云ふ様なもの、我々の中に活動して居る処の思想、感情を直覚するのである。之れは余程よく考へて見なければならぬ。

### 直覚につきて

そこで直覚と云ふ事は、内から出やうと云ふ力と他から誘はれる処の力と相反応する事で、外からは誘ふとか、招くとかする。私の方からは、如何にして夫れに答へて行くべきかと云ふ事で、其の間に生れるのである。夫れで之れを爆發するとも言ひ、之れを自動とも言ふ。そこで我々の何が出来たと云ふならば、発表に由つて衝動と云ふ、又別々の力から云へば本能である。故にど一発現

すべきかと云ふ事のわかるのも直覚である。夫れで此の社会に向つて社会の言はんと欲する処、社会の行はんとする処、社会の理想とする処は、直覚に由つて知らるゝのである。完全なる処の美とか愛とか同情とか云ふものが直ちに内に反応する事が、即ち直覚である。夫れで、宇宙から言へば直覚と言ふのであり、自分の身体の内から知る事から言へば、本能とか衝動とか言ふのである。其の総体を言ふ時に、*Person* の詞をかりて、直覚と言ふのであります。

### 本能につきて

然らば之れを我々の日常生活に應用するには、之れを具体的にして見なければならぬ。

第一に、交通的本能に従ふと云ふ事である。英語で言へば *Communion* で、之れは心と心とが相通ずる事。人の感じを感じざるを得ない。人の考へを聞きたい。自分の考へを人に表したい。ほんとうによき態度を以て、同情を以て交りたい、心を通じたい。之れがなくては人生寂寞を感じざるを得ない。之れを交際の本能と言ふのである。夫れで、ほんとうに此の交際の本能を以て交つたならば、人を誤解したり曲解したり、青い眼鏡を以て見ると云ふ事はなくなるのである。

第二は、同情的本能。又は義侠心、又は演劇的本能、或は友誼的、想像的本能と云ふ。人間が喜劇や悲劇を演ずる、或は詩を愛するのは同情的本能。詞をかへて言へば、義侠心である。人と共に喜び、人と共に悲しめば、人の事とは思はない。我が事と思つて、人の身代りにも立たうかと云ふ心になる。此の本能が悲劇や喜劇を演ずる事となる。此の生活によつて、人の事をも我が事のやうに直感するのである。

第三が、技術的本能である。即ち、天地の美を直感して、之れを土を以て絵具を以て、或は石や金に発表するのである。故に芸術の力は直覚性である。天地間の美を直覚して、直ぐ様何かに発表しやうとするものである。

第四は、美的本能である。之れは *Singing and dancing* で、つまり音律的活動をしやうと云ふのが、此の本能である。此の本能によつて自我を筋肉に発表するので、直ちに健康に影響するのである。之れは非常に深い意味がある。私共が器械的教育を根本から改良しやうと云ふのは此にある。 *Emancipation of activity* である。あなた方は今、縛られて居るから手や足を自由に動かす事が出来ないの、之れが萎縮する原因となつて居るのであります。

第五は、尋問的或は解剖的本能と云ふ。つまり科学をして、物を明瞭にして、討論をして見たいのである。之

れは知的本能である。故に、学問をする人は始終問答があり、機会のある度に討論をして見たいのである。

第六は、構成的本能である。科学をするのは哲学を成り立たせたいと云ふ本能で、完全を望む処の本能である。故に、之れを科学的本能と言つてもよいのである。

之れを大別すると、第一、第二を愛と言ひ、第三、第四を美と言ひ、第五、第六を真と言ふ事が出来る。故に、之れは昔から言ふ処の真善美の本体であり、此の三つを一緒にした本体を直覚と言ふのであります。本能と云へば、見たい、聞きたい、食べたいと云ふ事のやうにとられ易いのである。併し之れは、大切な働きである。唯だ一部の働きを許さない。故に、全体から考へて真理を愛する、組み立てると云ふ完全の傾きがある。故に *Harmony*、*Symmetry* と云ふ事、*Rhythm*、共同とか云ふやうな全体の関係を見なければならぬ。其の全体の関係に応じて働くこと云ふ事が直覚であります。

#### 今日は万国的意思の出来つゝある時である

今日は、万国的共同の意思の出来やうと云ふ時である。万国的とは、殊に東西と云ふ事を意味するのである。如何にして我が国民を万国的ならしむるか云ふ事は、皆さんの直覚力に俟たんければならぬ。夫れには教育を改

善しなければならぬと云ふ事から、政府では制度調査会と云ふものを設けられ、我が校では根本的教育を施さうと勉めて居る。又、あなた方の多くは此の夏休みに夏期寮を作つて、大に此の精神を養はうとして居らるゝ。これは一つの社会精神である。

### 注意すべき点につきて

Self-expression は同情的愛である。交通的、社会的の心を發揮せんければならぬ。消極の心配、嫉妬、猜忌心、疑ひと云ふやうな、人を圧迫するやうな妨げを除かねばならぬ。故に先づ根本の修養をして、自由の発表が出来るやうにならねばならぬ。夫れが出来ると愉快になる。Love is unerring guide, joy is its own security. 即ち、愛は誤りなき案内者であり、愉快は其の保証人である。

私はどーしても此に、あなた方が自由が出来、同情が出来、互に喜ばしく愉快に交際が出来、協同が出来るやうにならねばならぬ。夫れが出来るには、今言つた処の六つの本能を働かして、其の結果、直覚力が養はれて、社会的活動の出来るやうにする事が大切であります。





介した成瀬記念館所蔵の成瀬手帳なども参照しながら、明らかにしていけるであろう。また、バートンの他にも、J.D.グリーンやピーボディなど、成瀬の婦一思想へ共鳴し、協会の活動に協力していった米国知識人も多くいたからこそ、ここまでアメリカでの活動が盛んになったと考えられる。一体彼らは婦一協会に何を望んでいたのだろうか。成瀬のどのような思想に共感したのだろうか。今後は、こうした課題をより丁寧に追究していくことも、課題として残っている。

なお、見城悌治編著『婦一協会の挑戦と洪沢栄一 グローバル時代の「普遍」を目指して』所収の拙稿「成瀬仁蔵の婦一思想 ―その形成過程および米国への発信―」(ミネルヴァ書房、2018年)も参照いただきたい。

(和光大学教授 つじ なおと)

- 1 小林陽子「成瀬仁蔵の蔵書調査(第2報)―カタログ・シラバスなど史料の概要―」『地域学論集』(鳥取大学地域学部紀要)第3巻第3号、2007年、308頁

## <翻訳>

1913年6月6日

親愛なる成瀬様

新聞切り抜きが同封されていた4月25日付のあなたの手紙への私の心からの感謝をお受け取りください。あなたが成し遂げた働きに対し、おめでとうと言いたいです。そして日本と西洋の国々の間の平和と一致を促進する努力が、成功のうちに終わりますようにと願っています。印刷された報告書も興味深く待っています。

敬具

成瀬仁蔵様

日本女子大学校

東京、日本

## <解説>

成瀬はアメリカ訪問の後、イギリス、フランス、ドイツと回って1913年3月に帰国しているから、上記の書簡は帰国後1ヶ月ほどして書かれたものである。帰国してからも、よき理解者バートンへ恩義を感じていたことの表れと言えるだろう。

成瀬の帰国に合わせて、米国婦一協会の代表ピーボディ（ハーバード大学教授）も来日し、婦一協会会員との懇談協議をしている。また、バートン書簡にもあるように、成瀬は婦一協会に関連する英字新聞記事の切り抜きを数種同封している。シカゴ大学史料ファイルには、4種の切り抜きが所蔵されている。新聞紙名と発行日は不明であるが、国内の婦一協会に関する動向を伝えていることから、日本で発行されている英字新聞と考えられる。ピーボディが日本女子大学の創立記念日でも講演している様子も、同封の記事で紹介されている。

## 12. まとめ

以上が、シカゴ大学に所蔵されていた史料のうち、成瀬とバートンの往復書簡の全てである。今回シカゴ大学で発見された新史料は、成瀬仁蔵が婦一思想を本格的に形にしていこうとした発端の出来事と、アメリカで婦一思想への協力者を得ようとして最終的に米国婦一協会の結成に至るまでの過程の一端を明らかにする貴重な内容を含んだものであった。

今後の課題として、1912年の成瀬のアメリカでの活動については、本文でも紹

< 翻訳 >

日本女子大学校  
東京 日本  
1913 年 4 月 25 日

親愛なる先生

東京に戻ってきて以来、あなたには感謝の意を込めて、私の世界旅行の英文報告書をお送りしたいと強く願ってきました。しかし今、これ以上報告書の完成を待たずに、私はすぐにでもあなたに手紙を書かねばならないと感じています。英文報告書は、でき次第すぐにお送りします。

ベルリンに滞在している時に、ジェローム・グリーン先生から、米国婦一協会最初の代表者であるピーボディ教授が、協会間の協力について更なる交渉をするために日本へ赴くところであると聞き、私は大変喜びました。

日本におけるピーボディ教授のお働きはとても素晴らしく良いものです。教授は、日本で必要とされている時に派遣された最適な方でした。彼の存在が私たち協会のメンバーをどれだけ勇気づけ刺激し、この運動の理想への信念を強めたことか、申すまでもありません。このことだけでなく、彼の世界的に通用する基本的原理、国家間の共感と相互理解の点における婦一協会への確信はたびたび語られ、この最も不幸で過敏になっている時代の我が国の人たちから大いに感謝されました。このことは、日本にとって偉大な出来事だったと信じています。

このような出来事全てに対して、私はあなたに最大の謝意を表します。

敬具  
成瀬仁蔵

< 1913 年 6 月成瀬宛 パートン返信原文 >

June 6, 1913

My dear Mr. Naruse:

Accept my hearty thanks for your letter of April 25th with its enclosed clippings from newspapers. I congratulate you on the work you have accomplished, and I wish you complete success in your efforts to promote peace and concord between Japan and the nations of the West. I shall await with interest your printed report.

Very truly yours,

Mr. Jinzo Naruse,

The Japan Women's University,  
Tokyo, Japan.

## 10. 1913年成瀬バートン往復書簡

シカゴ大学に所蔵されている成瀬とバートンの間で交わされた最後の書簡を紹介したい。1913年に成瀬が欧米旅行から帰国して後にバートンへ送られた書簡と、その返信である。

< 1913年4月バートン宛成瀬書簡原文 >

The Japan Women's University,  
TOKYO, JAPAN.  
April 25th, 1913.

Dear Sir:

It has been my deep desire, since I came back to Tokyo, to send you a copy of the English report of my last tour of the world, with my letter of thanks. But now, I feel that I must write you immediately, without waiting any longer for the issue of the report. And I will send you the English report as soon as it comes out.

It was my great pleasure, when I was in Berlin, to hear from Mr. Jerome Greene, that Prof. Peabody, the first official representative of the Association Concordia of America, was ready to start for Japan for the further negotiations of the co-operation between the associations.

Prof. Peabody's work in Japan has been great and good. He was just the <sup>(ママ)</sup> person to be sent to Japan at a time most needed. It is hardly necessary to tell you how his presence has encouraged and inspired the members of our Association, and strengthened their faith in the ideals of the movement. Not only this but his ideals of the fundamental world-wide principle, and his assurance of the Concordia for the sympathy and mutual understanding of the nations, expressed at several occasions, have been greatly appreciated by my country-men, at this most unfortunate and irritable time. This I believe, has done a great deal to Japan.

For all these, I should like to express my most sincere gratitude,

With best wishes,

Very truly Yours,

Jinzo Naruse

<翻訳>

ホテル・エンディコット 西81番街  
ニューヨーク市  
1912年10月29日

エドワード・バートン教授：

親愛なる先生

ご親切にも、あなたが婦一運動に好感を示してくださったことに心より感謝いたします。また、協会メンバーへの意志を表してくださった友好的なお手紙にも御礼申し上げます。

アメリカで婦一運動の精神に全面的に賛同してくださる人たちを見出すことができ、これ以上の喜びはありません。アメリカで(運動を)リードしてくれるメンバーの支援がなければこの運動は成功しないでしょう。私は感謝すると共に、あなたには協会の利益のためにあなたの影響力を引き続き働かせてくださることを願っています。

あなたの親切に感謝します。

敬具  
成瀬仁蔵

<解説>

書簡の日付が10月29日になっていることから、第7節で紹介したバートン書簡への返信と考えられる。原史料は手書きによるもので、力強い筆跡から成瀬の熱意と感謝の気持ちが伝わってくる。この時既に、成瀬はニューヨークに移動していた。

この後、いよいよ東海岸の有識者を中心に、米国婦一協会の結成へ向けて動き出す。1912年11月10日にニューヨークで成瀬同席のもと、米国婦一協会の成立準備会が開かれた。発起人幹事はC・W・エリオット(ハーバード大学名誉学長)、N・M・バトラー(コロンビア大学長)、G・A・プリントン(アマースト大学及びユニオン神学校理事)、F・H・ギディングス(コロンビア大学教授、ユニオン大学理事)、ジョン・デューイ(コロンビア大学教授)、ハミルトン・ホルト(『インディペンデント』誌主筆)、J・D・グリーン(ハーバード大学監事及び教育財団員)であった。ここで会の目的や活動の方向性について話し合った後、同年11月30日付協会発足文書には、評議員30名、会員112名が名を連ねた。そのうち、バートンが連絡をした人物から5人(ブレイクスリー、フィンリー、ケッペル、E・ブラウン、F・ブラウン)が米国婦一協会の評議員ないし会員に含まれている。

⑦ロー (Seth Low)

⑧イェール大学教授ビーチ (Harban P. Beach)

⑨イェール大学教授ウィリアムス (Frederick W. Williams)

上記のように、東海岸の有力な大学の教授や学長に宛てて、成瀬を紹介していたのであった。7番目に名前の挙がっているセス・ローはニューヨーク市長やコロンビア大学学長を歴任した有力者で、バートンからの紹介文を受け取った時はアラバマ州にあるタスキーギ大学 (Tuskegee University) の主任教授 (chairman) をしていた (1907年～1916年)。つまり、上記9人のうち、ローは唯一当時のニューヨーク市内の大学及びイェール大学関係者ではない人物であったが、この人物に成瀬の紹介状を送ったのは、恐らくニューヨーク市における人脈や影響力を考慮してのことであろう。

## 9. 1912年10月バートン宛成瀬書簡

このようなバートンの手厚い協力姿勢に対し、成瀬はニューヨークから返信を送っている。

<原文>

Hotel Endicott W 81st St.  
New York City,  
October 29, 1912

Professor Edward Burton;

My Dear Sir:

I feel most sincerely thankful for your kindness in giving me such a good sentiment in the movement of the Concordia and very cordial letter of your willingness to be a member of the Council.

Nothing has pleased me so much finding of all man in America in full accord with the spirit of the Concordia movement. It will not succeed unless it obtains the support of the leading members of America and I appreciate and hope that you will be kind enough to continue to exercise your influence for the benefit of the Council.

Thanking again

For your kindness,

I am remain

Yours very sincerely,

Jinzo Naruse.



団体の性質については、成瀬氏自身が説明するでしょう。私は、あなたが成瀬氏と会えてよかったと思うと確信していますし、彼の目的達成を援助できるのを喜ばれることでしょう。

敬具

ジョージ・H・ブレイクスリー博士

クラーク大学

ウースター、マサチューセッツ州

### <解説>

この二つのブレイクスリー宛紹介状からも、バートンにとって1909年の三泉寮での成瀬との出会いは強烈な印象を残していることが分かる。決して成瀬からの一方的な熱意だったのではなく、バートンも成瀬の思想運動に大いに期待していたのである。だからこそ、成瀬の主張する婦一協会の話聞いてやってくれ、と頼んだ。

ブレイクスリーに対しては、成瀬にクラーク大学での東洋研究集会の案内をしている同日に成瀬を紹介する書簡を送っていた。面白いことに、実は既にその時ブレイクスリーは成瀬と面会していたのだった。ボストン在住日本人と少数のアメリカ人で組織されている浪速クラブにおいて、成瀬を接待する機会があり、成瀬自身もこの時の交流を大変喜んでいた。

成瀬記念館には、実際1912年に成瀬がアメリカを訪問していた時携帯していた手帳が保管されている。成瀬は、その手帳の10月12日の欄に「ウースターに到着」と記している。つまり、バートンがブレイクスリーに書簡を送った時点で、成瀬はマサチューセッツ州にて積極的に地域の有力者と面会や懇談をしていた。しかし、バートンの協力はそれだけに留まらない。

上記2通目の紹介状はブレイクスリーだけでなく、その他9名に対して同様の文面で作成されていたことがシカゴ大学所蔵史料から判明した。原史料はタイプライティングによるもので、宛名の部分に変更されている。日付はこの9名に関しては1912年10月28日付になっている。その9名の名前について、以下列記しておく。

- ① ニューヨーク市立大学長フィンリー (John H. Finley)
- ② コロンビア大学部長ケッペル (Frederick P. Keppel)
- ③ ニューヨーク大学長ブラウン (Elmer E. Brown)
- ④ コロンビア大学教授スローン (William M. Sloane)
- ⑤ ユニオン神学校長ブラウン (Francis Brown)
- ⑥ イェール大学 Secretary ストーク (Anson Phelps Stokes)

流層とアメリカ人数名による限定的な組織ですが、ここで数日前に成瀬氏を歓待する宴会が行われました。成瀬氏は私に、同市においてもっとも成功した時間を持ってたと手紙で書いてきました。彼にとって研究集会の時にここへ戻ってくることは可能であると信じています。

もし他にも招いた方がいいとお考えの人がいましたら、私たちは喜んで心に留めておきますのでお知らせください。あなたが研究発表の間ここにいられるよう計画してくださることを望んでいますが、しかしシカゴとウースターの間を往復するのは長距離であることも認識しています。

敬具

G・H・ブレイクスリー

<バートンよりブレイクスリー宛紹介状②原文>

October 29, 1912

My dear Professor Blakeslee:

May I by this letter introduce to you one of the influential citizens of Japan whose acquaintance I had the pleasure of forming when I was in that country in 1909, Mr. Jinzo Naruse, President of the Women's University of Tokyo. Mr. Naruse is visiting this country for the purpose of studying our educational institutions, and with a view to interesting influential men of the country in the Association Concordia, the nature of which he will himself explain. I feel sure that you will be glad to meet Mr. Naruse, and to give him your help in the achievement of his purposes.

Very truly yours,

Professor George H. Blakeslee, Ph. D.,  
Clark University,  
Worcester, Mass.

<翻訳>

1912年10月29日

親愛なるブレイクスリー教授

この手紙で、1人の影響力ある日本市民をあなたに紹介いたします。その人とは、私が1909年に日本を訪れた時知り合う機会を得ました。成瀬仁蔵氏は東京にある女子大学の学長です。成瀬氏は教育機関を調査する目的でこの国を訪問中ですが、この国の有識者に帰一協会への関心を持ってもらうことも目指しています。その

ターで11月13日から16日に開かれる集会で成瀬氏にお会いできたならあなたは喜ぶだろうと思ひ、勝手ながら彼にもそのことを伝えました。成瀬氏には私が日本に滞在している時に会いました。そして彼は東洋と西洋の人たちの相互理解において、価値ある奉仕をすることができる人物であると確信しました。

敬具

追伸 成瀬氏の現住所は、ニューヨーク市日本倶楽部44番街西85丁目です。

<ブレイクスリーよりバートン宛返信原文>

October 28, 1912

Professor Ernest D. Burton,  
University of Chicago,  
Chicago, Ill.

My dear Professor Burton:

Many thanks for your kind note in regard to President Naruse. By chance we have already had the pleasure of entertaining Dr. Naruse and of assisting him in getting into touch with some of the Boston people whom he was especially anxious to meet. The Naniwa Club of that city, a rather exclusive organization of the upper class Japanese and some few Americans of that city, gave him a banquet a few days ago. He has just written me that he has had a most successful time in the city. I trust that it will be possible for him to be here again at the time of the conference.

If you should happen to think of others whom we ought to invite we should be glad indeed to know of them. I do wish that your own plans were so that you might be present during the sessions, but appreciate what a long trip it is from Chicago to Worcester and return.

Yours very sincerely,  
G. H. Blakeslee (原文自署)

<翻訳>

1912年10月28日

親愛なるバートン教授

成瀬校長をご親切にもご紹介くださり、とても感謝しています。偶然にも、私たちは既に成瀬博士を接待し、ボストンで特に成瀬氏がお会いになりたかった人たちと接する喜ばしい機会がありました。同市にある浪速クラブ、これは日本人上

バートンは更に、11月にクラーク大学で開かれる東洋に関する研究集会に参加するよう促し、更にその企画者であるブレイクスリー学長に会うように薦めている。バートンが率先して成瀬を東海岸の有識者に紹介していることから、成瀬の思想と活動に強い関心と共感を持っていたことが分かる。

#### 8. バートンによる成瀬紹介状

では、バートンがブレイクスリーらに送った紹介状とはどのようなものだったのか。その内容は以下の通りであった。

<バートンよりブレイクスリー宛紹介状①原文>

October 25, 1912

My dear President Blakeslee:

You have perhaps noticed in the public prints that Mr. Jinzo Naruse, President of the Japan Women's University, is at present in this country promoting the organization of a so-called Association Concordia. I have felt so sure that you would be glad to see Mr. Naruse at the conference to be held at Worcester November thirteenth to sixteenth that I have taken the liberty of calling his attention to it. I met Mr. Naruse when I was in Japan and have much confidence in him as a man who is disposed and able to do valuable service in the mutual understanding of oriental and occidental people.

Very truly yours,

Professor George H. Blakeslee,  
Clark University,  
Worcester, Mass.

P.S. Mr. Naruse's address at present is,  
in care of the Nippon Club, 44 West 85th Street,  
New York City.

<翻訳>

1912年10月25日

親愛なるブレイクスリー学長

恐らく公共印刷物でご存じかもしれませんが、現在日本女子大学校長成瀬仁蔵氏が本国で婦一協会と呼ばれる組織の広報活動を展開しています。私は、ウース

<翻訳>

1912年10月25日

親愛なる成瀬様

山内(繁雄)氏からの要望で、彼に帰一協会の趣意に対する私の賛同文を手渡しました。そして、あなたが望むなら私は協会のメンバーとして活動する意志があることを伝えました。

山内氏には、ニューヨーク及び以北にいる人々に送る紹介状数通を数日中に手渡すつもりです。その書状はあなたの役に立つでしょう。一つ提案させていただけるならば、11月13日から16日にマサチューセッツ州ウースターにあるクラーク大学で開かれている東洋に関する研究集会に参加すれば、あなたにとってそれが有益であることを見出すでしょう。今、クラーク大学学長ジョージ・ブレイクスリーに、あなたを紹介する手紙を書いています。彼は、この集会の責任者で、あなたの訪問を歓迎してくれるでしょう。他の人からも同じ提案をしてもらっているかもしれませんがね。今年の集会テーマは辛亥革命(the Chinese revolution)についてですが、それでも、東洋全域の状況について関心を持っている有識者たちに会うことは、あなたにとって大変興味深いことでしょう。

あなたの成功を願いつつ  
敬具

成瀬仁蔵様

日本倶楽部

44 西 85 番街、ニューヨーク

<解説>

原史料はタイプライターによる。本文中に登場する山内氏とは、山内繁雄のことであろう。山内繁雄は生物学者で、1907年にシカゴ大学において博士号(Ph.D)を取得した。1910年に帰国して東京高等師範学校教授に就任し、日本女子大学校では1915(大正4)年5月から1937(昭和2)年3月まで教員を務めて、博物、家庭博物、家庭黴菌を講じた。成瀬がシカゴに滞在していた時期、山内は文部省留学生としてシカゴに滞在していた<sup>1</sup>。『家庭週報』第511号(1919年4月11日付)で山内は、成瀬に同伴してシカゴ大学ジャドソン総長に何度も面会に行き、とうとうニューヨーク方面の知人に成瀬を紹介するとの約束を取り付けたと回想している。上記書簡ではパートナーは山内に、自身の帰一協会への賛同文を手渡した他、ニューヨーク以北にいる人々への紹介状を手渡すと書いている。山内は、成瀬の帰一協会広報活動にとっても協力的だった。

## 研究

# シカゴ大学所蔵成瀬仁蔵史料について

— 帰一思想形成の新たな側面を探る（下）

辻 直人

### 7. 1912年10月成瀬宛バートン書簡

前節で見たバートンからの成瀬書簡からちょうど1ヶ月後の10月25日に、再びバートンは成瀬へ書簡を送っている。前回同様、成瀬の活動にとっても好意的で協力的な内容となっている。以下、その原文と翻訳を紹介する。

#### <原文>

October 25, 1912

My dear Mr. Naruse:

I have handed to Mr. Yamanouchi, at his request, a statement of my approval of the general purposes of the Association Concordia, and have indicated to him that if you so desire I am willing to serve as a member of the Council.

I shall also hand to Mr. Yamanouchi in a day or two a number of letters of introduction to people in New York and further east that you may perhaps find useful. May I particularly suggest that you will find it to your advantage to be in Worcester, Massachusetts, from the 13th to the 16th of November to attend the conference on Eastern affairs which is to be held at that time at Clark University. I am writing to President George H. Blakeslee of Clark University, who has charge of this conference, about you and he will, I am sure, be glad to welcome you there at that time. Very likely others have made the same suggestion to you. The conference this year is to be on the Chinese revolution, but it will nevertheless be of distinct interest to you to meet a group of influential men who are interested in the whole Eastern situation.

With best wishes for your success, I am,

Very truly yours,

Mr. Jinzo Naruse,

Nippon Club,

44 West 85th Street, New York



展示の記録（二〇一七年度）

●成瀬記念館（目白）

シリーズ「天職に生きる」通信教育展

2017.4.8(土)～6.3(土)

創立者成瀬は、卒業生に生涯学び進歩し続けることを求めた。しかし当時の日本において、女子が高等教育を受ける機会は非常に少なかったことから、成瀬は一九〇九（明治四二）年に女子のための高等教育水準の講義録『女子大学講義』を発刊した。



それから約四〇年後、成瀬の志は引き継がれ、一九四七年（昭和二三）年に日本女子大学（新制）が発足すると、翌年には通信教育部が開講。現在は家政学部の通信教育

課程と位置付けられ、現在に至るまで多くの卒業生を輩出している。

\*本展開催に際し、通信教育課程長の定行先生をはじめ通信教育課の方々にご協力を賜りました。感謝申し上げます。

同時開催  
没後15年記念  
児童文学者いぬいとみこ展

『北極のムーシカミーシカ』などの作品で知られるいぬいとみこ（一九二四―二〇〇二）に関する小さな企画展示。児童文学を志すきっかけとなった学生時代に焦点をあてながら、写真、手紙、創作ファイルなどを展示し、物語を通して「やさしさ」生命の大切さ」を伝え続けたいぬいの歩みを紹介した。



展示室入り口

\*本展開催にあたり、いぬい氏親族の清水慎

弥氏はじめ関係の方々にご協力いただき、展示冒頭の「ごあいさつ」パネルは、いぬい氏の最晩年を知る慎弥氏の妻 清水しげみ氏に挿絵をお願いしました。改めて御礼申し上げます。

軽井沢夏季寮の生活  
— 学生が書き残した修養生活

（目白）  
5.9(金)～8.4(金)  
8/10.17.24.31  
（西生田）  
5.30(火)～8.4(金)

本学の夏季寮「三泉寮」の歴史を紹介するシリーズ展示。今回は学生が記した「軽井沢」に注目した。例えば、一九一八（大正七年）「軽井沢終結の暁」の一六回生「誓の言葉」には、宮沢トシが「祈り」と題して「障害に對して、あくまで戦はしめ給へ」と記す。夏季寮生活は「修養会」と呼ばれた大正時代から、「軽セミ（軽井沢セミナー）」と呼ばれる平成に至るまで授業内容は変化しただものの、軽井沢の自然の中で同級生や教師と語り合い、自身の内面や大学・社会生活と向き合う場として機能し続ける。明治以来の学生の手記から、三泉寮のありようがうかがわれた。



三泉齋生一同 書簡 1912(明治45)年7月16日

## 日本女子大学の災害支援

総合研究所研究課題58と連動して、日本女子大学の災害支援に関する展示を行った。一九二三(大正一二)年の関東大震災では、卒業生団体桜楓会と大学部、附属高等女学校の生徒が、それまでの社会貢献の経験を生かして上野公園の児童救護所や救済衣料

9.15(金)～  
12.20(水)



展示パネルと放射線遮蔽衣

の消毒・仕分け、東京市社会局の依頼による世帯調査などの奉仕をした。展示では当時の写真や記録、倒壊した豊明館の煉瓦などを紹介した。二〇一一年の東日本大震災については桜楓会や卒業生個人、大学の研究室や学生有志が取り組んだ支援活動を取り上げた。展示の一部は博物館実習生が担当した。

## 西村陽平と子どもたち

— 作品がうまれる時 —

本学家政学部児童学科の名誉教授である西村陽平氏は、本学で教鞭を執る傍ら多くの作品を制作されてきた。その作品は陶芸や現代美術の分野で高い評価を受け、パリ装飾美術館やビクトリア&アルバート美術館(ロンドン)など国内外の美術館に収蔵さ

2018.1.16(火)  
～3.3(土)



魔の山 2012年

氏は道端で拾った石や空き缶、廃棄予定にされていた本や机、椅子等を譲り受け、高温の窯で焼くことにより作品に生まれ変わらせる。中でも一〇〇〇度以上の高温で焼かれた本は、真っ白になり原形をとどめる。ただし焼かれることで圧縮されるため、本来の本の姿とは異なる。その変化は、多くの来館者を驚かせていた。

また1階の展示室では、氏が長年にわたり携わってきた本学附属豊明幼稚園や桜楓学園子ども造形教室、JWUほうめいこどもクラブの子どもたちの作品も紹介した。



古代社会 2012年



天平の薨 2012年

シリーズ「天職に生きる」  
成瀬記念講堂

4.11(火)  
~5.19(金)



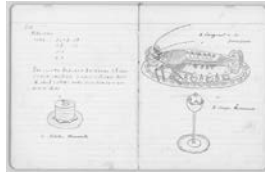
展示室の様子

豊明図書館兼講堂は、一九〇六(明治三九)年に社会貢献事業団体森村豊明会の寄付により建設された。当初は図書館となる予定だったが、講堂と兼用されることになり、二階に書架と図書室が設けられた。一九二三年の関東大震災後には講堂専用の建物となり、豊明講堂と名称を変更。一九六一年の本学創立六〇周年記念事業に伴う補修工事後には、成瀬記念講堂と呼ばれるようになる。一九七四年には文京区の有形文化財第一号に指定された。現在公開が中止されている成瀬記念講堂の歴史を紹介した。

国際人教育の原点  
— 伝統の調理実習

9.22(金)~  
12.20(水)

本学の調理実習は、創立当初から渡辺謙吉や赤堀峯吉・菊等による調理実習の授業が行われ、その後は手塚かねや大岡蔦枝、東佐誉子等卒業生の教員に受け継がれ、現在に至る。生徒たちが授業の内容を書き残した「料理ノート」には、クリスマス料理やお正月料理、雛祭り、来客料理等の作り方が美しいイラストとともに記されている。



長井湊子 家政学部第二類  
1936年卒業



高山淑子 家政学部生活芸術科  
1950年卒業

本展では「料理ノート」を紹介するとともに、食物学科飯田文子教授にご協力いただき制作した伝統のクリスマス料理を食

日本女子大学のおひなさま展

2018.1.23(火)  
~3.2(金)

品サンプルで紹介。また料理の様子を撮影し、DVDを制作、展示期間中に上映した。

恒例の「おひなさま」展では、かつて本学の学寮や卒業生宅等で飾られた、明治、大正、昭和の雛人形をご覧いただいている。七段飾り三台、安房直子氏寄贈の日本人形、さらに「三月ひなのつき」が収められた『石井桃子集1』(岩波書店)サイン本、楓寮日誌を展示した。一九六六(昭和四一)年に西生田校地に建てられた楓寮は、二〇一九年三月に閉寮予定である。日誌からは、寮の食事から節約を感じるとる寮生の様子など、学寮の和やかな場面が読み取れた。



展示風景

恒例の「おひなさま」展では、かつて本学の学寮や卒業生宅等で飾られた、明治、大正、昭和の雛人形をご覧いただいている。七段飾り三台、安房直子氏寄贈の日本人形、さらに「三月ひなのつき」が収められた『石井桃子集1』(岩波書店)サイン本、楓寮日誌を展示した。一九六六(昭和四一)年に西生田校地に建てられた楓寮は、二〇一九年三月に閉寮予定である。日誌からは、寮の食事から節約を感じるとる寮生の様子など、学寮の和やかな場面が読み取れた。

二〇一七年度活動の記録

- 見学者30名
- 5・18 オープンキャンパスの学生スタッフ30名見学
- 5・20 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 8名見学、説明
- 5・26 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 11名、教員1名見学、説明
- 5・30 展示オープン(西生田)
- 6・1 成瀬記念館分館2階に家具搬入
- 6・2 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 13名、教員2名見学、説明。  
高村光太郎作成瀬仁蔵胸像の台を搬入(5日に塗装、6日に胸像搬入・設置)
- 6・8 全国大学史資料協議会東日本総会に参加(岸本・杉崎、於 淑徳大学)
- 6・9 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 21名、教員2名見学、説明
- 6・13 展示のため東京理科大学に資料貸出し(8・24返却)
- 6・15 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 32名見学、説明
- 6・16 文京ミュージズネット全体会議出席(杉崎)
- 6・17(土) 西生田記念室、附属中学校オープンスクールのため特別開室、見学者23名
- 6・18(日)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者262名
- 6・20 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 38名、教員2名見学、説明。  
成瀬記念館運営委員会(本年度第1回)
- 6・27 成瀬記念館分館の建具説明会
- 6・29 附属豊明小学校6年生、軽井沢展見学。成瀬記念館移築検討協議会見学会(岸本)
- 6・30 附属豊明小学校6年生、軽井沢展見学
- 7・1(土) 目白会定時総会につき延長開館、見学者24名。成瀬記念館分館も公開(12時から14時30分)
- 7・6 入学課から依頼の大学見学のPTA(1校) 36名見学、説明。展示のため前年度より大同生命に貸出しの広岡浅子資料返却
- 7・10 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 48名、教員5名見学、説明。『成瀬記念館2017 No.32』(2千部)納品
- 7・11 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 38名見学、説明
- 7・13 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 34名見学、説明
- 4・1 「新任教員の集い」参加者見学(成瀬記念講堂も)、主任説明
- 4・3 西生田記念室、大学入学式につき開室、見学者41名
- 4・5 朝日新聞「訪ねる」取材
- 4・8 展示オープン(目白)
- 4・11 展示オープン(西生田)
- 4・14 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 13名、教員1名見学、説明
- 4・20 西生田記念室、創立記念式典につき開室、見学者55名
- 4・21 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 13名、教員1名見学、説明
- 4・28 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 7名、教員1名見学、説明。  
大塚警察署、銃砲検査のため来館
- 5・8 附属中学校1年生募参252名
- 5・12 入学課から依頼の大学見学の中学生(1校) 24名、教員1名見学、説明。『写真で見る成瀬仁蔵その生涯』2千部納品
- 5・13(土) 泉会定時総会につき延長開館、

- 7・18 舞台「土佐堀川」東宝関係者、成瀬記念館分館見学（8・1も）
- 7・20 全国大学史資料協議会東日本部会研究会に参加（杉崎、於東京大学）
- 8・5（土）西生田記念室、「オープンキャンパス」のため特別開館、「オープンキャンパスツアー」参加者に説明169名
- 8・6（日）「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者271名
- 8・8 本年度当館受入れ予定の博物館実習生2名に事前指導
- 8・23 舞台「土佐堀川」制作発表、新泉山館と成瀬記念館分館撮影
- 8・24 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）14名、教員1名見学、説明。入学課から依頼の大学見学の高校生とPTA（1校）35名、教員1名見学、説明
- 8・28 消防設備点検
- 8・29～9・5 博物館実習（住居学科1名、史学科1名）
- 9・1 消防設備点検（分館）
- 9・9（土）附属豊明幼稚園入園志願者説明会・附属中高説明会につき特別開館、見学者217名
- 9・15 展示オープン（目白）。成瀬記念館分館教職員向け内覧会68名見学
- 9・17（日）「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者98名
- 9・20 何香凝芸術名作選内覧会に参加（岸本・杉崎、於女子美術大学）
- 9・21 私立大学庶務課長会、見学（分館も）
- 9・22 展示オープン（西生田）。ミネルヴァ、分館の椅子納品
- 9・25 燻蒸のため資料搬出（9・29終了、搬入）
- 9・26～9・29 分館内覧会（学内関係者614名見学）
- 10・3 Preservation Technologies Japan 脱酸のため資料点検作業
- 10・4 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）32名、教員2名見学、説明
- 10・5 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」の下見のため16名見学、説明（分館も）
- 10・6 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）3名見学、説明
- 10・7（土）～8日（日）西生田記念室、十月祭につき特別開室、見学者合計49名
- 10・11～13 全国大学史資料協議会2017年度総会ならびに全国研究会に参加（杉崎、於愛知大学）
- 10・12 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）38名、教員2名見学、説明。Preservation Technologies Japan 脱酸のため資料搬出作業（11・21返却）
- 10・16 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）40名、教員1名見学、説明
- 10・18 入学課から依頼の大学見学の高校生（3校）57名、教員2名見学、説明
- 10・19 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）36名、教員2名見学、説明。附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」122名見学、説明（分館も）
- 10・20 入学課から依頼の大学見学のPTA（1校）36名、教員4名見学、説明
- 10・21（土）～22（日）目白祭につき平常通り開館、見学者合計285名、分館303名。西生田記念室、日女祭につき平常通り開室、見学者合計42名
- 10・24 入学課から依頼の大学見学のPTA（1校）70名見学、説明
- 10・25 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）9名、教員1名見学、説明
- 10・26 入学課から依頼の大学見学の高校生

- 生(1校) 29名、教員2名見学、説明
- 10・27 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(3校) 41名見学、説明
- 10・28(土) 39(日) 西生田記念室、もみじ祭につき特別開室、見学者合計23名
- 10・30 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 2名見学、説明
- 11・1 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 10名見学、説明
- 11・2 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 21名、教員1名見学、説明。  
防災訓練
- 11・7 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 44名、教員2名見学、説明。『写真で見る成瀬仁蔵その生涯』5千部納品
- 11・10 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(2校) 19名見学、説明
- 11・11 西生田記念室、附属高等学校説明会のため特別開室、見学者3名
- 11・13 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 14名、教員1名見学、説明。  
博物館実習の授業で学生14名、教員1名見学
- 11・16 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(2校) 7名見学、説明。成瀬記念館
- 分館リーフレットの写真撮影
- 11・17 カワハラ時計店、分館の時計修理完了
- 11・18 西生田記念室、附属中学校説明会のため特別開室、見学者10名
- 11・21 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(1校) 31名、教員1名見学、説明
- 11・27 博物館実習の授業で学生6名、教員1名見学
- 12・1 全国大学史資料協議会東日本部会研究会に参加(杉崎、於清泉女子大学)
- 12・6 衣の会12名分館見学
- 12・7 附属豊明小学校2年生123名見学(分館も)
- 12・9(土)「入試相談会」のため延長開館、見学者39名
- 12・13 附属豊明小学校5年生127名見学(分館も)
- 12・14 文京ミュージズフェスタ2017(於文京シビックセンター)に参加
- 12・15 入学課から依頼の大学見学の高校  
生(2校) 53名、教員5名見学、説明。  
西生田講堂運用委員会に出席(岸本)
- 12・21 東京建築史会主催東京ヘリテージマネージャー養成講座40名、分館見学
- 1・10 成瀬記念館分館リーフレット5千部納品
- 1・12 図録『西村陽平と子どもたち』作品がうまれる時』500部納品
- 1・16 展示オープン(目白)
- 1・23 展示オープン(西生田)
- 1・24 消防点検
- 1・27 西生田記念室、附属豊明小学校音楽会(於 西生田成瀬講堂)につき特別開室、見学者44名
- 1・29 成瀬先生告別講演記念瞑想会のため特別開館、見学者12名
- 2・1 3 入試期間中11時より14時の間、受験生付添者見学につき特別開館、見学者合計93名
- 2・6 豊明小学校3年生124名見学(分館も)
- 2・7 豊明小学校4年生123名見学(分館も)
- 2・8 豊明こどもクラブ17名見学、西村先生ご案内
- 2・9 東京修復保存センター、修復のため資料搬出(3・22返却)
- 2・17 西生田記念室、附属中学校新入生保護者会のため特別開館、見学者13名



3・3 創立者命日につき特別開館、見学者45名。クラブツーリズムツアー14名見学

3・12 西生田記念室利用案内千部納品

3・14 『日本女子大学史資料集第五(七)』150部納品

3・19 『成瀬記念館分館リーフレット』5千部納品

3・20 西生田記念室、大学卒業式のため特別開室、見学者71名。『成瀬仁蔵資料集1』100部納品。『成瀬記念館展示のご案内(2018年度)』2千部納品

3・24 (土)「オーブンキャンパス」のため特別開館、見学者88名

3・30 『成瀬仁蔵資料集2』100部納品

## 二〇一七年度の成瀬記念館運営委員

大場昌子館長(学長代行)、堀越栄子家政学部長、高野晴代文学部長/附属幼小担当理事、小山聡子人間社会学部長/附属中高担当理事、濱部勝理学部長、定行まり子家政学部通信教育課程長、安藤朗子教養特別講義1委員会委員長、平田由紀江教養特別講義2委員会委員長、白

杵陽図書館長、三神和子総合研究所長/成瀬記念館担当理事、大沢真知子現代女性キャリア研究所所長、坂本清恵生涯学習センター所長、蟻川芳子桜楓会理事長、古川元也成瀬記念館主事

## 二〇一七年度成瀬記念館構成メンバー

館長・大場昌子、主事・古川元也、館員・岸本美香子(主任)、杉崎友美、非常勤・大門泰子、大橋有希子、加藤きよみ、小林芳子・永山由里絵、宮内量子、山本文子(3月9日まで)

## 博物館実習

2017年度の博物館実習(第28回)は、8月29日(火)から9月5日(火)までの6日間の日程で行った。実習生は住居学科1名、史学科1名。

実習生は、雑司ヶ谷霊園や雑司が谷旧宣教師館をめぐり地域の歴史を学ぶとともに、成瀬記念館の収蔵資料や活動状況について説明を受けた。企画展「日本女子大学の災害支援」展の準備に参加し、解説パネルを一人一枚作成した。

このほか、西生田記念室ではキャンパスの歴史を学ぶとともに、企画展「国際人教育の原点―伝統の調理実習」展において、展示作業等の学芸員の基本的な業務を体験した。

## 業務統計

開館日数	目白	西生田
	一九九日	一四八日
入館者数	目白	西生田
	約七三四〇人	約一五四〇人
分館	目白	西生田
	約二〇二〇人	

## 資料提供

学園史関係質問受付および資料提供

出版・映像のための資料提供

(広報課扱い含む)

## その他

○『成瀬記念館2017 No.32』の発行  
2千部

○『西村陽平と子どもたち―作品がうまれる時』の発行 500部

○『写真で見る 成瀬仁蔵その生涯』の増刷 7千部

○成瀬記念館分館リーフレット新規制作 5千部

○成瀬記念館展示のご案内(2018年度)の制作 2千部

○『日本女子大学史資料集 第五―(七) 日本女子大学校規則(昭和二年二月―昭和六年七月)』の発行 1500部

○『成瀬仁蔵資料集1 (D266) 梅花女学校教師時代の覚え書 明治一五年』の発行 100部

○『成瀬仁蔵資料集2 (D2014) アメリカ留学時代のノート(娯楽、社会改革の方法、読書) 一八九二年』の発行 100部

○博物館実習生受入れ(2名)

○研修等参加(研究会：全国大学史資料協議会2017年度総会ならびに全国研究会、同東日本部会総会ならびに研究会に参加 その他：文京ミューズネット、展示見学など)  
資料の収集・整理・保存・媒体変換

二〇一七年度展示一覧

〔成瀬記念館〕

4・8～6・3

シリーズ「天職に生きる」

―通信教育

同時開催

没後15年記念

6・9～8・4、8・10・17・24・31

児童文学者 いぬいとみこ展

軽井沢夏季寮の生活

9・15～12・20

―学生が書き残した修養生活

日本女子大学の災害支援

1・16～3・3

西村陽平と子どもたち

―作品がうまれる時

〔西生田記念室〕

4・11～5・19

シリーズ「天職に生きる」

―成瀬記念講堂

5・30～8・4

軽井沢夏季寮の生活

―学生が書き残した修養生活

9・22～12・20

国際人教育の原点

―伝統の調理実習

1・23～3・2

日本女子大学のおひなさま展



## ■成瀬記念館より

昨年、成瀬記念館の北側に、成瀬記念館分館が開館しました。この分館は、かつては校地北西隅の不忍通り側にあり、明治三四（一九〇一）年に教師用住宅として建てられていたものです。このたび解体、復元修理を加えて百年館正面に移築されました。使用できる部材は残し、補強材を加えながら復元される様子を見ていた者にとつては感無量です。

甍った建物は、創立者成瀬仁蔵が没するまで居住した歴史を持ちます。建造物としては家具一四点とともに、平成一九（二〇〇七）年、文京区の有形文化財に指定されています。昨年一〇月の一般開館にさきがけ、学内の皆様には特別に公開日を設けましたので、見学をされた方も多いのでは。何気なく配置されている調度品にも記念館職員の厳しい考証の眼がそそがれています。当初はなんとなく余所々々しかった分館も、半年を経て校地の風景に馴染んできたようです。（古川）

二〇一五年二月に始まった分館の解体移築工事は昨年夏に完了し、成瀬の没後一〇〇年を前に出来得る限り当時の姿に戻された。成瀬の自筆史料の翻刻プロジェクトも始まり、第一弾として梅花女学校教師時代の覚え書とアメリカ留学中のノート二冊を刊行した。二〇一九年は成瀬、広岡浅子、森村市左衛門らの没後百年に当る。（岸本）

成瀬記念館分館の公開が始まった。分館一階和室の真新しい畳の香りはすがすがしく、二階の洋室から見える八重桜や紅葉はとも趣がある。分館の正面に広がる芝生、泉ブロムナードはまるで分館の庭のよう。この分館の移転を一番喜んでるのは、他ならぬ成瀬のような気がしている。（杉崎）

初めて見学に来る学部一年生、大学見学に来る高校生、ウォーキンググループ等、学内外の方々が「内閣発足」「結婚式」「きれい」と言って、当館の赤い絨毯が敷かれた階段を楽しむ姿を見る。擦り減った絨毯がいつも皆様を華やかに迎えており、私も見習わなくてはと思うが、つまるところ、絨毯を新調できないだろうかと思ってる。（永山）

## 成瀬記念館 2018 No. 33

二〇一八年七月九日

編集・発行

日本女子大学成瀬記念館

〒112-8681

東京都文京区目白台三―18―1

電話（〇三）五九八―1337六

FAX（〇三）五九八―1337八

印刷 開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町

三―26―1四

# 「ゆりの木」の思い出をお寄せください。

図書館横のゆりの木の記憶を  
遺すため、皆さまの思い出や写真、  
文書資料などを募集しています。



隣り合う7回生の記念樹「楠」と  
9回生の記念樹「ゆりの木」は  
ともに100年の時をこえて  
目白キャンパスにそそり立つ



初夏、黄色い花をつける

送り先：

**日本女子大学成瀬記念館**

〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

e-mail : kinenkan@atlas.jwu.ac.jp



日本女子大学  
成瀬記念館